

〔大乘院寺社雜事記〕

○百十七 長享二年十二月五日裏文書

大乘院殿方御木三本御進上候、巨細按察法印御房御狀ニ可見候、○前後

〔大乘院寺社雜事記〕

○百十二 政覺大僧正記 長享二年十月廿一日、

一門跡庭木少々被進之、人夫古市豊田進上、

〔大乘院寺社雜事記〕

○百十 長享二年十月廿五日、

一一昨日河原者事、自越智方申入之、先以少々御木事上之、自余人夫不調之間、重而被申京都之由返事了、

〔大乘院寺社雜事記〕

○百十八 長享三年正月十六日裏文書

先度御庭木、以竄略之御儀、被閣候事、雖不始御儀候、滿寺御扶持之至、惣別特以畏入存候、尤年預等以參賀、此由雖可申入候、公濟委細可致披露之由令申候、仍御榼貳荷、密柑二籠、白壁一合令進上候、可然之樣被洩申候者、可畏存候、左道無極候之間、可爲如何哉之由申候、以御機嫌御披露所仰候、恐々謹言、

十一月五日

公濟

御奉行所

〔大乘院寺社雜事記〕

○百十 長享二年十一月五日、

家榮大乘
院二牛車
ヲ借ル

一自内山寺、榼二荷蜜柑籠二、唐布一合進之、院主僧正取進之、今度御庭木事也、巨細返事畢、

十三日、

一越智申、木津車二兩、牛十頭分申請返事、車ハ近年無之、牛事ハ可仰付旨仰了、五頭修理目代、五頭御童子之由仰了、十文ツ、食下行、

十五日、鬼宿、

一堤進上松木四本到來、

廿日、

一越智所望申入、東山殿御庭木進上之、自奈良至木津、以車可引云々、牛十頭分申、御童子分五頭、修理目代方五頭、合十頭分遣之了、十文宛下行也、寺門力車令申之云々、無許可歟、

〔政覺大僧正記〕

○百十七 長享三年正月廿日、己卯、

一就御庭木之事、御奉書到來、難波方より進之、當年兩三度被仰出云々、

廿一日、庚辰、

一就御庭樹事、御奉書共到來、柚留木進之、

〔大乘院寺社雜事記〕

百十 長享三年正月廿一日、

一就樹木事、六ヶ所御奉書、自柚留木方進之、舍弟僧下向云々、昨日自難波方同申下題目也、

廿二日、

一就御樹木事御奉書到來、巨細之趣、柚留木難波兩人方ニ仰返事、又念比ニ顯照房ニ仰付之了、

廿六日、

一京都奉書給之、請文可進上之由仰付之、豐田古市御返事、則柚留木使ニ渡之了、

〔大乘院寺社雜事記〕

百十八 ○長享三年三月四日裏文書

明日松田方へ年始の御榼御上候へく候、ちのい候にて御入候へく候、

一木の事ニ、豐田知行在所小所事候、人夫事候のす候由、御返事申候歟、

古市のりややくくわんきい候ましく候由、さう様かる返事申候、二通共

ニ柚留木使ニ御渡了、

一巨細福智院方へ書狀御らん候、くれくれ木の事、門跡のも、成就院のも、

豊田頼英 知行小所 知依リ人 夫ナシト 云フ 古市澄胤 差出人夫ヲ

松林院のも、去年河原者ふを付候分、一本相違候ましく候、何方へか
り共、うけ給候て、ひき進上候のんする躰を、早々仰定られ候へく候、國民
方より人夫二人三人進上分よて、返々成ましく候、人夫數十人入候へ
く候、此よしをよく、御申候へく候、さ候にて、何と仰候共、門跡分□
のかり候ましく候、

（ウハ巻）ちんことこのへ

專實

〔大乘院寺社雜事記〕

百十 長享三年正月廿七日、早曉 雪下

一難波修理亮罷下、御木事也、

廿九日、

一難波修理亮上洛、御木事、巨細仰付之、古市、豐田者、如形人足事可進之云々、

一乘院方坊人十四人歟、十一人分請文在之、人足廿八人事請申之由也、此方

事條々松田并伊勢右京方仰之、略 下

晦日、

一柚留木民部卿法橋來、御奉書持來、學侶以下三輩方へ、木送進上事被仰付
之云々、奉書寺門ニ付之、三輩之由仰問、衆中向事者、古市ニ可令申之由相

文明十四年二月四日

一六二

幕府奉書
國民二人
夫ヲ督促

語、當門跡事ハ、巨細以難波、兩奉行方へ申返事旨仰了、此奉書早可遣旨仰了、

南都所々樹木運送人足事、先度成奉書之處、難澁之條、太不可然、早任兩門跡下知旨、可被致其沙汰之由、被仰出候也、仍執達如件、

十二月卅日

數秀判

宗勝判

小泉殿

楊本殿

立野、

立野ハ命ヲ奉ズ

二月朔日、

一京都人足事、小泉立野御返事到來於小泉者無力之間、難進上云々、立野任門跡御下知、不可有緩怠云々、

二日、

一小泉代官辰巳參申、京都人夫事、一兩人可進云々、先以昨日返事袖留木方了、追而仰之時、可進歟、未可引進上躰無之、

小泉モ人夫ヲ用ダス

河原者奈長下向

四日、朝雨下、

一袖留木參申、河原者下向、條々令下知之畢、

六日、

一袖留木舍弟顯照上洛、御庭木爲寺門、可引進間事、不可叶之由、御返事云々、此子細爲注進上洛之由、申於木津邊難波ニ相語、由參申入、仍興弘五師方ニ尋遣之、御奉書并寺門返事相尋可進之云々、

一古市御木人夫事、卅人分領狀申、

八日、

一立野人夫返事、不可有等閑儀之由、同篇申狀也、人夫分濟不申之、如今者一人も不可有之、

一番條人足事、御請到來、但一兩人分可進上云々、立野大略不可進上分申狀到來、

十日、

一番條以下書狀、遣袖留木方了、畏入候、寺門返事一途相待之由、申、河原者ハ一昨日歸京云々、

立野人夫ヲ出サズ

澄嵐等ノ請文

文明十四年二月四日

一六三

興福寺六
方河原者
宿所ニ發
ス向セシ
ト

文明十四年二月四日

十三日、壬寅、

一六方自辰貝蜂起集會在之云々、自學侶兩門奉行召寄集會所東室者也、柴
舜法橋、泰弘寺主隆乘寺主罷出了、學侶使節專心五師、堯藝律師出對申越^(總)
京都御庭木事、去年廻覽之處、近日河原者下向、以外次第也、河原者宿可進
發云々、了弘五師之披官人歟云々、爲學侶雖申之不承引、爲兩門跡被仰出
之者、可目出云々、仍兩三人罷向觀禪院、先以今日事申延了、

〔政覺大僧正記〕^{十七}

長享三年二月十六日、乙巳、時正、

一去十三日、就樹事六方及沙汰云々、

廿日、己酉、

一今度就樹儀、爲六方河原者宿事、嚴密申處、自一乘院御披露ノ間、如此ト云
雜說在之、然間西院庄事、被付奉書、被押云々、一乘院無存知事也、

〔大乘院寺社雜事記〕^{八十}

長享三年二月廿日、

一自一乘院殿、内々良勸給之、自公方西院庄諸公事等不可致其沙汰之由、庄
家へ被仰付之、可爲二重成之由云々、十七日御下知也、御庭木事云々、此方
儀尋承間、先日儀此間趣巨細申了、

六方集會
ハ一乘院
ノ發議ト
幕府一議
ノ領山一
院領莊一
西院領莊
押妨ス

學者河原
者河原
庭ヲ排シ
上樹ハ進
ス

一乘院ハ
河原者ニ
庭樹者ニ
知シメテ
メ

廿三日、

一京都御奉書、覺胤ニ仰合了、彼奉書又以專觀、内々一乘院殿入見參了、彼方
へハ御奉書無之、西南院へハ到來云々、今日就西院庄事、隆乘寺主京都ニ
被進之云々、

廿六日、

一慶英律師申給、就御木事、自學侶色々六方ニ申送之、河原者ハ不可叶、於木
者可進上方ハ不可有異儀之由一決了云々、一昨日一決歟、

廿七日、

傳聞、自一乘院殿、六方ニ御披露、自學侶又同申遣歟、六方返事ハ、今度西院
庄事、六方蜂起之儀ニ、御押分歟、然者御木御進上事ハ不可叶、堅可申入所
存云々、河原者令下向、所々檢智^(智)時、不被見之條、不可然旨、兼日及其沙汰了、
依此事、西院庄事及御違亂者、早々御木事ハ可有御進上歟、此兩條之内、何
ソ自學侶召雜掌柚留木法橋被糺明者、可然旨、六方申云々、西院庄御違亂、
庄下へ御奉書^與、當門跡へ木早々可進上之由御奉書ハ、同日去十七日也、
爲此儀者、必シモ六方蜂起之事、御腹立トハ不覺者也、但上意如何、

文明十四年二月四日

廿八日、

一六方昨日返事到來、自學侶牒送子細在之、西院庄混亂事、一角糺決以後、被仰合學侶、宜様ニ可有御沙汰之由申、

三月九日、夕雨

一略○中西院庄事、于今無一途、隆乘寺主在京了、

〔後法興院政家記〕

十四

長享三年二月廿四日、丑、晴、自南都隆乘上洛、先日

一乘院庭
ナ河原者
ニ見セシ
メズ
院主教玄
近衛政家
ニ頼リ謝
セントス
河原者逃
グ上ル
政家使ヲ
貞宗ニ遣
リ幹旋ス

就東山殿御庭事、南都諸坊中庭樹事、以河原者被見之處、一乘院不被見庭云々、從是東山殿以外腹立、被押西院庄、然間種々被致詫事、爲家門可執申之由、有其命、寺門六方衆以嗽々儀、可罪科河原者之由、成評定間逃上云々、仍不及見庭由被陳之、於大乘院者、被見庭云々、然者兩門跡之沙汰相違歟如何、廿五日、甲、晴陰、晚景小雨下、略○中就庭樹事、一乘院雜掌ニ相副壽官、遣伊勢守許、以奉行御披露候者、定可被尋下候間、不可有如在之由有返答、三月十一日、巳、晴、略○中一乘院庭樹事、昨日堀河局執合披露處、時宜聊宜之由、自彼局被示送、且令安堵者也、

十二日、庚、晴、就一乘院庭樹事、遣書狀於伊勢守許、カキタシ腰文也、以壽官仰

遣了、

十三日、辛、未、晴、心中念誦如例、庭樹事、不可有如在之由、勢州有返答、

廿六日、甲、晴陰、時々小雨下、四五日以前、河原者下向南都、檢知一乘院庭云々、

樹事隨御用可掘進由、自門跡有注進間、今日愚狀ニ門跡之書狀相副、遣堀河局許了、

〔大乘院寺社雜事記〕

八十

長享三年二月廿一日、

一松田對馬守使者御奉書持來、御樹事也、使者糸卷一振給之、十七日之御奉書也、又松田内狀在之、

〔政覺大僧正記〕

十七

長享三年二月廿一日、庚、戌、

一御奉書到來、樹事重而可被進由也、松田對馬守内狀在之、懇ニ申旨アリ、廿三日、壬子、

一難波ヲ爲樹事可被申、飛脚ヲ被上訖、

〔大乘院寺社雜事記〕

八十

長享三年二月廿七日、

一就御樹木事、東山殿御所望上者、梅一本可進上之、於河原者者不下向之由、六方ニ遣披露狀、明日午貝定集會可有之云々、

河原者再
ビ奈良ニ
下リ一檢
院庭ヲ乘
知ス

幕府奉書
ニナ興福寺
ニ下ス

梅ヲ進ズ

廿八日、

一難波修理亮下向、御樹木事、河原者下向間事、被押西院庄御問答一乘院殿也、一決後河原者令下向者、當門跡梅事、其時可進之、念比ニ申入條神妙旨、以松田對馬守被仰出、當門跡事時宜快然、畏入者也、西院事、色々御問答不事行之間、先以北小路令下向了云々、就中妙觀院書狀在之、

〔政覺大僧正記〕

十七 長享三年二月廿八日、丁巳、

一難波下向、樹事先以不可進由、松田對馬申云々、可然事也、

〔大乘院寺社雜事記〕

八十 長享三年三月四日、

一東院僧正兼僧楳一、双兩種持參、被相語、西南院松一本、一昨日京上、大木也、自東門出之、人夫持之、掘事ハ河原者相語而掘之之由申、手掘ニ沙汰、自木津ハ船也、自一乘院殿御進上分云々、

〔大乘院寺社雜事記〕

百二十 延徳元年九月晦日裏文書

憑候物出仕候間、御狀則殿中へ持候て候へ、御返事申候子細、今度儀ををさりの御事と心得し、被召候哉、堅被仰出者御上落存知候ハ、候へ共、今朝狀取進候はる處、御上之由承候、御虫御□□やうよて御參可有候、よのほ

一乘院西松
南院ノ松
ヲ進ム
木津ヨリ
船ニテ送ル

松田數村秀
奏者野村
春信副狀

庭樹ヲテ
掘ニシテ
進ゼシム

糸の事よて候、明日さうく御參可有候、此御使たさかき物よて候間、一筆私より申入候、恐々謹言、

三月四日

野村
春信(花押)

難波殿

松田方内の物狀下申候、かやうに申候間、ちからなく罷出候、これにてやりして御進上あれとの事と、人の申候、あまりこく申事か、り候間、下申候、恐々謹言、

三月五日

常弘(花押)

大乘院殿
御番衆中

〔政覺大僧正記〕

十七 長享三年三月六日、甲子、

一難波罷下、樹事手掘ニテ可被進由、被仰出云々、仍來九日可被上之間、人夫事古市ニ被仰出者也、

九日、丁卯、

一梅一本被上之、難波罷上、人夫事古市進上三十人、番條二人、

十一日、己巳、

一難波狀到來、樹事昨日東山殿被納云々、珍重々々、

〔大乘院寺社雜事記〕

八十 長享三年三月九日、夕雨

正曆寺及
松林院
ヨリ松林
ヲ送ラズ

一梅一本東山殿ニ進之、人足事三十人古市、二人番條、二人小泉、依仰進上之

了、路次船也、三乃公付之、難波同罷上、巨細條々仰付之、自一乘院殿、人夫事
可被進之之由云々、一向不可有之由也、仍内山松、松林院之松不上之、松林
院分四十人、内山分卅人計云々、此子細又申上了、西小田原寺之木廿五人
之由申入之、昨日五十余人可入旨、彼寺申間、一門御迷惑也、御坊人方雖被
仰之、有名無實也云々、西院庄事、于今無一途、隆乘寺主在京了、今日御問方
船十疋下行、兩人各二十疋下行、自昨日用意色々六本持二荷、ケタ木二本、
大綱四丈余、コシ、ニワ菴、ナワ以下、

一學侶御木事相尋、巨細返事了、先日自西南院御木京上了、只今不審如何、

十一日、土用

一京都兩人注進到來、御木皆被納之、珍重々々、西小田原木令相違之間、不被
納之云々、

淨瑠璃寺
メノ木ハ納
ラレズ

廿二日、

一難波修理今日上洛、昨日一乘院殿ニ參申、御樹木人夫事、尋申入處、不可有
之云々、

廿七日、

一略○中東山殿御樹木事、來秋可進由、松田書狀到來、廿五日付也、

〔大乘院寺社雜事記〕

百二十一 延徳元年十月表紙裏文書

美乃公書
狀

先段以書狀如申上候、九日この伏見ここまり候、十日のひる東山へ付候、臈
而十日日中過より、さいまやうの坂本までくさり候て、十一日この御陣へ
まいり候のんするやごこ、十二日この必々人をのせ候てよひ候歟、又我
のやり候歟のよし、被申候てくさられ候やごこ、それまての在京候へど、御
法をまよりも被仰出候間、同之こ東山へまいり候て、まち候へども、無返事
候處、今月十四日音信候て、御下候へと被仰
ふまへ
事候、必今又罷下候とて、いろうと存候と申入
捨をうるるるき事も候はず候間、無力かと成とも下候へと被仰候間、先々

文明十四年二月四日

一七二

罷下候、委細難波方可被申候、次路錢之事、事はき候て、めいどくにて候、昨日も以書狀申遣候こと、木津の者二百文借候、又宿とても二百文借、只今又あふとへも借候て、もちて下候、めいどくにて候、下人をつれ候て、いかぢとす候、然者毎日、百文つゝ、いれり候、只今の又難波殿、我らう者やと、これ候、と、我らの黒田方中間をやとい候て、あふとへはれ候て、下候、三百文又借候て、あふとへ下候、難波方上と料足のやせ候て、可給候由、内々御申候て

〔備考〕
とるた久どの

その三

〔大乘院寺社雜事記〕

百十九
東山殿御庭木方二長亭

東山殿御庭樹木間事

一 衆徒國民方ニ御奉書數通在之、自柚留木方學侶ニ付之、自學侶兩門跡ニ配分之、當門跡分、古市、豊田、番條、小泉、立野、楊本、小嶋、合七通分到來、於小嶋者、非坊人、如何旨仰之、返遣了、六通分者、則如前々、以御童子遣之、此内畏入旨申分、古市、豊田計也。

一 白真一本、真木二本、去年十月廿一日京上、人夫古市、豊田進之、各書狀就松

奉書ヲ興
福寺ニ下
ス

古市豊田
ノミ命ヲ
奉ズ

田對馬守方了、廿三日門跡へ返事到來、

一 正月廿一日、奉書六通到來、柚留木進之、日付十二月卅日也、此内古市、豊田兩人方御文言無相違、去年人足進上躰也、則仰遣之、番條、小泉、立野、楊本、去年御奉書不及御返事處、文言同様也、公儀不可然之間、此四通へ返上申、巨細柚留木舍弟顯照ニ廿二日仰了、廿六日、柚留木使參申間、豊田、古市返事渡之、豊田へ不可進之、古市畏入云々、

豊田奉命
セズ

一 正月卅日、柚留木來、奉書三通持參申、番條分無之、則三ヶ所遣之、御返事到來之間、二月二日、遣柚留木方了、番條分猶以催促之、可申届之由、柚留木申返事在之、

立野ハ畏入云々、小泉、楊本不可進云々、

立野奉命
ス

一 卅日、柚留木相語分、木共可引進旨、三輩ニ被仰付之、古市衆中事候間、罷下可申云々、去年仰平坊木事間、御奉書在之云々、爲事實者興ある次第也。

一 廿九日、以難波、巨細松田并伊勢右京方ニ仰之、於御木者可進上之、可然方ニ被仰付之、可被召旨也、於門跡者、河原者下行修羅綱以下悉皆不可成旨申了、松田主計申次云々、

文明十四年二月四日

一七三

奉書
庭樹ヲ催ス

一二月二日、難波參申、色々難義旨之間、大乘院方雜掌事辭退申旨、公方ニ申上云々、今日河原者共、芥山内山木ニ可罷下之由相語之、
一二月四日、河原者下向、袖留木同道參申、條々問答、宣舜申次之、令思案重而可參之由申、袖留木同退出了、

一六日、自學侶奉書進之、披見後返遣之、

爲兩門跡被注申所々庭樹事、就延引被差下、袖留木法橋畢、早速運送之、
樣、可被申舍之由、所被仰下也、仍執達如件、

長享三年正月廿六日

前對馬守判

沙彌判

學侶衆徒御中

一十日、古市人足三十人、番條立野、書遣袖留木方、番條二人可進之云々、小泉以代官二人可進之、立野不定、
一十二日、六方集會、河原者宿、自今以後不可沙汰云々、袖留木借住屋可進發之由申、色々計略、延引云々、是併御罰事故云々、珍事々々、又西南院木、自學侶可送進上之由、及其沙汰寂中、六方集會云々、

六方集會
河原者宿
所ニ進發
セントス

河原者ノ
與福寺ニ
入ルヲ停

一十三日、六方集會、河原者宿所可進發云々、傳害鳥屋也云々、了弘五師披官人也、以外物忿之間、自學侶兩門ニ申合、遣使者條々仰看、先以今日延引云々、向後河原者不可入立之由、自六方下知云々、以外次第、不可然事也、
一廿日、一乘院殿御使良勲、西院庄諸公事物等、不可致其沙汰、若令沙汰者、可爲二重成之由、奉書名主等中被仰付之、御庭木事云々、十四日奉書也、
一廿一日、自松田方奉書内狀到來、
一廿三日、難波召下之、廿五日上洛、松田方へ巨細仰遣之、
一廿六日、慶英律師申給、於御木者、自何方も可進上事、不可有大儀云々、河原者事ハ不可叶云々、自學侶申六方儀一決云々、
一廿八日、難波下向、御木事ハ手掘不可叶、一乘院へ御問答也、一決後可進云々、畏入者也、三日難波上洛、
一三月六日、難波下向、御木注文持來四本也、
九日、梅一本上之、人夫三十人古市、二人番條、二人小泉、西小田原松一本人持之、京上云々、三月六日、西南院松京上云々、
一三乃公申、九日ハ伏見マテ、十日晝東山殿へ參、
略

大乘院人
號ナシト

〔大乘院寺社雜事記〕

百二 延德元年九月九日、

一東山殿御庭木事、可被召之、人夫事、於于今者無之旨、申送松林院了、

十日、
一就御樹木事、奉書又到來了、不得其意者也、

十三日、
一就御庭樹事、京都返事申入之、

一 人足事、以前進上坊人、自門跡可被仰付旨云々、此條不可叶候、雅意輩共
一 自門跡雖申之、不可承引、重而可被成奉書歟、

一 門跡無力之間、雇夫等事不可叶者也、於御木者可進上、且門跡面目也、所
詮人足事、他方被仰付之、可被召上條可畏入、

一 種生松ハ小木也、自余方以雇夫可進上者、此木一本事ハ可進上、余方沙
汰ニ可依也、巨細難波覺悟之間、仰遣之、大木共事ハ中々不可事行、

一 松林院木人足事、門跡方儀、猶以人足無之間、不可有旨令申了、
十六日、

尋尊返事
坊人等命
ヲ承ケテ出
シ難シ
門跡無力
ニ依リ雇
夫ハ叶ハ
ズ

大乘院松
ヲ進ス

一松一本東山殿ニ進上之、人夫古市ニ召之處、不參俄仰天、雇夫七人上之、宰
領力陣、自四時分上之了、

次今夕松林院使來、彼院家松木事可上之、人夫事、當門跡より可出之由、松
田書狀到來、返事被成御下知門跡坊人、人足事ハ悉以進之、於于今者無之、

隨而今日進上松人夫事、以雇夫進上式之間、一向不可有之旨返事了、
〔政覺大僧正記〕 十六 延德元年九月十六日、辛未、

一松樹一本被上之、人夫雇夫ナリ、一乘院殿ヨリモ昨日被上云々
〔大乘院寺社雜事記〕 百二 延德元年九月十八日、

一 昨日京上力陣罷歸、松田返事遅々間、先以下向云々、
〔大乘院寺社雜事記〕 百二十一 延德元年十二月十四日、裏文書

先日者就勸進僧事、返事披見申候、早々被仰付候、千万悅存候、
就樹木事、對州方へ、雜掌事夏弘雖可遣候、幸常弘一兩日以前罷上候間、則申
付罷向候處、子細をい何共申候、直の雜掌を被下候へと申由候、可被如
何候哉、返々再三子細を相尋候へ共、加様申由候、巨細儀難盡狀候、定常弘可
申候、委細可被尋聞食候也、恐々謹言、

一條冬良
書狀

文明十四年二月四日

十一月十日

冬良

一七八

〔大乘院寺社雜事記〕百二

延德元年十一月十九日、
一樹木間事、巨細難波方ニ仰上之、不得其意次第、奉行申間也、

十二月十六日、

一三乃公昨夕自京都罷歸、中御庭木事ハ、來春ニ可被延引、其時早々可被

□進云々、人夫事ハ、爲公方御成敗可畏入旨申入退出、是も凡ハ自論也、

〔東寺百合文書〕〇つ一之十六

東山殿御庭木事、被遣御庭者訖、相副案内者、可被見寺中由候也、仍執達如件

九月十二日

數秀(花押)
英基(花押)

東寺雜掌

〔大乘院寺社雜事記〕百八

文明十九年六月廿八日、

一略〇御山水石共被引之、小川御所石共、室町殿御跡石大石一、仙洞御跡石

四、以外大儀共也云々、

〔實隆公記〕十二

長享二年二月廿三日、戊午晴、中今日仙洞舊跡松、(貞景)朝倉

小川第室
町第及ビ
仙洞御所
引ク庭石
朝倉眞景
仙洞御所
舊跡ノ松

奉書
東寺ニ遺シ
庭者ヲ檢シ
庭木ヲ檢シ

引之、進東山殿、其跡驚目者也、

〔實隆公記〕十三

長享三年三月三日、辛酉晴、桃花節幸甚々々、中今日花

亭舊跡松木二本、(政元)細川奉仰、牽進上東山殿云々、

〇以下、諸建築物及ビ其裝飾等ノコトニカ、ル、

〔政覺大僧正記〕一

文明十五年二月六日、

一其次カ、ル、政覺、義政ヲ山城長谷ニ訪フコトニ、浄土寺御所拜見、大閣さぬ同

御拜見、御造作驚目了、御二分大概成立了、其外一向半作、きこ不可事行者

也、

〔蔭涼軒日録〕

文明十八年十二月三日、不參、天半陰、中東府御會所事始也、

奉公衆皆獻御太刀云々、

十九年正月十一日、天快晴、中今日東府御事始有之、

〔大乘院寺社雜事記〕百八

文明十九年六月廿八日、

一東山殿御會所ハ内作以下、宸中也、主殿被立之、

〔大乘院寺社雜事記〕百十

長享元年十一月四日、

一自難波方注進狀共到來、東山殿新造御會所御屋渡云々、御禮共在之云々、

文明十四年二月四日

一七九

チ山莊ニ
運テ川政
細御所元
花ノ松ヲ
莊ニ運テ
山跡ア

殿舎二分
成就他ハ
半作

會所事始
奉公衆太
刀ヲ進メ
之ヲ賀ス

事始

會所内部
ノ造營

義政會所
ニ徙ル

文明十四年二月四日

一八〇

八日、夕小雨、甲辰、火執、三吉

一、辨舜來、昨日下向云々、京都說々共條相語、中東山殿御作事等、每事珍重

々々、

〔蔭涼軒日錄〕

長享三年正月廿六日、天快晴、中謁東府、御會所帳、茶染段子

赤段以二色縫之、乳之座赤段子也、其乳可用茶染絲乎、可用唐紅乎、又西指庵之御帳、水色、北絹、乳亦同北絹也、此之乳之色亦可為同色乎、可用別色之絲乎、相公曰、亭之帳者可為同色、御會所之帳者、茶可然乎、紅可然乎、可白意見、愚白以茶染イロエタランモ可也、又與乳同色亦可也、於其中同色者尙可乎、相公曰、然者可為同色之旨可命云々、

〔蔭涼軒日錄〕

文明十七年十二月六日、中御持佛堂南向也、其額如西芳寺

西來堂、按以可被進之由、可命于橫川之由有命、同西向有押板、其額又北向、有書院其額、三所之額可被撰之有之、先南向之額、早々可被撰、自餘之二額者、造畢以後、見彼景以可被思案云々、乃傳台命小補、

八日、中御持佛堂額事、橫川曰、方字者西指庵有之、然者可略否、相公曰、西芳寺有指東庵、又有西來堂、然者方字亦不妨、本尊彌陀三尊、堂前可有蓮池、即彌

會所帳ノ色目
西指庵ノ帳ノ色目

持佛堂ハ南向ナ景額名ナ景シニ撰バ

景三方字ヲ略スベキカ否ヲ問フ
持佛堂本尊ハ阿彌尊

陀ノ三尊景三持佛堂額字ヲ撰進ス

義政額字ヲ督ス

東求當春愛蓮ノ出典

蓮會春景一樹音淨遊典

義政東求二爪點ス

陀可撰額之由有命、乃往小補傳台命、橫川時之他、傳語于苗首座歸、

十二日、齋罷、謁東府、額御持佛堂額、東求、常春、愛蓮、自小補書立來、供台覽、則東求可歟、來年二月始此書立可獻、此外三四亦書立可被進、可被撰其中、常春者會御承事有常春者云々、遂往小補傳台命、

十八年正月十三日、栖老軒有齋、々罷、謁白河御所、中御持佛堂額之事有御尋、近日可進上之由白之、中遂往小補、額事被督之由傳命、

十五日、中御額之字、舊額三、新額五之二、昏、以冷泉殿伺之、二昏并御成書立留御前、

十七日、中齋罷、謁東相府、中以前所獻御持佛堂額、兩度分二昏見出之前

所獻東求、六祖告尹使君曰、東方人念佛求生西方、々々人念佛求生何國、常春、淨土其景常春、無寒暑、愛蓮、西芳淨土蓮華化生世間、纔發一念池中即生一華、又周茂叔有愛蓮說、此三者、去年十二月十二日供台覽、蓮會、長蘆、禪師有蓮池勝會文、見淨土文、春景、西方淨土景序常春、樹音、西方淨土有風、吹百寶行樹、其音如百千衆樂、淨遊、遠法師曰、諸君之來豈忘淨土之遊、一華、修西方人、纔發一念、池中白蓮、即生一華、此五當年十五日備台覽、今日見出二昏、東求有御爪

文明十四年二月四日

一八一

栖老軒主
益之集
ヲシテ書
セシム

持佛堂ノ
大サ

義政集
ノ書ヲ督
促ス
集箴疾ム

集證額字
ヲ集箴ニ
督ス
集箴額字
ヲ書キ進
ズ
ルヲ細小ナ
テ

文明十四年二月四日

一八二

點曰東求可也愚白橫川亦云東求可也命箴東堂令書之云々額本昏二枚賜之持歸

十九日○中略相公曰持佛堂額以東求爲可愚答曰橫川亦東求爲可云々

廿日天氣快晴○中略勝音閣之額自小早河美作守方直遣栖老軒御持佛堂南

面南北三間半東西三間半御書院在北御床間在西也

二月九日不參快晴○中略自東府榮阿爲御使來御持佛堂額東求書之一兩日

中可令進上由可督益之有命乃召賢季材相尋益之不例近日太不好五日十

日之間難書之由被白以其趣諭榮阿

十日自昨暮天降雨曉來快晴○中略東求堂額之字今明日之間可出來否箴東

堂若依不例不能書誰其書而可然乎其返答早々可白之有台命之由悰子及

歸報之乃謁東府自言雖爲箴東堂爾來不例勤書之來十二日可供台覽萬一

不適台慮可見命橫川和尚乎之由白之

十一日不參天降雨○中略齋罷往栖老軒督東求堂額字

十二日不參天氣快晴東求堂額字益之書之澤甫持之來乃以悰子奉獻○中略

自東府今朝所獻之東求堂額字細小也改書以可獻之命有之乃命栖老翁小

書キ改メ
シム
小早川元
平奉行ス

景三ナシ
テ持佛堂
北見シム

書院ノ額
ハ三字タ
ルベシ
花御所安
仁齋ノ例
ニ據ル

會所書院
ハ吟月
同渡廊床
ハ集芳室
同浴室ハ
洗塵

景三持佛
堂書院額
ヲ撰ス

早川美作守方奉之

十四日不參天快晴○中略齋罷以柏首座東求堂額之字奉獻東府小早河方渡

之午後字鐫彌次郎自東府持東求堂額字并額板來曰於當寮與愚能相計可

貼之々台命有之於爰相計寸方貼之也

三月四日天半陰齋罷橫川同途以謁東府府蓋令見東求堂北向御書院以可

被著額之用也○中略愚先廣緣迄可參直可被仰事有之乃參南之廣緣則相公

有御待愚有御立相公曰東求堂之北向御書院額可爲三字花御所御書院額

安仁齋也如其可相擇之旨可說破橫川齋之字心如何愚謹白只家ト云義也

愚又白西向床可有御額之由以前被仰出如何相公曰床前之泉水未定遂而

可命之由有之相公御歸之後引導橫川令歷覽而歸御座所諸額見之御書院

吟月渡廊床上集芳御浴室洗塵橫川曰如安仁齋云々然仁之字添之如何以

此旨聞相公則仁之一字不苦也先是仁知有之可然乎無注脚仁知著注脚其

外可相宜者四五書以可見獻之有命

七日不參快晴招小補齋時自宜竹（同前）見贈樽食籠仍招宜竹翁彦龍來留之三老

飯之於爰東求堂北向御書院額書立之仁知齋知智也開山國師西芳寺礪精

文明十四年二月四日

一八三

仁知齋ノ
出典
養恬齋ノ
出典
益謙齋ノ
出典
景三撰出
ノ額字ナ
義政ニ示
ス義政ノ批
判

義政意ニ
滿タズ更
ニ撰バシ

景三更ニ
撰進ス
義政又滿
足セズ

壁題曰、仁人自是愛山靜、智者天然樂水清、仁ト云ハ慈悲之心也、智ト云ハ才
智心也、論語曰、知者樂水、仁者樂山、知者動、仁者靜、知者樂、仁者壽、養恬齋、莊子
曰、古之治道者、以智養恬、益謙齋、易曰、天道虧盈而益於意、足室定之、
八日、自昨晚天降雨、齋罷、謁東府、東求堂御書院、仁知、養恬、益謙、以書立供台覽、
相公曰、仁者樂山、知者樂水云々、仁者有山之故、然也、知者無水則不然也、愚曰、
台言其理太深、然者養恬然乎、相公曰、西指庵書院、揭安靜、然靜字恬字雖音異、
訓相同、則如何、然於西芳額、音異、訓同、有之、然乎、愚曰、西芳寺諸額內、音異、訓同
者、無之、歟、云々、西芳寺諸額之書、立見出之、點檢、則音異、訓同者、無之、以實白之、
然者、養恬亦不可也、益謙之字、可然、音以不可乎、相公曰、益謙不然、別相擇、早々
可獻之旨、可傳、橫川云々、乃往小補傳台命、
十日、天快晴、招小補、令擇額之字、調家常飯、招桃源為光伴、額字五擇之、書立、
略、午後謁東府、以額書立供台覽、相公御成于御對面、處次之間、問愚曰、此書立
之內、孰可哉、愚近前、謹白言、宥密可乎、相公曰、諾、雖然、西指庵書院、有密室、如何、
愚曰、然也、春仁齋者、如何、相公曰、此書院、北向也、春ヲ仁ト云、則相違歟、愚又曰、
然也、餘之三名者、不契台慮也、愚曰、重可擇之、由可命、橫川、相公諾、遂往小補傳

同仁齋額

京都慈照寺所藏

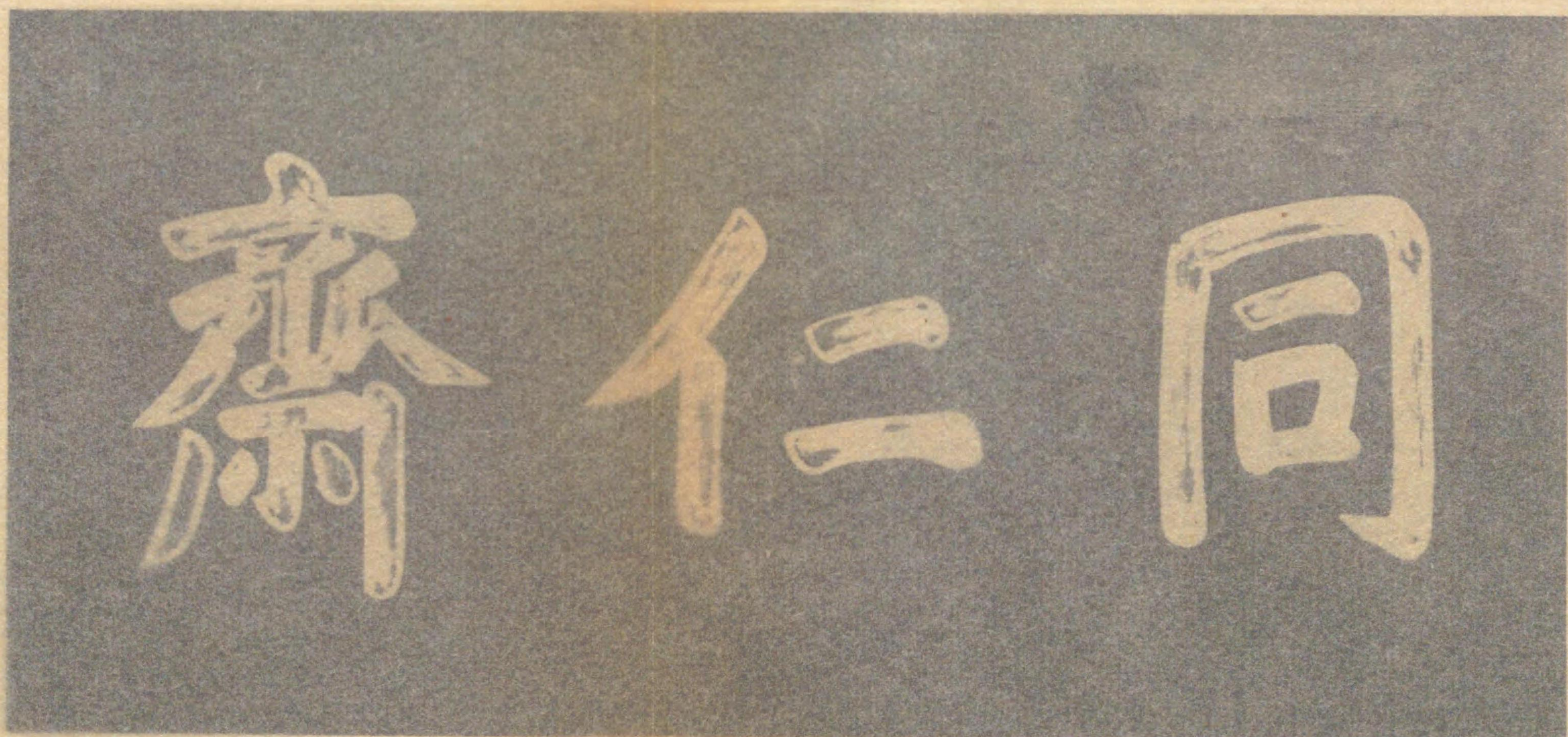
原寸

縦〇・二八八
横〇・六二〇

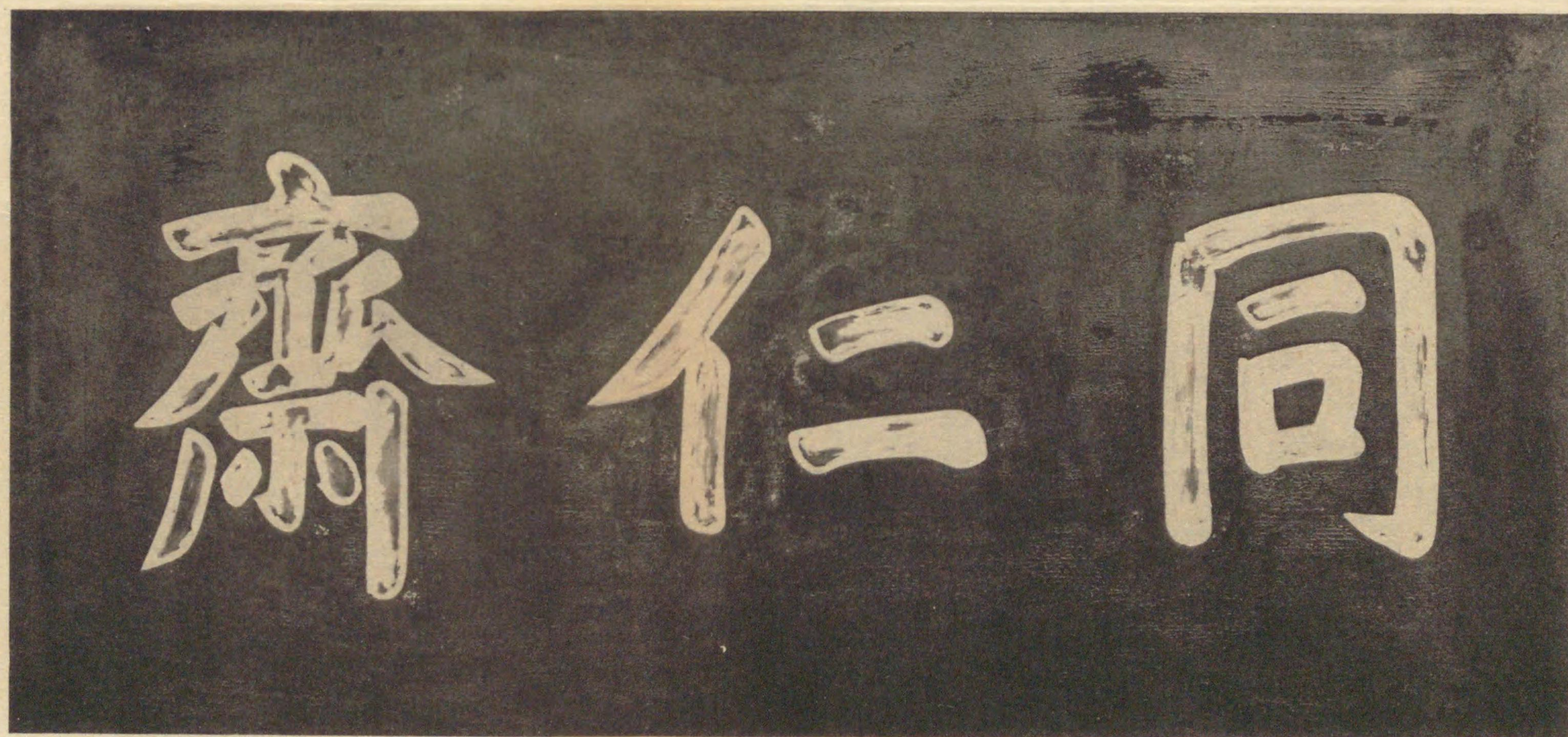
之內孰可哉。愚近前謹白言宥密可乎。相公曰。諾。雖然。西指庵書院有密室。如何。愚曰。然也。春仁齋者如何。相公曰。此書院北向也。春ヲ仁ト云。則相違歟。愚又曰。然也。餘之三名者不契台慮也。愚曰。重可擇之由可命。橫川相公諾。遂往小補傳。

同仁齋額 京都慈照寺所藏

原寸 縱〇・二八八 横〇・六二〇



京都慈照寺藏



同仁齋額
京都慈照寺所藏

原寸

横 〇・六二〇
縦 〇・二八八

版畫社刷印瓦輝京東

宥密齋ノ
 出典
 愛仁齋ノ
 出典
 逍遙齋ノ
 出典
 春仁齋ノ
 出典
 益者齋ノ
 出典
 遊初齋ノ
 出典
 宥省齋ノ
 出典
 潤猷齋ノ
 出典
 同仁齋ノ
 出典
 昭默齋ノ
 出典
 義政同仁
 齋ニ爪點
 不
 西床ノ額
 名ヲ撰進
 不

台命、宥密齋、毛詩曰、夙夜基命而宥密、注曰、宥ハ寬也、密ハ寧也、行寬仁安靜之
 政也、山谷詩曰、宥密深黃閣、愛仁、韓文曰、博愛之謂仁、逍遙、莊子有逍遙遊
 篇、逍遙トハ樂之字之心也、心ニ自樂自在之天遊アルヲ云ナリ、春仁、古人
 曰、於時爲春、在人曰仁、春ヲハ仁ト云ナリ、益者、論語曰、益者三友、又曰、益者
 三樂、益ト云ハ增心ナリ、學ノス、ミ、道ノス、ムヲ云ナリ、愚曰、益者ハ超然
 之對ニ可ナルカ爲ニ書之云、
 十二日、天晴、略中齋罷、小補書立額之字、遊初齋、莊子曰、遊物之初、百物之初、遊
 之心也、宥省齋、古人曰、冠謨於宥省、宥ハユルキ心ナリ、省ハカエリミルノ心
 ナリ、潤猷齋、古人曰、潤色大猷、猷ハヨキ道也、同仁齋、韓文曰、聖人一視而同仁、
 昭默齋、昭默堂ハ黃龍清老堂也、又維摩一默アリ、略中齋罷、謁東相府、以額之
 書立供台覽、乃御成于御對面所次間、召愚問曰、此五之内孰可哉、愚近前謹白、
 宥省、同仁、此二内可哉、相公曰、說其義、愚宣其義、相公曰、此二内孰可哉、愚云、同
 仁可哉、相公曰、即書籍之意歟、愚云、書籍亦可在其中、遂同仁齋見懸御爪點、又
 太玄關、大字點畫可直之事白之、乃命栖老、
 廿四日、天快晴、齋了謁東府、同仁齋御額之字供台覽、又東求堂西之床額名以

文明十四年二月四日

文明十四年二月四日

一八六

隔簾
近梅
搖雪
小景
一霎
△隔簾卜定

行書ニテ
書カシム

集箴隔簾
スノ額ヲ書

書立供台覽、隔簾、梅詩、隔簾、梅ト云名アリ、近梅、古人詩曰、一生不得近梅花、近梅ハ其語ヲトルナリ、搖雪、古人詩曰、試搖枝上雪、恐有夜來花、梅ヲ云也、小景、山谷小景詩アリ、一霎、古人詩曰、磯頭一霎東風轉、霎ハ小雨ナリ、相公曰、此五內隔簾可也、倭ニ翠簾ト云ハ、木葉翠ナルヲ簾ニ比スル也、漢亦然乎、愚曰、翠帷翠幙等之語ハ常用之、翠簾之語細々不用之、翡翠簾ト申ハ有之乎、木葉ニタトヘタル事ハ未知ト白、相曰、若漢ニ木葉ニ比タル事アラハ可也、愚白、引書籍逐可白、及歸相尋小補、則韻府ニ翠入簾ト云語アリ、又簾詩ニ瑣窻遮戶翠濛々ト云句アリ、又翠羽簾ト云アリ、是ハ翠羽ヲ以テ簾ヲアルナリ、翠入簾ト云ハ、木葉之翠之入簾ヲ云ナリ、簾ノタトヘトハミヘス云々、相公曰、諸額有真草、是額者行字可然也、其分可命云々、

廿五日、不參、自昨夜天降雨、翠簾書立、以悰獻東府、折二合贈汲古、隔簾定矣、乃命栖老軒、
四月十三日、天氣快晴、略○中 又隔簾之額、來十九日御內御請待、其前不可出來、然者箴東堂不例減時可書之由有之、
廿五日、天半晴、略○中 隔簾之字、栖老所書三枚、供台覽、擇出好者一枚、被出之、點

改メ書カ
シム

再ビ改メ
書カシム

隔簾額ヲ
別ラシム

持佛堂ノ
障子ニ十
牛圖ヲ畫
カシム
彌陀十
事ノ機緣
ヲ問フ

畫不好處、可直之、由有命、乃傳栖老、
廿九日、天降雨、略○中 隔簾之字、以前所獻、改點畫獻之、其外三枚獻之、擢一枚曰、字之寸方、惟可也、雖然、字太傾斜、改書以可獻之、命有之、乃命栖老、
五月十四日、不參、早旦天洒雨、自夜半洒之也、略○中 隔簾額字、箴東堂所書三枚、供台覽、一枚不可也、二枚撰可物者、可白云々、
十五日、天洒雨、略○中 隔簾額二枚內、愚撰一枚、可然、由白之、御領掌、乃召小早河美作守、可剔之、命有之、一枚被返之、

〔蔭涼軒日錄〕

文明十七年十月廿四日、齋罷、謁東府、略○中 御持佛堂本尊、可被安阿彌陀也、彼障子十枚、有之、畫十牛、可被貼也、十牛圖、可有御一覽、相尋、可進之、命有之、又即彌陀而十事、有何機緣、與橫川相議、書以可進之、命有之、件々、乃命各處、

廿五日、略○中 尋十牛圖、以悰子獻東府、又就伊之大日寺事、遣一行於伊勢、右京亮方、悰子傳之、悰子歸曰、十牛圖、以堀川殿供台覽、又雖非阿彌陀機緣、就佛之事、有十事之機緣、與橫川相議、書以可獻、由有台命、乃往小補傳命、引觀經、以書十僧之事、恰好々々、

文明十四年二月四日

一八七

廿八日、○中 十牛圖於殿中被返之、件々堀川殿奉之、

廿九日、○中 橫川和尚昨晚來曰、住持職事雖爲何在所無其望、安閑自由之趣、
持職ヲ辭スル條、及ビ同十月二十八日、景三崇壽院住持職、下爲ル條參看甘之、雖然相公尊命誠難辭、可應台命之由、被白之旨、白之、○文明十七年五月

台命橫川引之書以獻之、善導觀經集記曰、於佛像前結願、已誦阿彌陀經、念阿彌陀佛、至心發願、夜見彌陀佛身真金色、在七寶樹下、金蓮華上坐、十僧圍繞、亦各坐一寶樹下、相公御一覽協台襟、仍有台命曰、召鹿野助於私第、先令圖一人、
(管下阿)

可供台覽、夏珪筆樣歟、又馬遠筆樣歟、其外何筆樣思、按而可圖之命有之、畫昏寸方之昏一枚被出、○中召鹿野助以台命談繪事、鹿野助曰、馬遠樣可歟、雖然西指庵御書院之畫樣馬遠也、然者李龍眠樣可然歟、先一幅筆而可供台覽云々、九品之鬘陀羅一覽之、以畫之可也云々、

十一月二日、○中 晚來謁東府、鹿野助所筆之畫之草案二幅供台覽、鹿野曰、馬遠樣然乎、雖然西指庵御書院畫像馬遠樣也、然者李龍眠樣然乎、可爲上意、御畫樣相定、御物畫中有李龍眠馬遠所筆之御畫可多、一覽以可致調法云々、又九品鬘陀羅見之、爲本者可也、自淨土宗方被召寄、可賜由白之、相公曰、相阿在

寶樹下十僧圍繞
野正信方
シム

李龍眠樣
ニテ畫ク

草案ヲ進
覽ス

正信義政
架藏ノ李
龍眠畫ヲ
見ントス

正信窮困
助成ヲ請フ

正信ニ李
龍眠ノ老
子青牛圖
ヲ參考セ
シム

父喪來月十日比可出仕、々々以後自御倉取出、可被供一見也、鬘陀羅事可命調阿之命在之、

十二月八日、○中 十僧畫草案、相阿出仕以後、與相阿相議定、調之可乎之由白之、相公曰、諾、乃傳台命於鹿野助宅、

十八日、不參、招相阿、鹿野助齋之、齋罷、小補來、相共評議十僧之畫樣、有宴

廿四日、○中 十僧畫樣去十八日、橫川相阿、鹿野助、終日於愚所評議之、先一枚書以可供台覽之由、助白之、助近來困窮非恒、即書御畫非白之、如今者不可堪忍、被加御扶助者然乎、自寺家御判御禮千疋、近日可進上之事有之、雖些少先可被遣歟之由、白之、有御領掌乃傳台命於鹿野宅、

廿八日、○中 齋罷、謁東府、十僧圖草案供台覽、則人有大小、尤然也、欄干可爲一樣、畫史之以心充可付一二云々、李龍眠筆之老子青牛圖有之、命相阿可見之、

〔蔭涼軒日錄〕文明十七年十二月十四日、○中 晚來相阿來、御持佛堂御障子貼畫帟之本持來、

十五日、○中 御畫本帟遣之鹿野介方、

十八年正月十三日、栖老軒有齋、々罷、謁白河御所、○中 又十僧圖草案何頃可

出來哉之由、有御尋、定近日可出來歟之由、白之、李龍眠筆之老子青牛之圖、相阿方ニ申、可遣獵野方之由、有命（行下同シ）、遣丹公相阿宅老子圖之事、傳台命、又遣昌子獵野宅、督十僧圖之事、

十七日、○中齋罷、謁東府、○中又十僧圖十枚見出之、又持歸、御持佛堂雖半作、先可令見于獵野介之由、被仰出、仍傳台命、

十九日、○中曉來風急、雪入簷間、積地者五六寸許、東方白則雪罷、天氣快晴、○中略相公曰、○中李龍眠老子圖、相阿渡鹿野助否、答然乎云々、

廿二日、不參、天氣快晴、自獵野助方、李龍眠筆老子渡關圖三幅一對來、皆龍眠筆、本尊老子駕青牛、尹喜在傍、同御者一人、以上三人、脇左文宗惟政、其外五人、有之、以上七人、右武帝誌公、其外四人、以上六人、都合十六人在之、

廿八日、天氣快晴、○中十僧圖獵野助重而調之、以前所圖十幅皆被留御前、時有御宴、以故閑可有御覽之由、被仰出、

二月十二日、不參、天氣快晴、○中十僧十樂之事、孰可然乎、相公無議定之由、狩野助來相語、小補聽之云、十僧之事者、善導和尚觀經之集記有之、十樂事者、惠心僧統（兼下阿彌）往生要集有之、然者善導者唐人也、惠心者日本人也、我謂十僧可然乎、

持佛堂ヲ
正信ニ見
シム

李龍眠筆
老子渡關
圖

十僧十樂

十僧畫下
定ム

正信十樂
ヲ批議ス

雖然十樂事、若於經文內有之、十樂亦然也、（傳也）桃源曰、傳教弘法、惠心、（後也）泉涌寺開山此四人、佛祖統紀有傳、釋門正統亦此四人、傳有之、惠心於聖教之內二十ヶ條之不審有之間之於大唐之名聖、則道邃法師一々答之、故道邃弟子科置惠心云々、

十三日、不參、天快晴、○中晚來小補來、曰、自東相府以伊勢右京亮有御尋、曰、十僧十樂之間、孰可乎、十僧雖可皆畫樣一様也、十樂者畫樣皆相換可也、雖然十樂事者、往生要集有之、往生要集者、惠心之所製、惠心者日本人也、若十樂事、於經文之內有之、十樂者勝十僧乎如何、小補答曰、愚慮亦與台慮同一也、十樂若一々於經文內有之、尤可也、若經文無之、太不然也、右京亮亦肯之、委曲可達台聽云々、若有其沙汰者、我返答之趣、可得其意云々、傾兩盃歸矣、

十四日、不參、天快晴、○中晚來狩野助自東府來云、十僧畫相定之旨、告愚云々、助持盃云、十樂事者、神亦不肯之、昔惠心僧統（兼）造往生要集、詣賀茂社祈誓曰、爲衆生化度造之、若不叶、神慮示其驗、懇祈則有託宣曰、釋迦說教止一乘、菩薩得道在妙法、下二句忘之云、（云云）由是觀之、十樂事亦不十分事也、故惠心聽斯託宣、又造一乘要集弘之云々、時良璟上人在席聽之、旣然曰、往生要集、渡之大唐、則置

文明十四年二月四日

一九二

之於佛經之下、時虛空人取之置佛經之上、然則神之不肯理豈有之、助聽之鉗口、助歸后、瓊上人語愚曰、彼助者法華宗也、以故謗往生要集也云々、瓊上人又語曰、賀茂神體人不知之也、昔智證大師參籠于賀茂社、願見神本跡懇祈、故神一夕正衣冠出現、智證見之曰、此是垂跡也、願顯示本跡、其時成三星飛揚天云々、相傳曰、本跡者韋提希夫人云々、又曰、智證大師參籠松尾社、願見其本跡、一夕又衣冠巍然出現、非見垂跡、願顯示本跡懇祈之、故彼裾裏大通智勝佛字有之示之、

三月廿四日、天快晴、略○中十僧圖十枚、獵野助持參、愚供台覽、有御感也、

四月廿九日、天降雨、略○中舊冬十僧圖命獵野介、時御繪三幅一對爲畫本被出、

在獵野介家、昨日返之此方、今日於殿中渡之調阿、本尊文殊維摩、李龍眠筆、脇左右牛、李迪筆也、

〔蔭涼軒日録〕

文明十七年五月十日、略○中相公御逆修御壽牌草案并御先祖

御位牌草案、書以供台覽之由、被仰出、堀河殿奉之、堀曰、辰戌者相公御德日也、擇吉日見進御壽牌草案可也、予諾退矣、

十二日、不參、遣童子於（勸解由小路）在通宅、擇可獻御壽牌并御先祖御位牌草案之吉日可

賜云々、以十五十六日爲吉、其分以粽子白堀河殿、々々々曰、十五日可俞云々、十三日、略○中晚來往小補、東相公御預修牌文談之、

十五日、齋罷、謁東府、略○中相公御預修壽牌、開山國師位牌、先皇六代御位牌、御

先祖六代勝鬘勝智等御位牌八ヶ、三界牌、以上十七、々々之木地十七代三貫

九百十文、塗賃四貫六百文、彩色壹貫文、以上九貫五百十文、諸牌草案書立以

供台覽、塗彩色木地三工之摠色亦供之、其要脚以公文官錢可辨之命有之、諸

牌草案被留御前、相公曰、子細點檢、重而可被仰出、由有命、

十八日、齋罷、應東府徵、蓋前日所獻之御壽牌并諸靈御位牌、擇其可者被示之、

御壽牌預修字避之如何、相尋老者、逐可白、三界牌曾被立、牌文者三世十方諸

靈云々、雖然今所書者可也、勝智院殿御位牌、贈一品書之、可削贈之一字云々、

等持院殿御位牌與勝定、普廣兩相公可爲同前云々、

十九日、略○中東相預修之御壽牌、避預修之二字如何、問之老者云々、以故問和

尙如何、答曰、避亦無害云々、

廿一日、略○中齋罷、謁東府、略○中御壽牌除預修二字、調草案供台覽、予自言、可削

預修之字否事、問橫川、々々曰、凡逆修之牌必有預修之字、雖然削之亦無害其

文明十四年二月四日

一九三

足利氏歴代支干年號
天皇御位
牌支干年號
ナシ
集證支干年號
ナシ
政ニ問フ
雲龍院ノ檢
開山位牌
泉涌寺御位牌
シ送ル
年號支干アリ
安樂光院及ニ雲龍院
進牌ニ寫シム

謂者、爲預修或拈香或陞坐、其法語中讚揚預修之事、於官位道號法名之上不置預修之字、由是觀之、牌首無預修之字亦可也、以此旨達之、誠相契台慮者也、又御先祖諸靈御位牌有年號支干、先帝諸牌有年號無支干、可加支干否、相公曰、先規有支干者然也、予曰、安樂光院御位牌有之、有年號無支干、相公曰、然者雲龍院曾所立之御位牌、亂後殘者有之者、召寄可點檢云々、乃遣一行泉涌寺方丈、召衆僧一人、又開山御位牌可書年號否、相公曰、可隨舊例云々、仍點檢所々、開山御位牌、皆無年號也、
廿二日、○中 齋罷、泉涌寺僧來、以台命傳之、云歸寺可白住持、返答可付重來云々、
廿四日、○中 午後自泉涌寺、先帝諸尊靈御位牌書立之、出官輪勝持來、雲龍院所立之御位牌五書立之、光嚴院之御位牌無之云々、諸牌裏皆年號支干有之、六月五日、召安樂光院僧、傳相公命、蓋先帝御位牌以前六代之御靈書立之進上、此外尙先帝御位牌有之否、被書加以前之六可有御進上之由、被仰出、同雲龍院亦同前、兩院之御位牌書立二番渡之、
八日、○中 又先帝御位牌、自安樂光院六ヶ進上之、其餘伏見院御位牌有之耳、

伏見院御位牌ハカラ
ズツベカラ
壽牌位牌
ナシ
集證支干年號
ナシ
集證支干年號
ナシ
位牌ノ順

雲龍院以前所進上五ヶ、其外無之云々、以此旨達台聽、伏見院御位牌不可被立之旨有之、
九月廿二日、齋罷、謁東府、○中 御壽牌二、并開山國師御位牌一、帝王御位牌六枚、御先祖御位牌八枚、三界牌一、以上十八枚、此內御壽牌一枚、御名以朱書之、皆以草案供台覽、以朱書御名之牌者、不可有御用之由有命、牌字有大小、尤不可也、命箴東堂可令書之命有之、
廿三日、○中 御壽牌諸靈牌等草案十七枚、以恩藏主傳(集證) 柄老和尚、可被書之由、相公有尊命白之渡之、
十月廿四日、齋罷、謁東府、○中 御壽牌并御位牌十七枚、益之書之、備台覽、年號亦益之、可被書之命有之、
廿八日、齋罷、謁東府、○中 御位牌年號益之書之、供台覽、
十八年二月廿四日、天氣快晴、○中 東相公以琳公問曰、先祖位牌以遠爲上乎、愚曰、以遠爲上乎、然者其位次如何書之、供台覽、前等持院殿、寶篋院殿、鹿苑院殿、勝鬘院殿、後勝定院殿、普廣院殿、勝智院殿、慶雲院殿、如此書以供台覽、則猶能相尋可白之由有命、

先祖位牌
ノ順位年
次ニ據ル
ベキカナル
景三ニ問
景三ニ問
フ景三位
シト據ル
答フベ

文明十四年二月四日

一九六

光明院及
御位牌
レナ立
ベキカナル
集證ニ問
フ

廿七日、天氣半陰半晴、早且往小補、相公御先祖位牌可見立御持佛堂、年號次第可立乎、位次第可立乎、可相尋之有命、橫川曰、御位次第可然也、去廿四日於東府見尋于愚、愚位次第書、以供台覽、愚所白與和尚所言同、以此旨可聞相公云々、
四月十三日、天氣快晴、略中浴後謁東府、御壽牌并御位牌十七ヶ、於殿中渡調阿、
十六日、不參、天快晴、略中先日十七ヶ御位牌內年號支干一字誤、蓋明德四年癸酉也、誤癸字書壬酉、故可改壬字爲癸字之有命、
廿九日、天降雨、齋了、謁東府、略中御位牌之後年號、明德四年壬酉、壬之字誤矣、改之作癸酉以獻之、略中乃命栖老、帝王之御位牌六ヶ調之、以前進上、今別又一枚調之、可令進上、然者光明院、後伏見院崇光院、第一子院御自筆被書之、此內孰可乎、愚曰、自安樂光院以前所書立六之外、別一書立之、相尋可白云々、件々以堀川殿白之、自安樂光院後、別一書立者、點檢之、則伏見院尊儀、文保元年丁巳九月初三日云々、
五月二日、天快晴、略中愚謁東府、去年自安樂光院帝王之御位牌六書以供台

崇光院御
位牌ヲ立
ツルニ定
ム
同御位牌
ノ所在ヲ
壬生雅久
ニ問フ

雅久列聖
ヲ奉弔セ
ント奉天
皇醒酬天
答フ

大光明院
光院及
御位牌
寫シ進

覽、其後書伏見院一以示之、今度自相公光明院、後伏見院崇光院、一子院御自筆ニ書以問、愚曰、此二內孰可然乎、愚謹白、伏見院太遠、以近崇光院可然乎、之由、白、崇光院見懸御爪點、見出之、
四日、天降雨、終夜不罷及巳刻、略中午時謁東府、略中崇光院位牌之事、委曲可相尋、安樂光院并雲龍院之由、有命、愚答白、相尋安樂光院、則御位牌無之、雲龍院亦不可有之、由白間、相尋壬生之官務方、未有其左右云々、相公又曰、光明院事亦相尋、重可白之由有之、
五日、天降雨、略中自大光明寺維那來、光明院崇光院御位牌文并年號、書以可被進上之由、命之、就隗始、中隗彦老病、住持竺關西堂、去月廿八日赴江州留守云々、然者大通院承英西堂、可被知、相尋以早々返答、可承云々、略中勝鬘院携壬生官務所注、光明院崇光院事跡來、官務云、若被弔、帝王御先祖、專被弔、後醍醐天皇可然云々、官務云、光明院并崇光院、可爲法皇號、勿論也、
六日、不參、天降雨、略中大光明寺維那來、前日所諭、光明院崇光院御位牌、寺家祠堂所立牌文、光明院尊儀、康曆二年庚申六月崇光院尊儀、應永五年戊寅正月十三日崩六十歲、此二之御位牌、年月不記之、相尋藏光庵、則如此答、仍記之、壬生官務記錄、康

文明十四年二月四日

一九七

曆三年辛酉六月廿四日崩、二年申誤歟、三年酉誤歟、質之官務則官務云、誤記三年辛酉也、二年庚申改書之、然者藏光庵所錄可也、

七日、天快晴、略○中 光明院、崇光院御位牌、大光明寺所立之牌文供台覽、則如其可調之旨有之、壬生之官務所注、不被御心得之由有之、略○中 又崇光院御位牌事命箴東堂、

廿三日、天氣朦朧、略○中 崇光院御位牌、今日奉立之東求堂、調阿云々、

廿四日、不參、天氣朦朧、略○中 崇光院御位牌、今日奉安東求堂由、調阿云爾、

十九年正月十五日、天飛雪、略○中 齋罷、謁東府、略○中 愚曰、略○中 御壽牌之事可爲如何哉、相公曰、如所在世間可調之、愚曰、御壽牌可書慈照院殿乎、相公曰、諾、又

曰、御持佛堂之壽牌、書居士號者、是俗態之時之事也、逆修壽牌者可書禪定門、略○中 愚曰、然也、

長享二年三月廿三日、自半夜天降雨、齋了、謁東府、略○中 相公曰、略○中 又曰、御佛

壇有開山位牌除之、後醍醐帝御位牌可立之、又者光明院之御牌、二之內相議

吉田二位、可相定、御位牌書樣、亦與二位可相議定云々、書立二先供台覽、則後

醍醐可乎、光明院可乎、可相問二位云々、略○中 諸牌皆愚可清書之由有命、土地

崇光院御位牌
東堂立

開山位牌
醍醐天皇
兩位牌
御位牌
置
吉田見
微ノ意

兼後醍醐天皇
ハ足コト
弔フ利氏
ニ必要ト
説ク
安樂光院
天皇御位
牌ノ書樣
ヲ問フ

位牌書樣
ナ兼俱ニ
問フ

院字ヲ除
スベシ
キ天皇ト

祖師牌亦剔扶而可入泥云々、往祭場所、尋吉田二位公、々々峨冠攝衣出迎、乃傳台命、二位公曰、後醍醐帝御位牌見立之、可有御弔之事、於當家尤簡要也、御位牌書樣者、安樂光院所立之御位牌、以之爲本可也云々、

廿四日、不參、天洒細雨、略○中 安樂光院 遣折昏、後醍醐天王御位牌、書樣如何

之由尋之、返章云、當院事者、從持明院殿以來之事候、後醍醐天王御位牌事者

不存知云々、乃又遣丹公於壽德院、相尋于通泰甫、則天龍寺所立之文云、後醍

醐天王此五字也、乃書以示之、

廿五日、不參、天半陰半晴、略○中 遣丹公於吉田二位宅、後醍醐天皇御位牌如何

可書哉、安樂光寺不知云々、天龍所立牌、後是胡天皇之五字許書之、相副尊儀

可乎之由相尋、則二位云、相副尊儀、若入院之字、天皇之字不可有、略院之字、書

天皇之字可乎云々、

廿九日、天半陰、略○中 後醍醐天皇、光明院御位牌可立之事、孰可然乎之由、以前

御尋吉田二位公、公曰、後是胡天皇、於當家專御弔之事、可爲簡要之由白之、御

位牌書之供台覽、後醍醐天皇尊儀、吉田云、後是胡院、見書、可見除天皇之二

字、除院之一字、被入天皇之二字可然云々、雖然愚意、代々之御位牌七ヶ有之、

義政太
上ノ字
ヲ加フ
ト云フ

兼俱ニ
シテ

吉田兼
俱返事

後醍醐
天皇ハ
崩御故
中上皇
不可

皆有院之字無天皇之字、後是胡院尊儀、如是書供台覽、則相公曰、皆有院之字、加院之字可也、後是胡院太上皇尊儀、加太上皇之三字可也、三會院有此御位牌、可相尋云々、愚白、天龍寺所立之御位牌相尋、則如此書以示之、後是胡天皇此五字許也、三會院所立、亦復如是歟、相公曰、然加院之字并太上皇之字、可然乎之由、可相尋吉田二位之命有之、曆應二年己卯八月十六日、如此書又供台覽、御位牌書樣、爲本後光嚴院太上皇尊儀之御位牌賜之、持歸、二位公曰、太上皇者、退御位、御移于院之時謚號也、天皇者、在御位崩御之故云爾、院者追號也、卅日、不參、天半陰、略中遣丹公於吉田、問太上皇之事、二位公曰、可相尋二條殿云々、

四月朔、未乙不參、天半陰、略中自吉田二位公方、有折昏云、御位牌書樣事後醍醐天皇普通之儀候、引勘候之處、後醍醐院亦以先例有之、宜被任上意候乎、兼俱以口狀云、太上皇者謚號也、後醍醐天皇者不去御位而崩御之故、太上皇之儀不可有之、只天皇之二字可然云々、
七日、天快晴、略中晚來謁東府、略中吉田二位白之由達台聽、後是胡天皇御位牌三枚書之、供台覽、一枚後是胡天皇尊儀、二位云、院與太上皇者、被退御位後

後醍醐
天皇御
位牌ヲ
剔ラシ

土地神
祖ニテ
立ス
東求堂

贈號也、後是胡天皇者在御位崩御、不可有贈號、重祚有之故也、一枚後是胡院尊儀、若被添院之字度之上意有之者、如此御位牌可然、後是胡院、下書之先例有之、二位公以其例書以進之、供台覽、一枚後是胡院太上皇尊儀、是者太上皇之字無謂、不可然由二位白之云々、相公三枚內、後是胡天皇尊儀、抽此一枚、如此可書云々、

五月三日、不參、天快晴、略中後醍醐天皇御位牌、命彌次郎剔之、

五日、天晴、略中齋罷、謁東府、略中又問曰、後醍醐御位牌、答曰、早剔之、一度可入泥、

七日、天快晴、略中彌次郎自昨日一宿剔御位牌、今日午時持彼牌歸私宅、

廿二日、天快晴、略中又佛殿三牌剔樣、定可不好、未被入泥者可賜直點畫可進云々、

〔蔭涼軒日錄〕

長享二年二月廿四日、天快晴、略中晚來謁東府、略中堀云、相公曰、土地堂、祖師堂立板、書神名祖名、曾佛護堂亦在之、西芳寺西來堂亦在之、於東求堂可立之如何、愚曰、尤可然、相公曰、然者其長短廣狹高低等相計、作畫圖可進上、以其可被爲本云々、

土地祖師
牌ヲ諸所
ヨリ集ム

廿九日天快晴、齋罷、謁東府、土地祖師足付板之圖、大中小三枚供台覽、○中相
公曰、板圖三板內、中之圖可然乎、召具周阿往東求堂立之、以可相計云々、具周
阿相共議之、臺之分小高五分計爲低可乎之由白之、
三月朔、乙丑、不參、天快晴、○中、自東府見召僧、桂子參、土地祖師牌之板相集、以多
數可供台覽之由有命、

二日、半雨半晴、○中、晡時謁東府、土地祖師牌板五枚供台覽、猶以多數可供台
覽先被返之、

十二日、天快晴、○中、午時謁東府、諸牌板以前所獻帟圖三枚供台覽、則自御前
寸方之木出、以之爲本、其廣形模樣可相計、可命匠工、先以版并帟作其形、諸祖
諸神書之可供台覽、愚白、祖神名五許可書乎、相公曰、少乎可相計云々、牌板歸
後以能椿取寄之、件々以冷泉殿白之、

十四日、不參、天快晴、○中、小補來、則先相議東求堂土地祖師之名、皆七可然乎、
一行梵天帝釋四大天王、伊勢天照大神宮、八幡大井、春日大明神、北埜天滿大
自在天神、今宮大明神、摠日本國內大小神祇、菩提達磨圓覺大師、百丈大智禪
師、臨際慧照禪師、佛光國師、佛國々師、開山夢窓正覺國師、西天東土歷代祖師、

神名等ヲ
擇テ

如此可然乎、

十六日、不參、天快晴、○中、東求堂土地祖師之牌、以紙剪其形、書祖師土地神名
明日可供台覽也、

十七日、天快晴、○中、午時謁東府、○中、板牌、帟牌供台覽、

廿三日、自半夜天降雨、齋了、謁東府、土地祖師牌供台覽、相公曰、春日、今宮除之
住吉御靈可入之、今宮書之意旨如愚白、相公御氏神之故入之、冷泉殿白、今宮
者御方御所氏神也、相公者御靈是也、然者誤御靈書今宮之由、可有御白云々、
愚大錯也、相公又曰、即今書草案、可供台覽、乃書以供台覽、如此書以可爲本、
廿四日、不參、天洒細雨、○中、當院棟梁三郎次郎召之、命土地祖師列牌之事、
五月二日、天快晴、○中、午後謁東府、○中、御持佛堂土地祖師之牌并後醍醐天
皇御位牌、同書草案供台覽、土地祖師草案字大小也、已前所供台覽之牌字可
也、改書以可供台覽、

三日、不參、天快晴、○中、土地祖師之牌書之、

五日、天晴、○中、齋罷、謁東府、○中、土地祖師牌書以供台覽、可也、何比可出來哉、

答曰、自明日可剔、其可入泥、來十二三日比可出來云々、

草案ヲ進
ズ、春日今宮
ヲ除キ住吉
御靈ヲ入レシム
御靈社ハ
義政ノ氏
神
棟梁三郎
次郎

文明十四年二月四日

二〇四

狩野正信
ヲ入レシ
ニ

六日、不參、天降雨、○中自今朝彌次郎來、剔土地祖師堂之牌、
十一日、不參、天快晴、○中齋前彌次郎土地祖師之御位牌剔了持之來、愚一見
而命之、改字之點畫、午後出來、以昌子、贈狩野大炊助宅、命泥之事、
十三日、天快晴、齋前以能椿、東求堂土地祖師牌爲一見、遣妙嚴院、蓋有前約之
故如此、齋罷謁東府、土地祖師牌、後醍醐天皇御位牌、供台覽、相契台慮、乃命調
阿見立之東求堂、琳少年自御前出于御末、於諸人前話云、相公曰、今曉御夢中、
此土地祖師之牌、并後醍醐天皇御位牌、愚持之參、命調阿、周阿見取其寸方、見
立御持佛堂云々、皆奇特々々云爾、

景三ナシ
ヲ持テ
佛堂
ノ硯
ヲ撰
バシ
銘

〔蔭涼軒日錄〕

文明十八年正月廿日、天氣快晴、○中宴了、謁東相府、○中御持

佛堂之御硯、其文有水、以荷葉爲墨池、同蓮華亦有之、其銘二字撰之、可獻之由
可命小補之旨、以調阿被仰出、愚以失念未傳小補、今日於殿中調阿督之、及歸
乃以棕子、傳台命於小補、々々曰、蓮池可乎云々、

廿八日、天氣快晴、○中午後謁東相府、御持佛堂可被置御硯、名橫川所撰、書以
供台覽、玉井退之詩、太華峰頭玉井蓮、ト云句アリ、杜詩硯寒金井水、ト云句ア
リ、又硯ニ玉質至德ト云語アリ、液池、太液池ハ蓮池ノ名ナリ、蓮池硯ヲ硯池

足利義政木像

京都慈照寺安置

原寸 身長

一、八五



足利義政木像

京都慈照寺安置

原寸身長

一・一八五



廿八日、天氣快晴、略○中
午後謁東相府、御持佛堂可被置、御硯、名横川所撰、書以
供台覽、玉井退之詩、太華峰頭玉井蓮ト云句アリ、杜詩、硯寒金井水ト云句ア
リ、又硯ニ玉質至徳ト云語アリ、液池、太液池ハ蓮池ノ名ナリ、蓮池硯ヲ硯池

足利義政木像 京都慈照寺安置

原寸 身長

一・一八五



供台覽玉井退之詩太華峰頭玉井蓮ト云句アリ杜詩硯寒金井水ト云句アリ又硯ニ玉質至徳ト云語アリ液池太液池ハ蓮池ノ名ナリ蓮池硯ヲ硯池

玉井下銘

集箴銘ナ
書ス

持佛堂二
重小棚ニ
置クベキ
書籍ヲ擇
バシム

持佛堂書
院ノ文臺
ニ置クベ
キ書ヲ索
ム
集證蓮室
集ヲ進ム

ト云、墨池ト云、又白蓮池アリ、此三内、玉井可然乎之由、横川曰、愚亦白、蓋可爲台慮之由、謹白之、

三月四日、天半陰、齋罷、横川同途以謁東相府、略○中、愚先參御末、以冷泉殿、獻碧桃兩枝、且御硯銘、玉井之字、箴東堂所筆、古文字三枚、真之字三枚、草之字三枚、獻之云、先是古文字之字、可然由白之、雖然此三樣之内、可被任台慮之由、白之、古文真字擇二枚、以出之、曰、此内孰可然乎、可相計、愚謹白、雖爲孰契台慮者、被定之、又曰、然者相尋、横川以可相定、略○中、及歸、以惊子傳台命於小補、玉井之字、古文可然乎之由、被白之、

廿八日、天快晴、齋罷、謁東府、東求堂御書院、被置二重小棚、宜見置之書、可擇之、之命、有之、乃於御對面、所西六間、擇書、東坡文集廿冊、方輿勝覽十五冊、韻會十冊、李白詩七冊、大廣益會玉篇五冊、以上五部、奉置之、

四月十七日、天降雨、略○中、東求堂御書院文臺、可被置、非經錄之本一冊、可尋進、由有命、愚以蓮室集一冊、進上之、殊此集中、有懷淨土十首詩、恰好之由、白之、相公曰、尤然、被留之、又於佛前、釣燈臺二用之處、有之否之由、有御尋、愚曰、大略一用之、或佛正面有之、或佛之左邊有之云々、

文明十四年二月四日

地藏繪テ

涅槃像ヲ

狩野正信

文明十四年二月四日

二〇六

五月十九日、天快晴、略中於東求堂地藏其他二尊、可掛繪像、彼二尊何佛可然哉、以調阿有御尋、愚云、與橫川相談可白云々、

十九年二月十五日、天快晴、齋了、謁東府、略中東求堂新涅槃像、自十三日見掛之、愚一覽之事、琳公達台聽、可令一覽之有尊命、琳公調阿前引入東求堂、一覽而驚目、狩野大炊助筆之、

長享二年十一月四日、不參、天快晴、略中東府涅槃像之箱蓋、自調阿方來、云橫川書之、書加箱之字、可進上由、可命橫川云々、乃遣之小補、

五日、不參、天晴、略中齋罷遣桂子於東府、略中又涅槃像箱蓋、書箱之字於別帑、遣之調阿方、以前如此云々、略中桂子歸云、略中調阿以他適之故、箱之蓋箱之字、遣調阿宅云々、

〔蔭涼軒日録〕

文明十八年二月十六日、天氣快晴、略中相公曰、西指庵前立門、

如指東庵前有向上關、仍相擬向上關、額事可命橫川之由有命、十七日、不參、天快晴、早且往小補軒、西指庵門之額事、昨日於等持寺有台命、傳之小補、

廿三日、天快晴、略中自小補西指庵門額書立來、太玄關、臨濟有三玄門、又揚雄

西指庵ノ額ナシ
門ニ額ナシ
掲ゲント
シ景三
シテ撰
景三撰
ス撰進

太玄關
三玄關
直心關

鐵牛關
白雲關
上等關
大通關

太玄關ノ
注チ徴ス

景三ノ注

有太玄經、三玄關、同上、直心關、達磨曰、直指人心、又古人曰、直心是道場、鐵牛（關下同シ）、

古人曰、祖師心印如鐵牛機、白雲一雲門、有三句關、上等一、三種僧有上等中等、下等、大通關、法華有大通智勝佛、又寺名有大通、

廿四日、天氣快晴、略中西指庵門額書立等、以春日殿奉供台覽、皆契台慮、略中

太玄關注有字來歷耳、太玄之所謂細記、以可進之命有之、乃往小補傳台命、廿六日、不參、天快晴、略中東相公曰、太玄關事細注之、可進之由、可命小補之旨、

去廿四日被仰出、乃傳台命小補、々々今朝注之持來、太玄ハハナハタフカキナリ、漢ノ揚雄ト云人、周易ニナソラヘテ、太極無極ノ至極シタル道理ヲ説ケリ、是ヲ太玄經ト云ナリ、儒者ノ道ハコ、ニキワマレリ、今太玄關ト云ハ、

吾ガ宗ニ玄關ト云コトアリ、故ニ寺院ニ玄關アリ、其心ハ禪關ト同シ、佛祖向上ノ法門ヲ表セリ、太玄ハ語ト字トヲ借テ名ツケタリ、三玄ハ臨濟ノ法

門ニ、第一玄、第二玄、第三玄アリ、又體中玄、句中玄、玄中玄アリ、臨濟ノ曰、一句語ニ須具三玄門、一玄門、須具三要云々、故三玄三要ト云コトアリ、三玄三要

ハイツレモ臨濟宗ノ佛法建立ノ様子、玄妙ノ道理ナリ、簡要ノ至極ナリ、佛祖ノ心肝骨髓トナル法門ナリ、一番ノ體中玄ト云ハ、吾宗法體ノ悟ノ至極

文明十四年二月四日

二〇七

集箴ヲシ
テ太玄關
カシム書

西指庵眠
製ノ帳ヲ
ス

集箴西指
庵棚ニ置
クベキ書
籍ヲ進

シタル處ナリ、句中玄ト云ハ、悟テ後ハ言句ヲ以テ說法シタル處ナリ、此體
中句中ノ二句ヲハナレテ、兩邊ニモト、コヲラサル處ヲ、玄中玄ト云ナリ、
玄ノ道理至極シタルナリ、
廿七日、天氣半陰半晴、略○中齋罷、謁東府、略○中太玄關假名注脚供台覽、太玄關
定矣、仍見出向上關舊額并太玄關額寸法、昏、如向上關額之字、大行字、箴東堂
可書之命有之、御先祖位牌昭穆之字、位次第相定矣、
廿九日、天半陰半晴、齋罷、謁東府、略○中太玄關額書事、來月七日以前可供台覽
由有命、

三月四日、天半陰、齋罷、橫川同途、以謁東相府、略○中又太玄關行字、箴東堂所筆
獻之、契台慮、向上關舊額奉返之、

〔蔭涼軒日錄〕

文明十七年四月九日、略○中棕藏主并良本監寺西指庵御眠藏

新帳縫之、以乃持參於西指庵、兩人補其未成之處、及初更歸、略○中予今日初入
西指庵一見之、實天下奇觀也、

十日、略○中粽子以西指庵新帳、謁東府、

十七日、略○中西指庵御棚書籍書立益之和尙被書之、乃傳調阿方、

超然亭

山鹿

景三ヲシ
テ觀音殿
ノ額名ヲ
撰バシム
潮音閣

明年觀音
殿ヲ造ラ

義政選佛
場ノ意ヲ
集證ニ

七月八日、略○中予以戲言話琳公云、人皆登超然亭見之、予未見之、蓋畏相公也
云々、琳公乃以予戲言、被達台聽、仍可登覽之、旨有尊命、琳公、權田、調阿、周阿、數
輩被相副予、可登之、由被仰付、山路嶮難之故、脫履著鞋、先入西指庵一覽、直登
超然亭於亭上有宴、蓋以台命也、略○中宴中亭後山鹿十二頭有之、徘徊不恐人
實可愛者也、

長享二年二月三日、天快晴、略○中謁東府、略○中相公曰、花御所觀音殿、外額勝音
閣、內額潮音洞、鹿苑寺金堂、亦內外額二有之、此御所觀音殿、內乎外乎、額一可
揭之、內可然乎、外可然乎、云々、愚謹白、一額時者、外可然之由、白之、相公曰、可爲
其分、然者、二重之內、一ニハ潮音閣ト可揭、元ハ洞云々、今一重之額、可思按之
由、可命橫川云々、

十月四日、天晴、略○中晚來謁東府、觀音殿二重之額、潮音閣可然、被思食云々、西
芳寺瑠璃殿之樣、仁下之重、可有坐禪之床、瑠璃殿四方之壁、葎也、此御所者、サ
マニセララルヘシ、其カハリマテナリ、瑠璃殿ト云樣ナル額ヲ可被著、明年觀
音殿可立、然者、額事、閑按シテ可被付、
十二月晦日、略○中茶了、愚先赴東府、略○中相公問曰、選佛場義如何、以實奉答、相

問フ
ハ一重ノ額
心空殿
卜定△

觀音像ヲ
造ル

額ノ木地
ヲ擇バシ
△

文明十四年二月四日

二一〇

公曰以前横川書立而見進額中心空殿者可然乎愚白心空及第自得法第一之義也先々可見定之由有命愚白横川亦此心空之由白之愚意亦同前云々又問曰及第之意如何又以實奉答之

三年正月廿六日天快晴○中謁東府○中又舊冬横川所進之觀音殿之額書立見出之曰以前如御定心空殿可然乎横川謂如何愚白心空殿近比可然横川亦以心空殿太爲可愚所存亦心空尤可也相公曰然者以心空相定之旨可諭横川其後此書立可返進上云々懷書立而歸伴々堀河殿披露之可被造觀音觀音之畫樣佛師持參而供台覽○中遣桂子於小補額書立示之云心空相定珍重額板出來者可被書云々書立乃桂子持來小補云心空相定尤可也云々

七月廿八日○中甲天快晴○中午時謁東府○中自御前心空殿之御額木地乎午粉地乎塗地乎字亦青乎白乎三樣有御書立被出之御自筆也愚與横川相議定云々

晦日天快晴○中午時謁東府以堀河殿心空殿額之色與横川相議三之內一ニ横川懸點進上一番地黑漆字○中白乎二番地胡粉字○中青西芳寺勵精額如之三

心空殿ノ
草書ニ
景三書進
ス

書キ改メ
シム

文明十四年二月四日

二一一

番地木地字青西芳寺瑠璃殿如之相公御自筆被書被出之此內第二番可然乎横川點之相公曰勵精額在內此額可在外如何與横川又可相議云々

八月三日天快晴○中齋罷謁東府以堀河殿額書立進之地胡粉字青勵精之額之色也是色可然由横川白之云々有御意得云々

廿九日天晴○中又今晨自相公有命曰西芳寺瑠璃殿之額者草字也心空殿額亦可爲草字額帛被出之先別帛小草字書之三四可有進上有御一覽草字之可然比可被仰出非字之大小之儀草之比之事也乃折帛三書草字

九月三日天晴○中齋罷謁東府小補所筆心空殿額之字供台覽三字共不稱台慮可重書之旨有命

四日天快晴○中午前謁東府○中略心空殿之字小補改書以進上一々不叶台慮重可改書由被仰出○中往小補心空殿之草字皆不叶台慮重書以可有進上由白之

十日天快晴○中謁東府○中略心空殿草字供台覽以上首爲可愚懸爪點皆以堀河殿白之○中遣昌子於小補心空殿之草字契台慮可被置其方額板出來時可被取出云々補云得其意留書立

廿三日天晴略○中自伊勢右京公方觀音殿閣上之額帑一枚贈之云此帑額之內乘也云々字之大小者與橫川可相議定云々

廿六日天快晴略○中謁東府略○中又觀音殿上下之額何比可書哉答曰橫川爾來不例也以故延引可督之相公曰加養生可書之旨可白云々

廿八日不參天快晴略○中先往小補東府觀音殿二階額潮音閣料帑自伊勢右京公來持之傳命小補

延德元年十月朔乙酉天快晴略○中往小補額事督之蓋台命也

二日天快晴略○中夜來以丹公額之字督之小補明日書可進云々

三日不參天快晴略○中自小補觀音殿額二書之來二階潮音閣真字也下心空殿草字也

心空閣ノ額字ヲ剔

潮音閣ノ字ハ真書改

四日天快晴略○中謁東府潮音閣心空殿額之字供台覽心空殿者叶台慮乃命台阿被剔之潮音閣者勝音閣與相配節中而可書之由以前被仰出御白次失念帑許被出之條字大小也被出勝音閣額今額與相配則今之額帑者橫豎皆八分許小也相副舊額可命橫川之命有之持舊額歸略○中及歸舊額并心空殿清書又帑遣之小補傳命

六日不參略○中自小補潮音閣之額清書贈之

七日不參天快晴略○中今晨潮音閣之額改書獻東府使丹公橫川所筆也

〔蔭涼軒日錄〕長享二年六月八日天快晴略○中乘晚涼謁東府略○中又觀音殿

觀音殿ニ敷クベキ席ノ大サヲ集證ニシテ

席其廣何程可然乎之由有御尋愚白凡坐具三尺二三寸之物也然常之六尺五寸間席不可有子細卓者可置席之外也云々有御意得云々

〔蔭涼軒日錄〕長享二年五月廿六日不參天快晴略○中自調阿折帑到來云曾

觀音殿修點燭ノ時ノ諸御倉并原門尉

於觀音殿修懺之時所點燭如何以季材相尋御倉并原五郎左衛門尉老宿也彼云御懺法時燭者自御倉下行之御前下白燭也一挺七十文之燭也四挺下行之下覺也又相尋堂司則云本尊前一所點燭滿散又點新燭燭者二挺也開山鹿前皆油火也一挺五十文之燭也云々

廿九日不參天快晴略○中自東府被召僧令桂子謁相公曰觀音殿燭事其色何

哉摠而白燭用之乎紅燭用之乎云々乃以五十錢紅燭一挺供之台覽云凡寺

家法會又者會合等皆用紅燭自然自遠國白燭上則內々點之事有之云々

〔蔭涼軒日錄〕長享元年閏十一月十八日天快晴略○中午時謁東府略○中又相

公曰來月十二三日之間召具橫川可參御泉殿令一覽額之事可相議云々

景三山莊
ヲ一覽ス

西方淨土
ト謂フベシ
掬清亭畔
狐鳴ク

棟梁孫又
次郎
弄清亭

廿八日天快晴略○中齋罷謁東府略○中相公曰來十二三日間携橫川可參御泉殿額之事可相議定云々愚十日許痰氣煩之故不參之由白之

十二月十三日天快晴略○中補和尙同途謁東府略○中御會所并泉殿與小補

可一見之調阿可引導之由有命乃參御會所所々歷覽次御泉殿次東求堂實

可謂西方淨土者也時埜狐掬清亭畔數聲有之愚向調阿云諺云冬狐打鳴云

々大吉事也云々調阿一咲橫川所白謹伺之御泉殿額數如何可被揭之在所

内乎又有御好之字者承即其可致其覺悟云々相公曰額一也添亭之字三字

云々殿之内北頰可被揭也字之事者可被相計云々愚白以前御泉殿所揭之

古額有之由□字別彌次郎話之可命一見云々乃被召棟梁孫又次郎被取寄

古額見之則弄清亭之三字益之翁所筆也小補一見愚持之歸件々以左京大

夫殿白之

十四日不參天晴略○中今午自東府賜使棟梁孫又次郎曰先日所命泉殿御額

事丁寧可相語愚之命有之額可被揭在所以前左京大夫殿所承相違也御泉

殿内南頰可被揭字者可爲北向云々乃以桂子□報小補也

十九日天晴略○中早且自小補額字已前書立略○中見贈之略○中御泉殿額書立

景三ナシ
テ書セシ

竹亭ノ額
ヲ擇バシ

以前七相加三以琳公供台覽自御前被出御自筆書立弄清勝於掬清云々愚

白尤勝然者弄清亭三字命橫川可令書又被書其帑背寒玉漱蘚是ハ竹亭額

可乎孰可然哉愚白寒玉可乎又曰橫川所擇十之内孰可哉答曰宜暑可乎又

曰橫川以樵溪爲可如何答曰將謂不叶台慮以故宜暑可乎白也又曰宜暑樵

溪寒玉漱蘚孰可乎可相議橫川此四者不可然者又別可相擇之旨可命橫川

竹亭之額帑一枚被出之持歸晚來以桂子掬清亭額可被書之命傳之小補乃

弄清舊額并額帑一束遣之

廿日自十九日初夜天洒雨今朝快晴早且自調阿報云掬清亭額不可被書愚

早々可參之命有之愚乃謁東府

廿二日不參天快晴略○中晚來小補來竹亭額字擇之持來琴滴香碧畫寒此三

掛爪點令清書

廿三日不參天快晴略○中齋罷小補來蓋弄清亭大三字書之持來有小宴愚依

不例令謁桂子於東府弄清亭清書同古額弄清亭琴滴香碧畫寒書立同以前自

御前被出御自筆之書立寒玉漱蘚獻之白琴滴可然漱蘚亦可然乎可爲台慮

寒玉者非水竹也竹亭之前後若有竹寒玉亦可也無竹者不可也云々以此旨

可達台聽云々、略○中 桂子自東府歸、弄清亭之字□云々、被返之、略○中 竹亭之額事、愚參侍時可被仰談、先々皆被返書立、略○中 弄清亭額昏相調、以桂子傳台命小補、

廿四日、天快晴、略○中 晡時謁東府、弄清亭橫川清書供台覽、則鹿苑寺觀音殿潮音洞之額、如其大可令書、昨日其分以周阿傳命使者之僧、不達否、愚白、觀音殿之額事、被仰出分不存、定使僧失念乎、又竹亭之額、琴滴、香碧、畫寒、橫川所擇以書立伺之、則孰可哉、愚白、琴滴可乎、又者、漱蘇可乎、又此二內孰可乎、愚白、漱蘇可乎、意漱蘇、寒玉者、以前相公御自筆、被書被出之、故漱蘇可然白也、寒玉竹也、亭之前後有竹者可也、無竹者不可也、漱蘇者二字連結之語也、琴滴者以□□內取合之語也、然者、尚漱蘇可乎、相公曰、然者、漱蘇之二字、命橫川可令書之、可爲草字云々、略○中 漱蘇之字、草字可被書之、命有之、由、以桂子傳小補、

廿五日、不參、天快晴、略○中 遣折簡於鹿苑寺、取寄觀音殿之額、潮音洞、相副領昏、以桂子、小補字之大、如潮音洞字、可被書之、命有之云々、

廿六日、不參、天快晴、略○中 自東府被督額之清書、以桂子督小補、桂子乃持弄清字之清書、并潮音洞古額來、

漱蘇

釣秋亭
龍背橋

景三ナテ
ノ額釣秋
ムシテ亭
シ書

廿七日、不參、天蒙朧、略○中 以桂子弄清亭清書、并漱蘇清書供台覽、則弄清字大可也、小筆太也、可改書之、由有之、漱蘇者小於掬清之字也、亦可改書云々、
廿八日、不參、天快晴、略○中 齋罷、以桂子贈弄清亭漱蘇額昏、同昨日所獻之清書二枚於小補、々々云、乃書以可獻、略○中 弄清亭清書真字、漱蘇之清書草字、自小補乃以桂子獻之、以前所書之二額亦相副獻之、今所獻之清書二枚、皆叶台慮、三年六月十六日、天快晴、略○中 午後小補同途謁東府、庭間亭一見之、立阿具之、釣秋之額、尤恰好也、透龍背橋、暫倚欄休息、往御泉殿、又憩弄清亭、次漱蘇亭休息、汲水洗手、小補洗手飲之、次西指庵庭間、梅子熟、人々拾數十顆、懷之歸、以堀河殿白、一覽亭、則在西方、釣秋額尤恰好之由、橫川白云々、相公曰、昨晚我亦往彼亭、攸見之、獨言云、釣秋可然、果然恰好云爾、留橫川可勸一盃、乃以琳公有命、於御泉殿可勸之、愚云、御泉殿有其畏、不如於番所把盃、小補卒然云、台命如此、把盃於御泉殿、爲後來之榮、
十八日、不參、天快晴、略○中 自伊勢右京公有一行云、釣秋額之昏進之、命橫川書之、琳公奉之、愚云、乃可白遣候、雖然、真字乎、草字乎、之由、達使、使晚來、又有一行、草字之由、琳公被白、可爲釣秋亭之三字云々、

十九日、不參、天快晴、略、中、釣秋亭額、以祝書記贈小補軒、可爲草字之由傳命、

廿一日、不參、天快晴、略、中、往小補督額、

廿四日、天快晴、略、中、午時謁東府、略、中、釣秋亭額書事、橫川近日不例之故、于今不書由白之、相公曰、額之中塗未出、書之事遲々不苦云々、

七月二日、不參、天陰不雨、略、中、遣桂子於小補、督釣秋亭之額、乃書之、以華監遣調阿宅、

七日、不參、天晴、略、中、釣秋亭額之昏三枚、贈小補軒、

八日、天晴、略、中、釣秋亭之額三枚、以前所書一枚、四枚自小補來、今日東府御主殿地破有之、

九日、不參、天晴、早且釣秋亭之額四枚、贈伊勢右京公宅、橫川所書也、

十七日、不參、天快晴、略、中、晚來經師兵部携字、剔孫三郎來云、釣秋亭御額可被剔之、得愚議、可白付之由、被仰出、剔字之彌次郎依困窮在田舍由、伊勢右京公被白、就其此孫三郎、仁、被仰付也云々、愚面之加意見、

十八日、不參、天快晴、略、中、剔字孫三郎來、釣秋亭額字切縮持來、一見返之、早々可剔由命之也、

廿五日、不參、天陰不雨、略、中、字剔孫三郎持釣秋亭額來、一見之加意見、

〔蔭涼軒日録〕

長享二年二月廿四日、天快晴、略、中、晚來謁東府、略、中、愚云、興文

首座語、愚云、大内方大藏經十三藏持之、就中七藏者好經也、其内上々之經有

一部、公方様若有御所望、被置東府、乃可令進上、若爲置他所有、御所望者、不可

領掌申、先爲置東府、有御所望、經一兩年後、御寄進于相國可然、又有鐘、以南兩

鑄付梵字、唐鐘也、是亦有御所望者、可進之、愚云、以此旨有御披露者可歟、堀云、

吾亦文首座語之、相公御機嫌之時、分可白之云々、

五月五日、天晴、略、中、齋罷、謁東府、略、中、又問曰、無輪藏處如何安之哉、造經藏收

之、又曰、東府可被置藏經、大内所持之藏經、可有御所望、若有闕典者、不可被仰

有全藏者、可有御所望、先以內義可尋之、命有之、答曰、可尋彼雜掌云々、

九日、不參、天快晴、略、中、次遣競秀、相公藏經、可有御所望之事、傳其命、若藏經有

缺者、不可有御所望云々、興文首座云、大内所持之藏經、八藏有之、皆全藏有之、

不可有缺典者、喚鐘亦有天竺物也、若有御所望、必可令進上云々、

十三日、天快晴、略、中、又藏經事、相尋興文首座處、大内八藏持之、皆全備之經也、

此御所後々、可爲僧所、然間見求之、由、愚一行有之者、以其可白下云々、愚與

義政所望
大内藏
弘大藏
政進獻
經アリ
意アリ

政弘大藏
經八部ナ
有ス
天竺ノ喚
鐘ヲ藏ス

△ 經藏建設
後大藏經
ヲ進セシ

景三ナシ
テ船舎ノ
額ヲ擇バ
シム

船舎ノ額
橋亭ノ額

文明十四年二月四日

二二〇

大内細々不白通、自汲古方白下者可然乎之由白之、可命汲古之命有之、蓋藏經事、急上之者不可有置所、見立經藏以後、可上之由可命之云々、又喚鐘高廣之寸方能相尋、可白云々、此兩條以堀河殿白之也、○中以南伯遣興文首座居云、藏經事今日披露之、自其雖被請愚一行、愚斟酌被命伊勢守可然由白之内々、可被得其意、藏經事有領掌者、先々可被置國、於東府可被建藏殿、々々造畢後、可被召上之命有之、其分可被相傳云々、又喚鐘事、依高廣之寸方、可有御所望、委曲其寸方可相尋之命有之、注以可賜可達上聞云々、

六月晦日、天快晴、早且湯沐剃髮、齋罷、乃謁東府、○中相公曰、西芳寺舟舎之額本三字也、模之書三字額、以可進上之旨、可命橫川云々、愚云、如上意三字也、其者合同船云々、○中直往方丈、住持乃出迎、○中又相公曰、西芳寺舟舎之額三字也、模其三字額案、以可被書進之由有命云々、

十月四日、天晴、○中晚來謁東府、○中船歩之額者、二ナカラ不叶台慮、別ニ可被著、三字目ニ船之字ヲ可被置、合同船ト云様ナル事ヲ可被付、殊釣之字不似合也、釣人之様テイヤナリ、又橋之亭額、是ハ彩虹橋、子細モナシ、サレトモ尙好字ナラハ可被付、橋之字ヲ下ニ可被置、邀月橋ト云様ナル額可也、此旨

可命橫川云々、

十五日、不參、天晴、○中自東府額事御催促有之、遣桂子於小補督之、

十六日、不參、天快晴、○中榮阿爲相公御使、持御船舎額、橋亭額各五、先也橫川

書立以進上之折昏來云、相公曰、各五之内擇可者各一、懸點可進上由、可命橫

川、愚亦擇可者各一、懸點可進上、與橫川爲同意者不及是非、橫川點之外可者

可點之云々、

十七日、不參、天快晴、○中遣桂子於小補、彼額各一、可見點之命傳之、橫川擇可

者以愚懸點、可進上云々、宿蘆船、書畫船、枕龍橋、可乎云々、

十八日、天降小雨、早且往小補談額事、愚云、夜泊船、躡雲橋、可然乎、小補亦同之、

乃點二額、○中船舎額、宿蘆船、湖興、猶是人間、廣釣船、琴酒船、艇同、琴酒、夜泊船

唐詩云、有楓、聽雨船、玉屑云、燈影、秋江、書畫船、米元章、有橋額、躡雲橋、唐詩云、

枕龍橋、黃啓宗記云、前直、朝天橋、在嘉、枕溪橋、古溪、鰲背、潤、龍背橋、古人、橋詩云、

上、齋罷、謁東府、額書立供台覽、相公曰、夜泊船、合台慮、躡雲橋者、不十分、若橋在

山中者、然也、在平地之橋、躡雲名如何、愚云、此御庭地行、尤高爾、接山、然則躡雲

理在之歟、又相公曰、躡雲外、孰可乎、愚云、躡雲若不合台慮者、枕龍橋、可然乎之

文明十四年二月四日

二二一

船舍二夜
泊船二名
背橋二龍
ク

景三額字
ヲ書ス

夜泊船ノ
額ヲ書キ
改ム

由、小補白之、雖然愚謂、枕之字不宜乎、枕之字者臨之字心也、然尙於橋號者不
 宜、龍背橋可乎、相公曰、尤可也、自最初以夜泊龍背置胸中、被定之、雖然小補并
 愚所白先試之也、遂夜泊龍背相定矣、額之昏二枚被出之、命小補令書之也、夜
 泊額者真字豎書、龍背額者草字橫書、以此旨可命小補云々、
 十九日、不參、天快晴、○中遣桂子於小補送額昏二枚、愚以書立副之、夜泊船、豎真
 書、龍背橋、草橫如此以遣小補云、兩三日可有延引云々、
 十一月二日、不參、天快晴、○中自小補以琳上司所筆之額二枚贈之、御舟宿額、豎
 昏真字、夜泊船三字書之、橋亭額橫昏草字、龍背橋三字書之、
 三日、天快晴、○中齋了、謁東府、以橫川所筆之額二枚、供台覽、見留御前、○中及
 歸遣昌子於小補云、額供台覽、則契台慮珍重々々、○中自東府榮阿爲相公御
 使來云、二枚額草字可也、真字額字大也、改書以可進之旨有之、乃切調高檀昏
 遣小補、々々云、兩三日中書可獻云々、
 五日、不參、天快晴、○中齋罷、遣桂子於東府、奉獻小補所筆夜泊船之額一枚、○中
 桂子歸云、夜泊之額、以冷泉殿供台覽、契尊慮云々、
 六日、不參、天快晴、○中齋前遣昌子於小補云、昨日所獻之夜泊船額字叶台慮珍

重々々

十四日、不參、天快晴、○中夜泊船之額字、掘彌二郎持來、於此方貼之、
 廿日、不參、天凍飛絮舞風、○中夜泊船額、彌次郎剔之持來、乃謁東府、供台覽之
 由白之、又龍背橋額一枚書之、以前進上之、今一枚書以可進之命、彌次郎傳之
 來、乃傳台命小補、

廿六日、不參、天快晴、○中東府橋亭額、龍背橋二枚、橫川所書、度與字、剔彌次郎
 〔蔭涼軒日録〕長享二年正月廿六日、不參、天陰不雪不雨、○中仲璋和尚東府

之諸額未識、書以賜之幸、愚乃書與之、西指庵、東求堂、同仁齋、超然亭、大還關、弄
 清亭、吟月、集芳、洗心、隔簾、漱蘚、以上十一所、懷之歸、

三月十八日、不參、天快晴、○中能倫行者自東山歸、報御成、○中相公御安座、○中
 略相公曰、東府障子平沙落鴈詩作者乎、愚不及思、按諾、

四月廿六日、不參、天快晴、○中去廿四日、自相阿方、東府御繪外題、可書之、命傳
 之、有人奉之、忘却、今晨自相阿督之、則愚未識之、乃書外題、遣相阿宅、觀音像、淡牧

筆、脇四幅、猿、淡筆、左、牧、右、牧、猿、淡筆、左、牧、右、牧、鷺、淡筆、左、牧、右、牧、鷺、淡筆、左、牧、右、牧、如此本有之、如本書進上之、
 廿七日、不參、天快晴、齋前御繪外題、又改書、十枚贈之、相阿宅、今日必可供台覽

集證畫幅
ノ外題ヲ
書ス

往生要集
ヲ置ケ卓
ノ打敷ヲ
ツクル

之由返章有之、

〔蔭涼軒日錄〕文明十八年十二月二日、不參、天快晴、寶覺年忌半齋、東相公被置往生要集之小卓、粽子謁請取之、可被布其上、打敷之本相尋可供台覽之命有之、

三日、不參、天半陰、齋了、遣粽子東府、蓋可被置御卓打敷之本進上之、桐葉紋之袈裟裏也、相公曰、此袈裟裏者小也、仍被出帡本、是者大也、疏銘時掛打敷、可供台覽之命有之、又造帡本可進上之命有之、

四日、不參、天洒小雪、齋了、以粽子奉獻鹿苑院、疏銘打敷、并所造之帡本、可叶台慮否、粽子歸云、新所造之帡本叶台慮、乃被留御前、諸寺院之打敷多々可被台覽之由有命、

五日、不參、天快晴、齋了、打敷十三片、以粽獻東府、周阿在他之故、不供台覽而歸、
六日、不參、天快晴、○中自東府被召僧、粽子謁、金襴切四色、水色北絹切、爲裏被出之、可被縫打敷也、赤地小紋、紺地小紋、可乎、皆新渡也、金地茶褐色、中紋、蒨黃大紋、此二色可乎、粽子可白之由有命、粽云、小紋二色可乎、御打敷小也、小紋恰好也云々、然者可相尋于愚之由有命、

義政諸寺
院ノ打敷
ヲ覽ル

新渡ノ赤
地小紋
地小紋
用ユ

打敷ノ裏

打敷ヲ縫

七日、天快晴、齋罷、謁東府、奉獻白梅小朶、乃命立阿立之、金襴四色、持以謹以琳公白、此四色孰皆可也、就茶褐色、蒨黃色者孰古物也、太勝新渡、雖然小打敷用之紋太大也、小紋二色可乎、殊其紋同畫樣也、但可爲上意、相公曰、然者以小紋二色可縫之由有命、已前所進上之帡本小計大也、緣五寸、中一尺六寸、摠長二尺六寸、可縫云々、遂持小紋二色歸、

八日、不參、天快晴、○中齋了、以粽子獻新打敷之帡本於東府、蓋昨日有命之寸方也、總長二尺六寸也、○中粽子歸云、帡本供台覽、如此本可縫之旨有命、

九日、不參、天快晴、御打敷地赤地小紋、金襴、紺地小紋同、裏青色、北絹斷之、○中御打敷金襴縫事、召鎮書記、則數日前夜盜入彼菴、悉取贓物、加之鎮書記被疵別居之條、不可來縫之由有返答、

十日、不參、自曉來天降雪、齋前御打敷縫事、良本監寺始之、

十三日、不參、天快晴、○中晚來相阿彌爲東相公之御使、金襴切紺地白地水色北絹持之來、曰、可縫打敷之台命在之、

十四日、天快晴、○中齋罷、謁東府、先日所被命金襴小打敷、本監寺縫之、以琳公供台覽、相叶于台慮、金襴切二色、同裏北絹切相副進上之、○中又昨日以相阿

文明十四年二月四日

二二六

被仰出打敷紺地者可宜、中白地縁二有之、不足之由不令縫之、乃返進之、相公曰、然者先可閑之、可出別之金襴云々、

十九年五月廿九日、天氣朦朧、略○中 金襴打敷一片、水引一片、供台覽、白地金襴桐葉紋、縁紫地金襴桐葉紋、裏水色北絹打敷、海松色段子三色之切相副進上之、打敷水引被置御前、

○以下、山莊所領ノコトニカ、ル、

〔古文書〕

第四拾

一 御料所江州江邊富波之事、任奉書旨、不日可被沙汰付御代官武田中務大輔入道方代候、殊就御山莊御造作之儀、別而被仰出子細候、一段嚴重被加御下知候者可然候、

九月廿四日

謹上 佐々木四郎殿

〔古文書〕

第三

一 近江國所々御料所別注文在飛事、被成御山莊方御料所訖、不移時日、各可被沙

山莊領近江邊富波武田ニ付シ

近江山莊領

汰付御代官之由、所被仰下也、仍執

文明十四十四

(下野守)

(對馬守)

(豐前守)

佐々木四郎殿

山莊領注文

御料所近江國所々注文文明十四被封装了、

一小幡郷當郷内近年之押伊勢八郎

一朝妻領分注文在之稲井

一朝妻出作 正實

一江邊富波 武田中務大輔入道

一淺小井 畠山刑部少輔

以上五ヶ所

〔備書〕
濃州江州御料所事奉書

文明十四年二月四日

二二七

文明十四年二月四日

二二八

一御料所美濃國三井村并羽丹生郷事被成御山莊御料所畢於御代官之仁
躰者追而可致定置之至當年貢者嚴密可被致執沙汰之由所被仰下也仍
執

文明十四年廿八

下野守

對馬守

豐前守

土岐左京大夫殿

一御料所美濃國郡上保小野吉田事被成御山莊御料所訖於年貢者嚴密可
被致執沙汰之由被仰下也仍執

同日

同前

〔東山慈照寺銀閣仕様寸法付之帳〕

銀閣
仕様寸法

銀閣 桁行四間貳寸五分、
梁行三間壹寸五分、

下之重高サ石口ノ上端迄壹丈五寸上之重高サ腰縁上端ノ桁上端迄八
尺七寸五分屋根寶形作り柿葺腰屋根有下之重垂木貳軒木舞物肘木作
軒出端茅負外迄五尺五寸上之重軒出端同斷垂木貳軒間半歩木舞おし
裏板有三ツ斗作西東連床かほちを入後之側腰縁之上小柱ヲ立沓有上
柱貫大輪上雲形之繪様有腰貫ノ上櫛形内挾間障子有北南側中之間算
唐戸北側脇之間羽目南側脇之間櫛形内挾間障子有總拭板敷格天井縁
間半歩ニシテ板違須彌壇壹ヶ所但塗物也四方腰縁三斗構縁桁但切目
縁也平高欄力柱有下之重總拭板敷東之大間格天井貳張指板違北之大
間天井掉縁其外ハ鏡天井也東側切目縁有之

右寸法

一 下之重柱

四寸貳分

一 同肘木

三寸九分四方

一 同桁

下端三寸六分
高四寸貳分

文明十四年二月四日

二二九

下ノ重

文明十四年二月四日

- 一 同放レ間大桁 下端四寸八分
- 一 同垂木 下端二寸五分
- 一 同木舞 下壹寸壹分六分
- 一 同木負 下四寸四分
- 一 茅負 同斷
- 一 裏側 出端四寸七分
- 一 長押 高サ三寸貳分
- 一 一切目長押 高サ貳寸
- 一 敷居 幅四寸貳分
- 一 鴨居 幅三寸九分
- 一 打戈 厚サ四分
- 一 一格天井縁 壹寸六分四方
- 一 掉縁 壹寸六分
- 一 西側板唐戸 厚壹寸四分

長押

敷居

鴨居

- 一 同所小柱 厚壹寸六分
- 一 同所間草 厚壹寸八分
- 一 同所鼠走り 厚壹寸八分
- 一 同側中敷居鴨居 厚壹寸六分
- 一 同所挾間腰障子かほち 八分四方
- 一 同挾間組子 五分半
- 一 同側大ま中敷居鴨居 厚壹寸八分
- 一 同所中敷居下束 三寸四方
- 一 同所腰障子かほち 見込九分
- 一 同組子 見込四分
- 一 同はら 見込六分
- 一 南側中敷居 見付六分宛
- 一 同所鴨居 高三寸三分
- 一 同所打戈 厚壹寸四分

文明十四年二月四日

文明十四年二月四日

一同所腰障子かほち

壹寸四分

一同組子

見付四分

一同ほいら

見付六分

一東側腰障子かほち

見付壹寸壹分

一同組子

見付四分半

一同ほいら

見付七分

一北側中敷居腰障子

南側同斷

上ノ重

上之重 貳間五尺壹寸四方

一柱太サ

三寸六分

一柱貫

厚壹寸六分

一内法貫

厚壹寸六分

一腰貫

厚壹寸六分

一大斗

高五寸四分四方

一梓肘木

高下貳寸四方

二三二

一卷斗

高三寸七分

一通肘木

貳寸四方

一桁

高下三寸四分

一垂木

高下貳寸五分

一木負茅負

四寸貳分四方

一裏側

厚壹寸七分

一切目長押

高三寸貳分

一敷居

厚貳寸六分

一連床柱

三寸四分四方

一同所沓

高四寸四分

一同所腰貫

厚壹寸五分

一同所柱貫

厚壹寸五分

一同所大輪

厚壹寸六分

一同所雲形繪様

高四寸四分

文明十四年二月四日

二三三

文明十四年二月四日

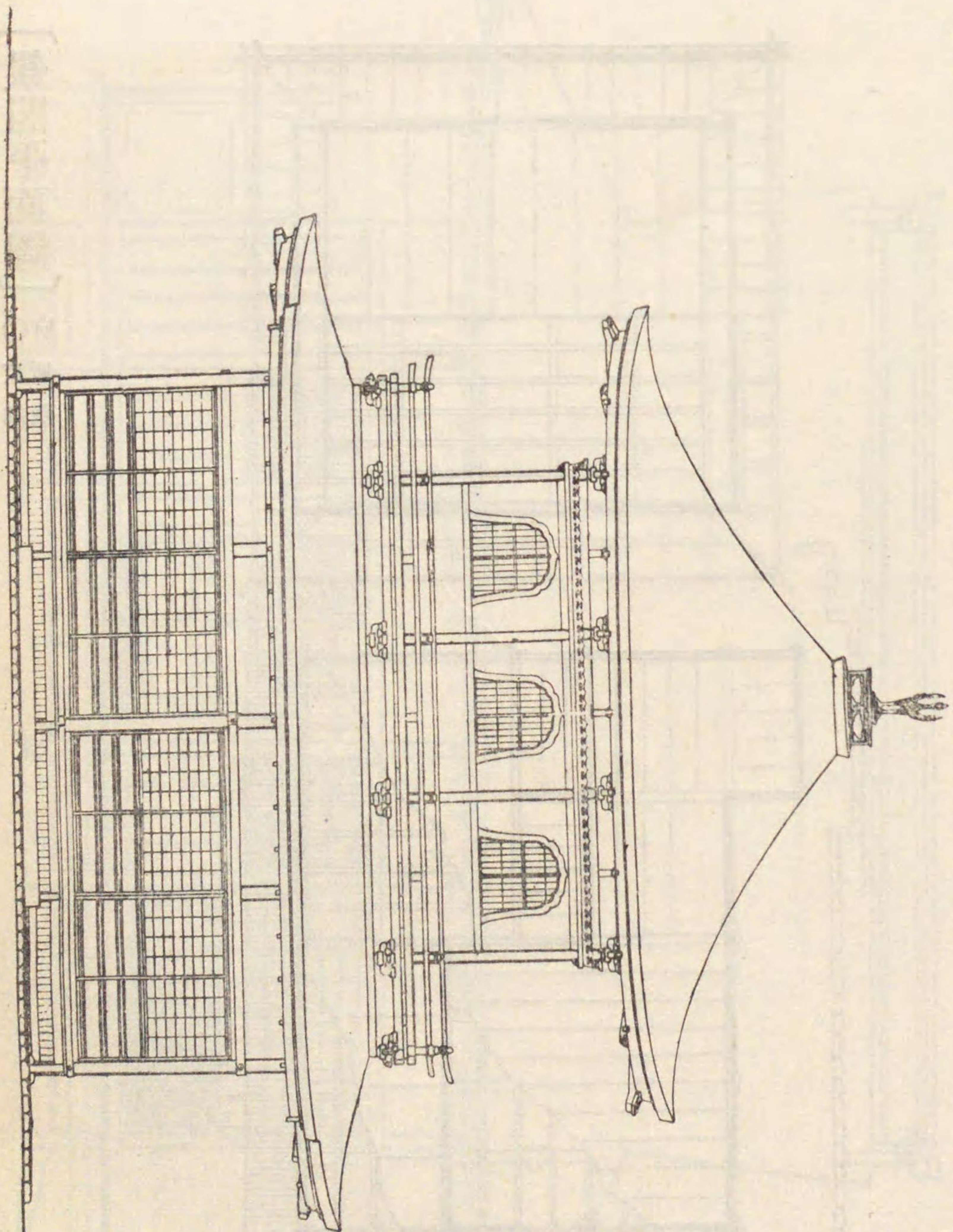
- 一同所櫛形
- 一同所挾間障子かほち
- 一同組子
- 一連床かほち
- 一北南側唐戸かほち
- 一腰構大輪
- 一同所大斗
- 一同杵肘木
- 一同所卷斗
- 一同所縁桁
- 一同所縁板
- 一同所高欄地覆
- 一同平桁
- 一同笠木

二三四

- 見込付壹寸四分
- 見込付壹寸四分
- 見込付六分
- 見込付五分
- 見込付四分半
- 高三寸二分
- 幅壹寸八分
- 厚壹寸四分
- 高四寸
- 六寸四方
- 高三寸四分
- 下端貳寸五分
- 高貳寸五分
- 高三寸六分
- 高壹寸八分
- 下端貳寸一分
- 高サ四寸一分
- 厚壹寸二分
- 幅三寸二分
- 高サ貳寸
- 幅三寸二分
- 高壹寸八分
- 同斷

〔銀閣正立面圖〕

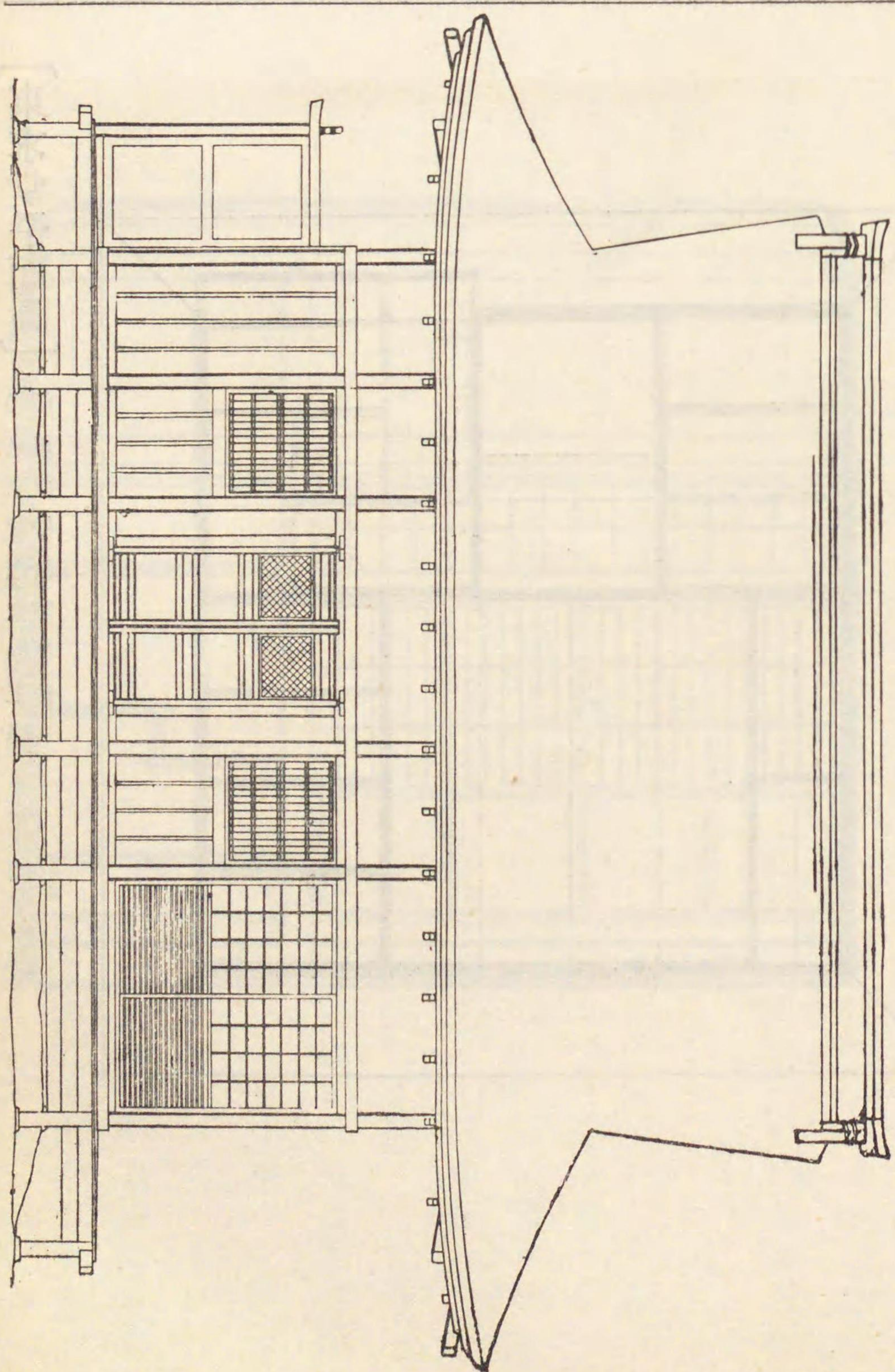
府○京都藏



文明十四年二月四日

二三五

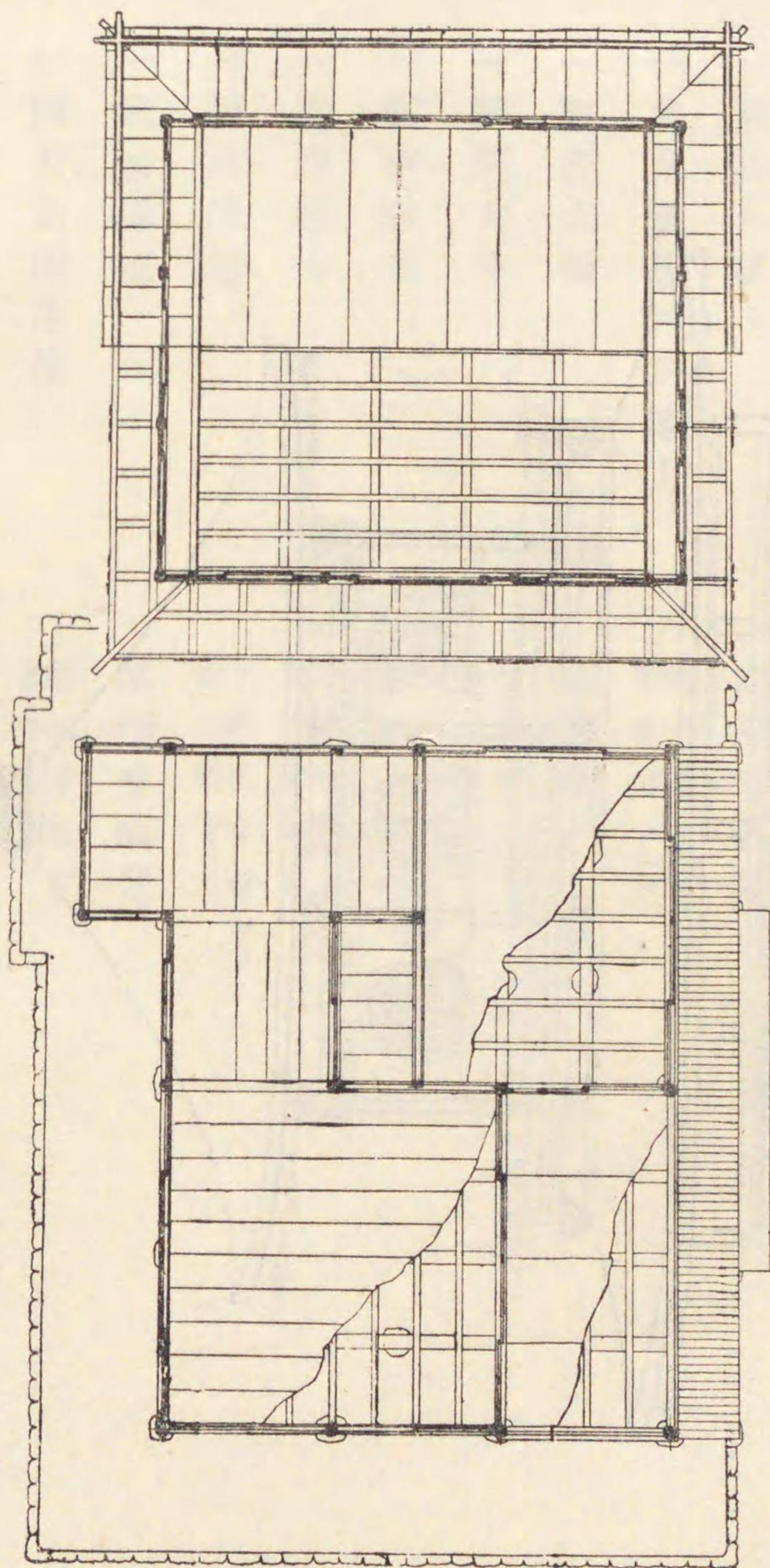
文明十四年二月四日



二三七

〔東求堂正立面圖〕

部○東京帝國大學工學部
建築學教室所藏



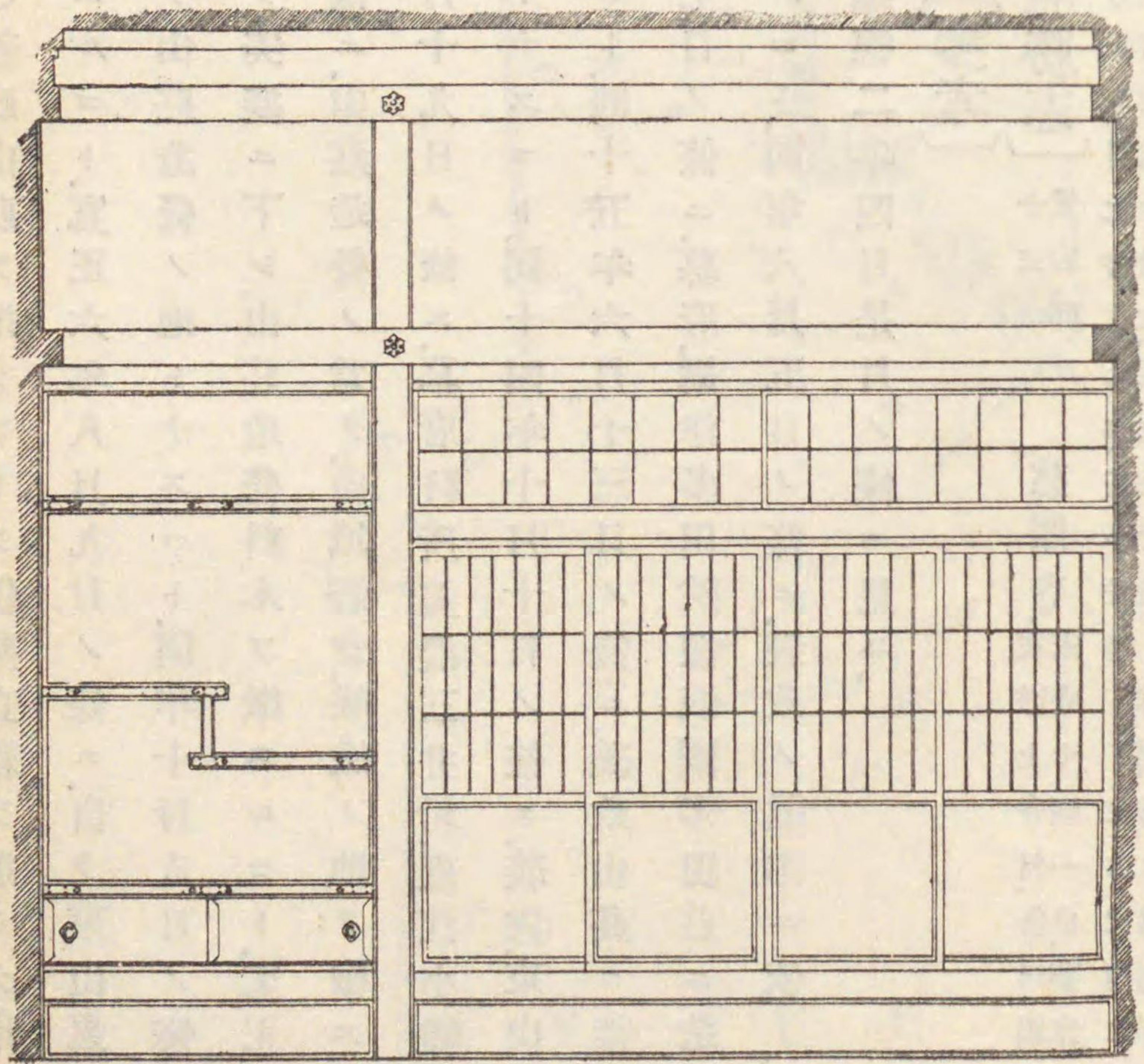
〔銀閣平面圖〕

府○京都所藏

文明十四年二月四日

二三六

文明十四年二月四日

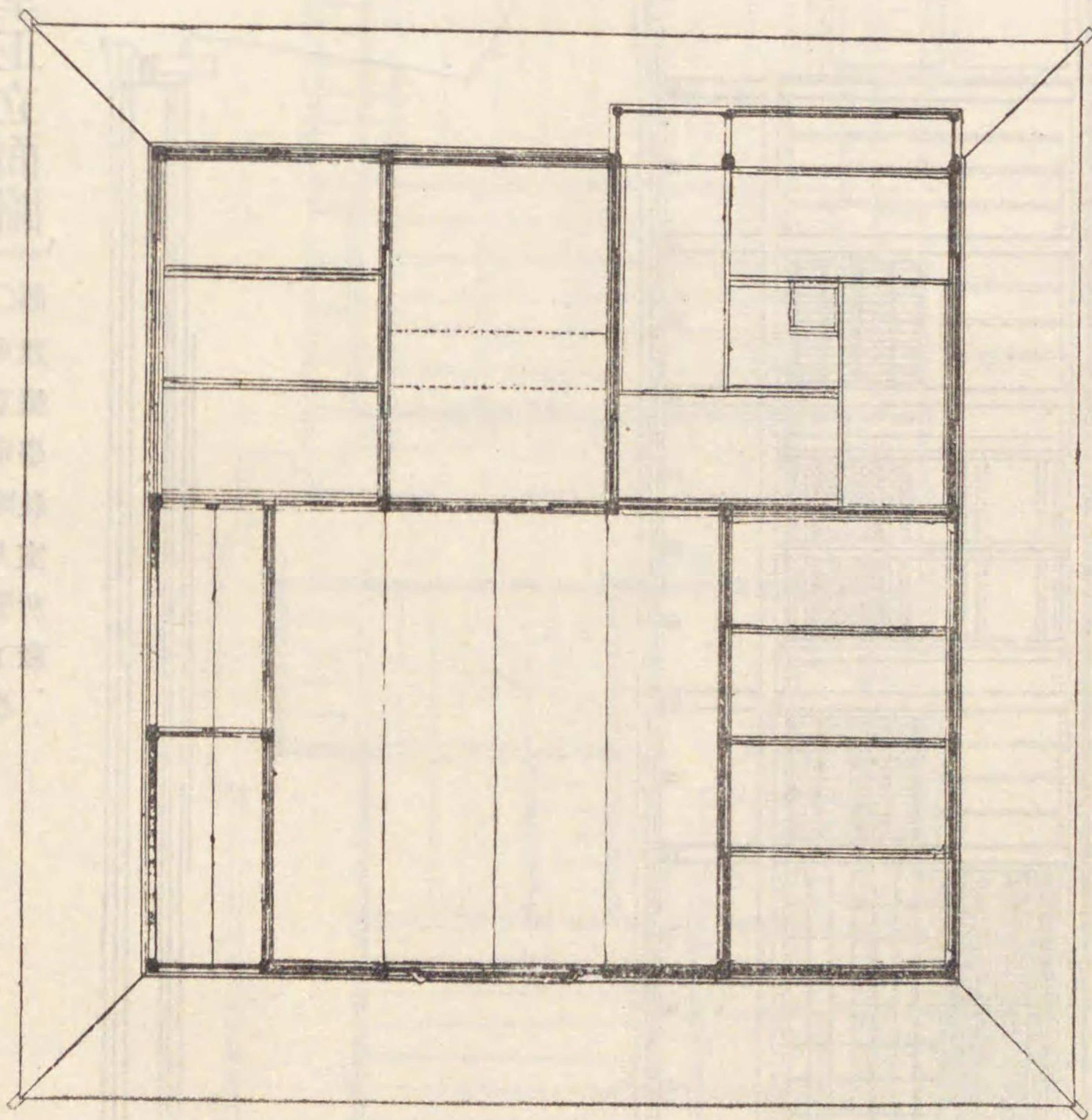


〔東求堂違棚圖〕

部○東京帝國大學工學部
建築學教室大室所藏

二三九

文明十四年二月四日



〔東求堂平面圖〕

部○東京帝國大學工學部
建築學教室大室所藏

二三八

文明十四年二月四日

二四〇

○義政、山莊ヲ造ラントシ、伊勢貞親ヲ遣シテ、東山鹿谷ノ地ヲ檢セシムルコト、寛正六年八月九日ノ條ニ、自ラ東山惠雲院ノ地ヲ檢シテ、之ヲ山莊造營ノ地トナスコト、同年十月八日ノ條ニ、齋藤豐基、松田數秀ヲ美濃ニ下シ、山莊造營料木ヲ徵スルコト、文正元年十一月二十日ノ條ニ、山莊造營ノ爲メ、山城岩倉、嵯峨ノ地ヲ檢スルコト、文明十二年十月十九日ノ條ニ、幕府料所美濃三井村、近江小幡郷等ヲ山莊造營料所トナスコト、同十四年十月十日ノ條ニ、義尙、東山山莊ヲ過リ、之ヲ觀ルコト、同十五年六月十三日ノ條ニ、義政、山莊ニ徙ルコト、同年六月二十七日ノ條ニ、幕府、攝津多田院領同國多田莊ニ造營料段錢催促ヲ停ムルコト、同年八月五日ノ條ニ、義政ノ遺志ニ依リ、山莊ヲ寺トナスコト、延德二年四月是月ノ條ニ見ユ、

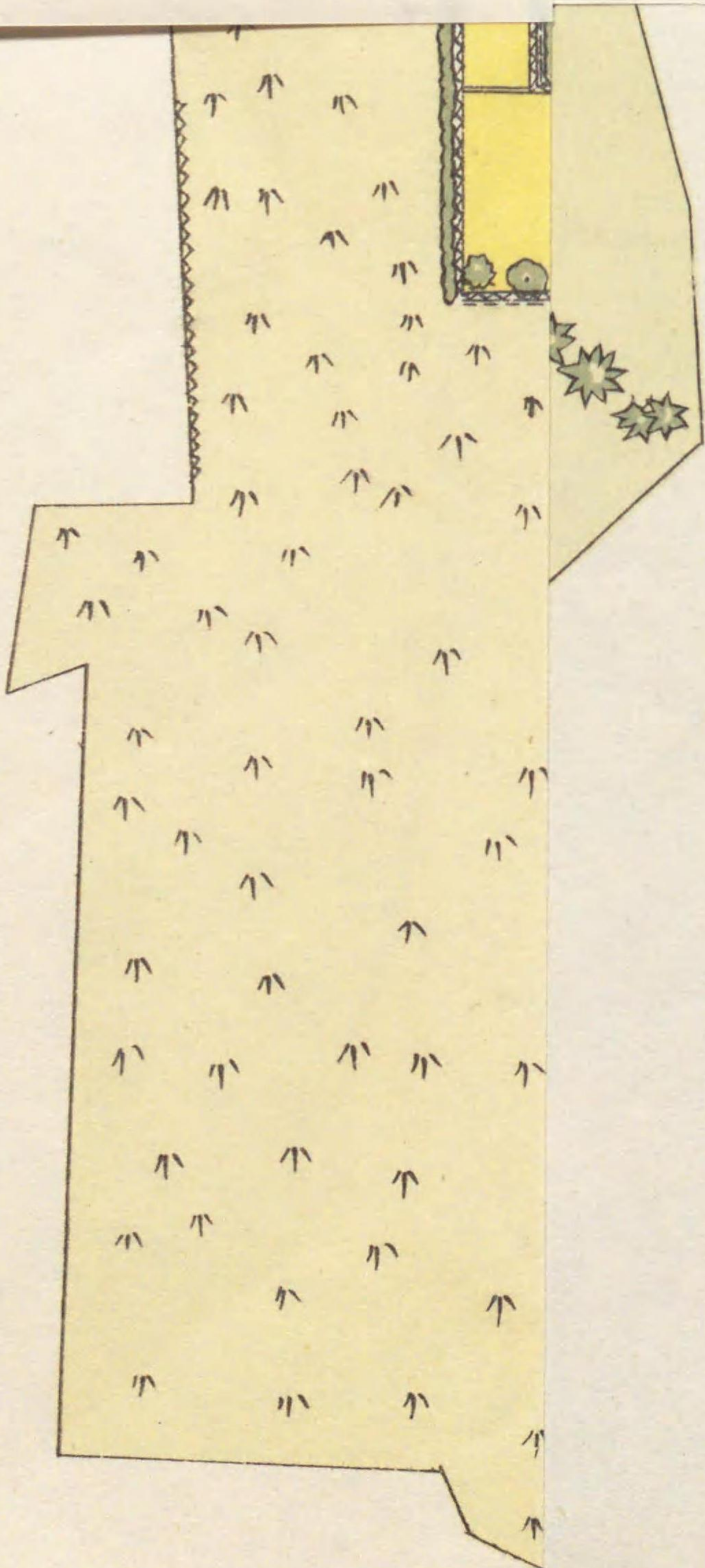
〔參考〕

〔山城名勝志〕

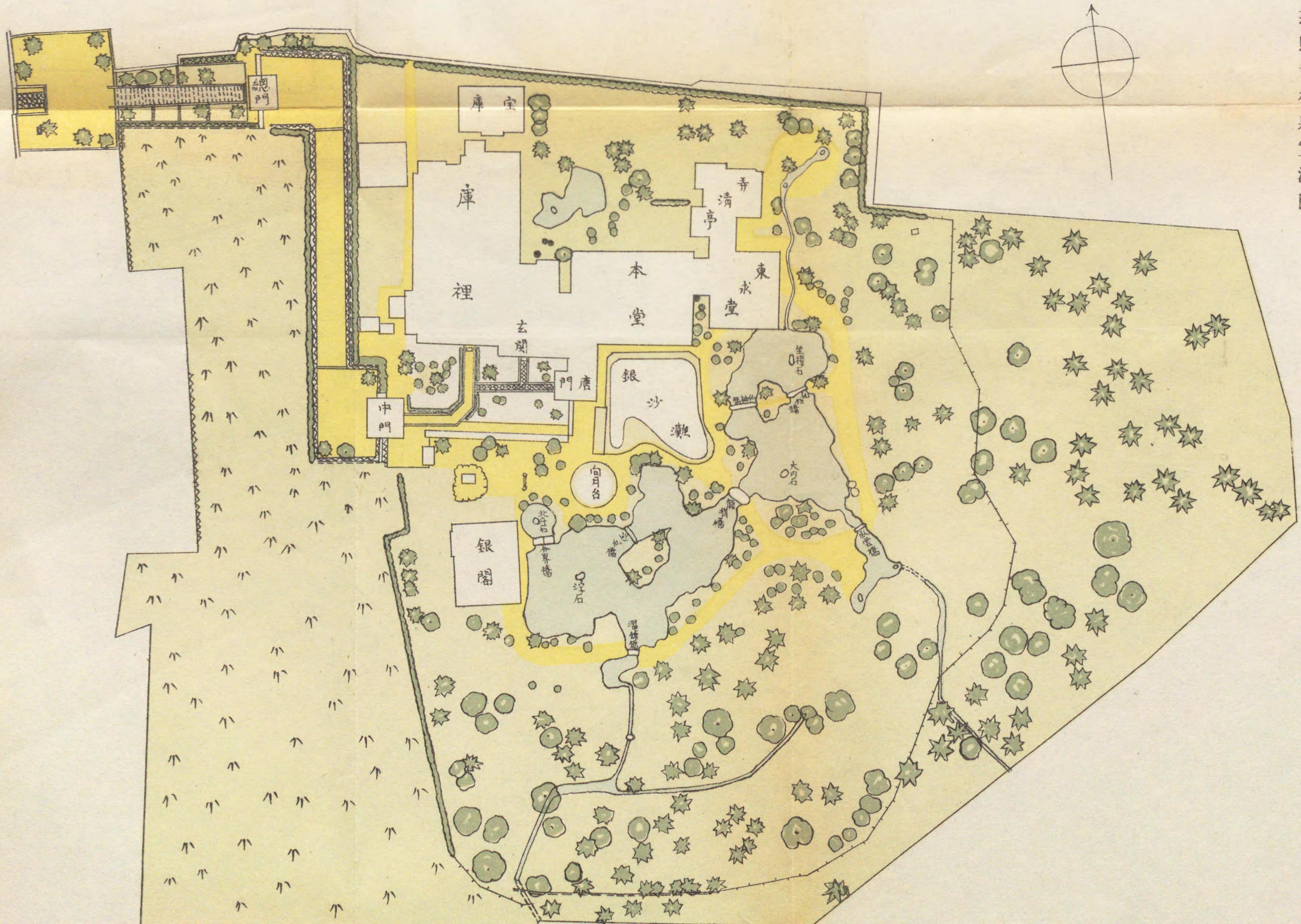
愛宕郡三 慈照寺、在淨土寺村一也、俗曰銀閣寺、相國寺、東求堂、慈

慈照寺
東求堂
銀閣
鎮守

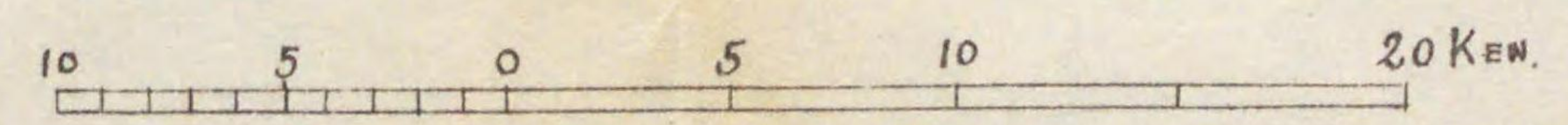
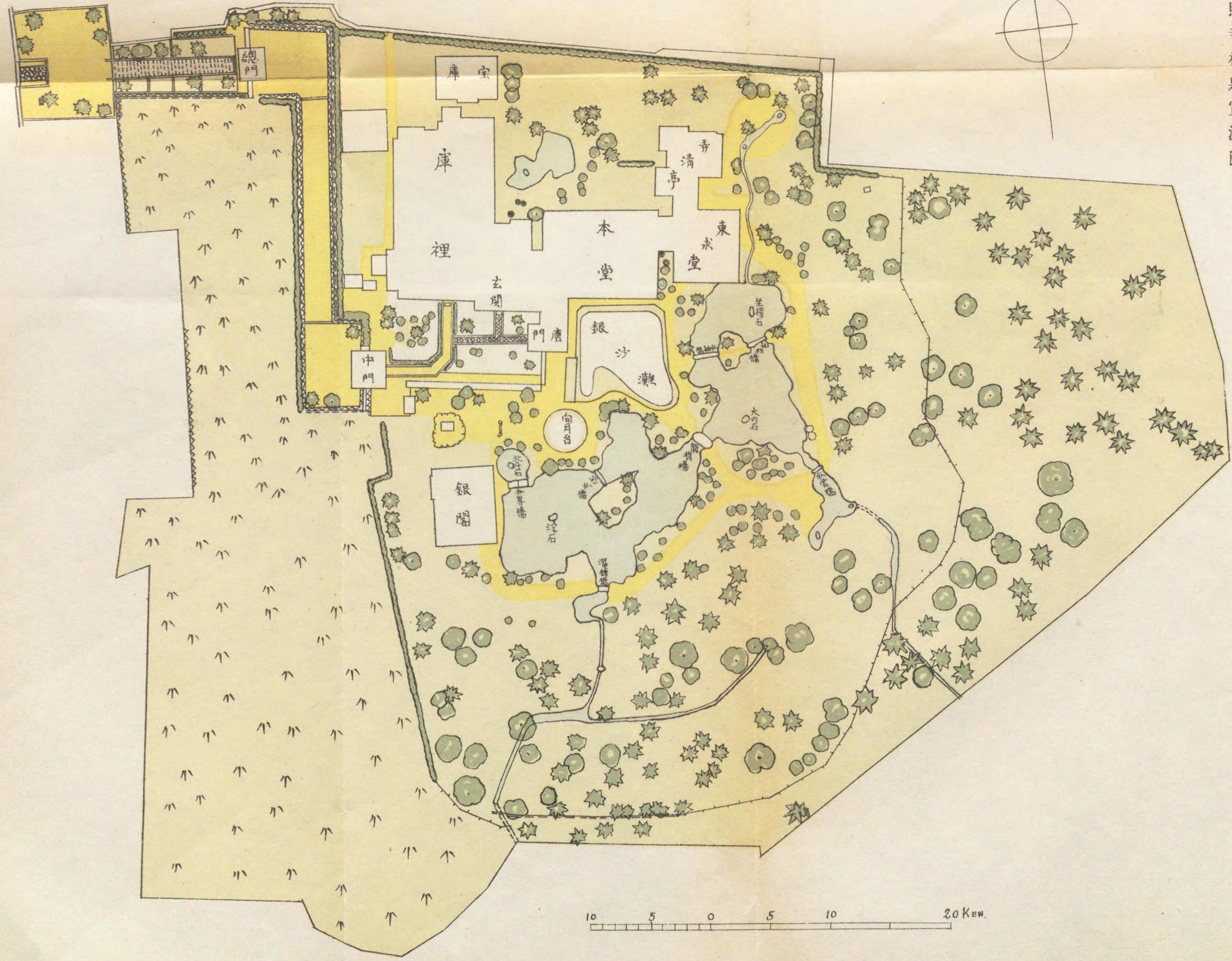
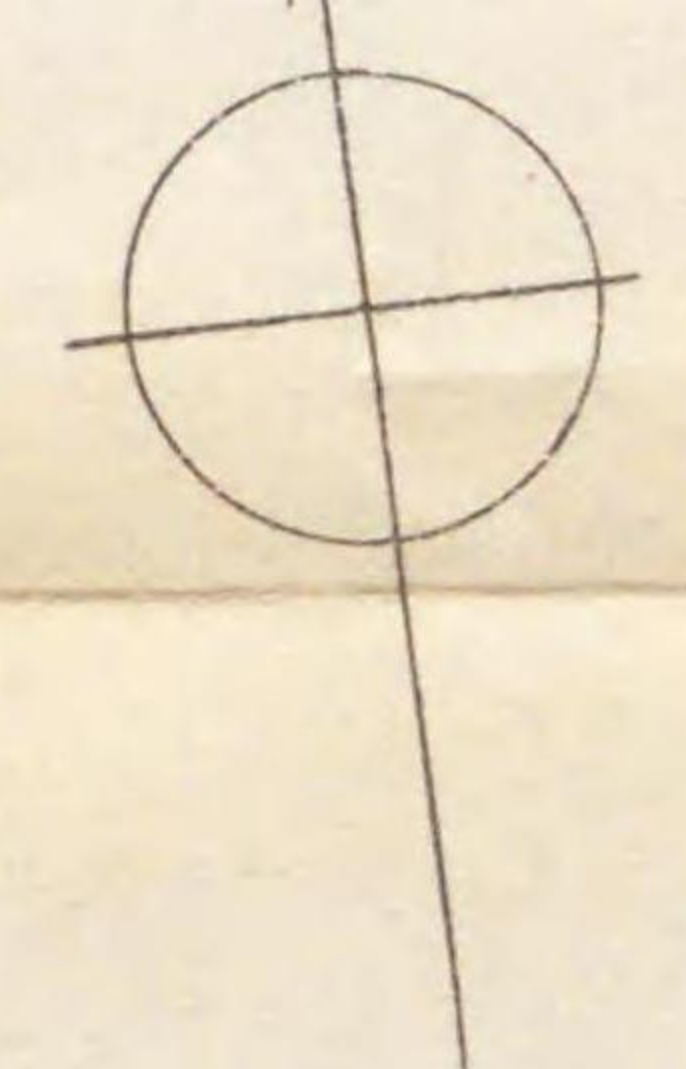
照寺、方丈、東、同仁齋、在此內、茶亭、濫、鴛、銀閣、在方丈南、二重閣也、第一號、心空殿、云々、其齋、四帖、半敷也、義政公所造、鴛、銀閣、第二爲潮音閣、安置觀音像、并義政、像、公影、鎮守、八幡、

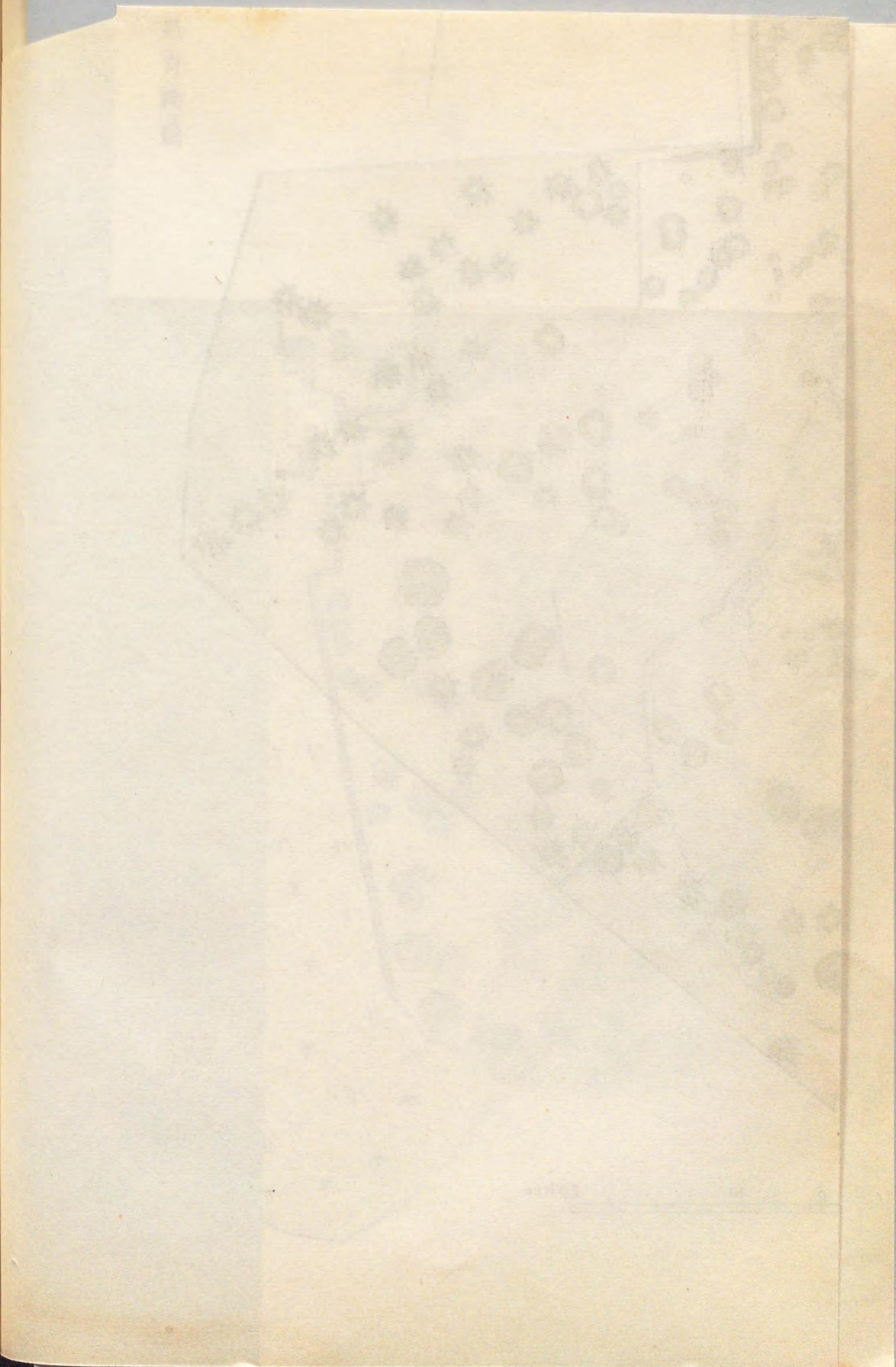


慈照寺林泉實測圖



鎮守
公影
鎮守、八幡
像





〔慈照寺諸記〕

雜記 巡見 江差出書付、奉紙橫折認之、

山城國愛宕郡

禪宗濟家

東山

慈照寺

御朱印寺領高三拾五石、

紀伊郡深草村之内、

足利尊氏公八代慈照院殿義政公、文明年中御建立、當寺御閑居十年、而延德

二年庚戌正月七日薨、台齡五十六歲、

銀閣二重號潮音閣、南西北四間、

本尊座像觀音

東求堂 三間半四方、

本尊立像觀音

慈照院殿木像安置、御位牌相公御自筆、竝御當家御代々御位牌所、

四疊半御茶間有之、松竹繪相阿彌筆跡、

文明十四年二月四日

義政閑居十年

位牌ハ義政自筆ト

文明十四年二月四日

客殿

桁行六間、梁行三間、

本尊座像釋迦

舊跡

集芳軒

西指庵

超然亭

遠見櫓

什物

東求堂額 義政公御自筆

十首和歌 同

同仁齋額 同

七賢之盃 同御所持

山林三町四方程、門前境內東西六拾間、南北四拾間、民家四拾軒、寺二箇寺、則當寺境內、

右

舊跡

襖繪

壁畫筆者書付差出様、自萩野被申渡之付如左、

東山慈照寺襖繪之覺

一東求堂表之間、彩色若松 相阿彌筆

一同裏之間、四疊半、墨繪唐子 狩野永納

一同袋棚、彩色菓實類 同 元信

一同六疊之間、墨繪山水 相阿彌筆

一客殿表東之間、淡彩蘆雁 土佐元起

一同之間、墨繪山水 松葉軒 恕潤

一同中之間、淡彩人物 海北友雪

一同西之間、墨繪山水 狩野隆也

右

(安永四年) 乙未三月

當寺役者 瑞首座

〔本朝大宮佛工正統系圖并未流〕

○神戶井上 泰輔氏所藏

後土御門院御宇 覺城城法橋安城下西宜阿

文明十四年二月四日

佛師覺城

文明十四年二月四日

洛東銀閣寺佛作、文明十一年義政公建立、

〔東京帝室博物館美術課列品建築目錄〕

銀閣繪圖

八 金閣及銀閣圖 一幅

共に南面及東面の圖なり、

起繪圖
木口圖
金具摺形

九 金閣銀閣起繪圖、及
木口、金具摺形等、 七種

金閣起繪圖、同上木口圖、同上鐵物摺形、

銀閣起繪圖、同上木口圖、同上金具摺形、

金銀閣明細取調書、

一〇 銀閣圖 一幅

東面二十分一建地割

地割
特別保護
建造物

〔特別保護建造物及國寶目錄〕特別保護建造物指定 明治三十三年四月七日
內務省告示第三十一號

慈照寺樓閣(銀閣) 桁行四間、梁間三間、重層寶形柿葺 京都府京都市上京區淨土寺町 慈照寺境内

〔特別保護建造物及國寶目錄〕特別保護建造物指定 明治三十六年四月十五日
內務省告示第二十九號

名	稱	構	造	形	式	所	在	地	名
慈照寺樓閣(銀閣)	桁行四間、梁間三間、重層寶形柿葺					京都府京都市上京區淨土寺町	慈照寺	境内	

慈照寺東求堂 桁行前面五間、後面四間、梁間三間 京都府京都市上京區淨土寺町 慈照寺境内

〔官報〕 第三千九百三十八號 大正十四年十月十八日 告示

內務省告示第七十號

史蹟名勝天然紀念物保存法第一條ニ依リ、左ノ通指定ス、

大正十四年十月八日 內務大臣 若槻禮次郎

史蹟名勝

史蹟及名勝

名	稱	地	名	地	番	地	目	地	積	所	有	者
銀閣寺(慈照寺)庭園		京都府京都市上京區銀閣寺町		二	慈照寺境内地	町或畝步 一三五九〇九	國					
				三	宅地	一五五五八二	慈照寺					
				一三〇	同	二五坪	同					
				三五ノ二	同	九〇二坪七七	藤田三左衛門					
				一	山林	六〇六	慈照寺					
				三	同	五二四	藤田三左衛門					
				一一〇ノ一	同	二〇〇	同					
				一一二ノ一	同	四一七	同					

文明十四年二月四日

二四五

二四四

前權中納言飛鳥井雅康、近江松本ニ奔リテ、薙髮ス、尋テ、甘露寺親長ヲ遣シテ、之ヲ召還セラル、義尙、亦近臣大館重信ヲ遣リ、諭シテ歸還セシム、

〔親長卿記〕

十三

二月四日、晴、飛鳥井中納言雅康、今日遁世云々、

五日、晴、陰雪下、早旦詣松本、飛鳥井中納言雅康、在此所、申驚入之由、對面語無極之由、次詣大納言入道榮雅、旅店、中納言進退事、驚入之由申之、種々相留云々、但切髪、雖然先令歸宅、雅俊事等可諷諫之由仰之云々、

〔長興宿禰記〕

下

二月七日、丙晴、○中是日、飛鳥井前中納言雅康、自江州

松本有上洛、去四日出奔遁世、父大納言入道榮雅、江州被向松本、姉小路宰相基綱卿等馳向之、自禁裏按察使親長卿爲御使下向、自將軍御使大館治部少輔罷向、各可歸洛之由御使也、仍今日上洛云々、但既令入道、多年望之間、遁世隱居之由被申之、養子左少將雅俊大納言、遺跡相續、兩道之儀等與奪云々、予自去月始所勞不出頭之間、以使者驚入之由申遣之、

雅康歸京

雅俊養子
トシテ遺
跡ヲ嗣ガ
シム

窮困ニ依
リ遁世

義尙和歌
ヲ雅康ニ
贈ル

雅康返歌

〔西園寺家記録〕

六十六
實遠公記

二月五日、雪花紛々如昨日、○中抑飛鳥井前中

納言昨日遁世云々、子細如何、所驚耳也、其謂人々說不同、如何々々、

十日、從昨夜雨終日降、近日所希也云々、飛鳥井前中納言歸宅之由傳聞間、遣使者有返事、非隱遁之志、就窮困、心安爲可惜之、亞相入道昨日從江州上洛之由聞及之間、此次音信委細返報、

〔常德院殿御集〕

十四年二月五日、飛鳥井中納言雅康、遁世して、江州松もと

云所みまうりて、かしらおろし侍せきして、とめ侍らんふめ、重信汝遣し侍し、年月の望まで侍る事をと申て、

かしこしれ君まほりへし道さくのゆる、山のわくもこのを返し、十日遣之、

君ままつほりへしみちのさをあらはあれのゆる、山はおくのひとひてん

〔大乘院寺社雜事記〕

八十 二月十一日、

一松殿中將下向、京都事色々物語、○中今月三日、飛鳥井雅康卿遁世入道了、

六日、乙興福寺薪猿樂、

〔大乘院寺社雜事記〕

八十 二月六日、

佃殿

一 薪猿樂始之、今晴、金剛寶生三座參申云々、

十日、雨下、

一 依雨下、薪無之、

十三日、雨下、

一 自日中雨下之間、薪猿樂於佃殿在之、其儀如例也、四座打合也、

〔大乘院日記目錄〕三 二月六日、薪猿樂初之、

七日、丙午公卿ヲシテ、白馬節會ノ習禮ヲ行ハシメラレ、南殿ニ御シテ之ヲ

御覽アラセラル、

〔京都御所東山御文庫記録〕甲二十三 正月十四日、

御湯殿上日記 正月十四日、
前卷 かくとせせちえれ申ささ、日野中納言まつうくへきこと夜、どてあし

かどを御日記めしまして、御らんせらるゝ、

二月六日、あまれさちえの御しゆら并れ御よういともあり、

七日、けぬれさちえのふ行日野、中納言、内辨大い（高徳）の御りと、下辨上しゆり

いちうさん（高徳）の大納言、のわうれくきやう源大納言、あさち、兵部卿、新中納

言侍従、外記、四つしの宰相中將、（白川忠常）んふ卿、てん上人（山科）となくふのあそん、（田向）えけ

内辨大炊
御門信量
外辨海住
山高清

奉行町廣
光

勝親親王
敦親親王
伏見宮邦
高親王御
覽セラル

奉書

少納言役
高辻長直
川忠富
命大

とるのあそん（白川）、むけうちあそん、（高見小路）もたうす、かふふさくら人ふふりなどあり、
一日のおとく御ひたかうしてまゆ御あり、宮の御方、二宮（勝親親王）れ御うふ、ふし
と殿も御あり、くむん（邦高親王）とくを御せんふ御あり、なふ新内侍いてさせさ
まふ、さたのふひよりを各をたゝなり、御むるもひうるゝ、ふち樂もおな
し、いて、御さう月ある、およのるみてさんしれどもうらふ御てうしい
つる、さるゝの事みて、まうちやくとを申さるゝ、あんさん寺殿も御あり
りみて、御ともれひとさちま、大さん所みまうこんふ、

〔親長卿記〕三十

傳奏奉書案 同 明 十一 十三

白馬節會御習禮事、昨日内々被定仰候趣相替候、女房奉書入見參候、可令計
申御沙汰給候也、恐々謹言、

正月十五日

親長

町殿

少納言役事、改長直朝臣可爲民部卿之由、被仰下候、式殺列事者、雖爲外辨上
首何事候哉、腋御膳奉行事、候、滋野井可存知候歟、重可被詞定候哉、（何カ）

文明十四年二月七日

二四九

內辨花山
院政長才

廣光奉
行職事代

參仕ノ人
々々

文明十四年二月七日

正月十五日

親長

二五〇

〔親長卿記〕

十三

正月十六日晴參內

略○中抑白馬節會御習禮內辨可為花

山之由有仰先日被治定了但今日仰云花山可為踏歌內辨白馬外辨可為海
住山少納言事長直朝臣為點改其儀可為民部卿云々可仰日野中納言云々
即仰遣了

廿七日晴參內○中白馬事日野中納言申條々奏聞御馬事可申左馬寮可示々
歟云々

二月七日今日白馬節會御習禮也奉行職事代日野中納言廣光也海住山大
納言中御門中納言新宰相中將中山宣親自予亭出仕予令著裝束予衣冠重大大外記

也代
午剋參內
參仕人々

內辨前內大臣信量東帶付魚筋劍海住山大納言東帶卷繪劍於堂中御

門中納言卷繪太刀巡侍從中納言夏東帶卷四辻宰相中將東帶筋劍宣親朝臣
夏東帶卷繪
太刀巡方帶給

少納言代

辨代

次將

少納言代

民部卿衣冠著靴

辨代

賢房

次將

左

資氏朝臣左馬頭代

右

言國朝臣右馬頭代坊家奏取次重治朝臣衣冠樂代

大外記代予少外記史代新中納言是外進退歟內豎代源富仲陣官代菅原長

胤大內記也內記菅原在數內膳代賢房腋御膳奉行代滋野井前宰相中將一采女代兵

部卿乃自代民部卿輔代以量朝臣菅原在數

內辨進退不召敍位宣命使侍從中欲下殿揖更居召宣命使奏例宣命之時於

軒廊指笏欲取宣命已二獻之後入御之上者於弓場可奏之間可令持內記仍

更拔笏宣命拜之時宣制一段之時欲左右左中御門中納言侍從中納言皆同

文明十四年二月七日

二五一

海住山不審之時、内辨思出了、此外事等不違記、今夜宿番不參了、
九日晴、參詣遺教經、異跡、其次詣德大寺前右府入道許閑談、節會事等語申了、
其次予尋申云、御一流ニハ謝座之儀有相傳事歟、返答云、爲其分不訪攝家之
儀云々、練事兩種相傳云々、被傳申内府歟、宣命使事相傳其外未申含云々、

〔長興宿禰記〕

下 二月七日、丙午晴、今日於禁裏白馬節會有御習禮、子細去月

十四日如元日御習禮、未剋被始之、日野中納言廣光卿奉行、早參堂上堂下御
裝束等奉仕之、内辨大炊御門前内府信量公、束帶、參役之外辨上首海住山大
納言高濑卿、束帶、以白畫儀、位次公卿以下衣冠、敍位宣命使侍從中納言實隆
卿、束帶、著夏袍、爲練步云々、天子親王二宮等出御南殿、於賢聖障子邊御見物云々、殿下内
々御參内、於堂上御見物、堂下見物人々、兼相以下數輩連袖群參、清三品宗賢
卿見物、散狀等注給續之、
文明十四二七於禁裏南殿、

非散狀、宗賢見及分注進之、

白馬節會御習禮

公卿 皆束帶、々、劍、或付魚袋、

廣光裝束
ニ奉仕ス

賢聖障子
ノ邊ニテ
觀覽

内辨信量公
大炊御門前内大臣

外辨宣胤卿

中御門中納言

外辨季經卿例宣命使御酒救使
左宰相中將

少納言

、
、
、
、

辨代

左兵權佐衣冠
賢房

次將

左

中將衣冠
資氏朝臣

右

中將衣冠
言國朝臣

輔代

式部 衣冠、以量朝臣 兼造酒正代、

兵部 束帶、菅原在數

文明十四年二月七日

外辨高濑卿有練
海住山大納言

不著外辨實隆卿敍位宣命使有練
侍從中納言

外辨參議左中將維事祿所
宣親朝臣

中將衣冠
重信朝臣 坊家取次、

文明十四年二月七日

內豎代

源富仲 兼召使代、當持丞代等、

陣官人代

菅原長胤

敝人代

式 教國卿衣冠 滋野井前宰相持笏、

兵 雅行卿衣冠 源大納言 卷纓持弓、

奉行職事代

廣光卿衣冠 日野中納言 召內侍扶持兼之、

內記

菅原在數

大外記代

前權中納言親長卿衣冠 按察使

六位外記史代

公兼卿衣冠 新中納言

立樂
萬歲樂

陪膳采女代

民部卿

役送采女代

權中納言宗綱卿衣冠 兵部卿

奉膳代

賢房

左右馬頭代

左 資氏朝臣 右 言國朝臣

祿所

參議宣親朝臣

辨代 賢房 史代 新中納言

立樂 萬歲樂、

頭右中辨 直垂 元長朝臣 笙 重治朝臣 衣冠

資冬卿 直垂 筆篔平松前宰相

〔山科家斷簡〕

文明十四年二月七日

文明十四年二月七日

〔端書〕文明十四年二月七日白馬節會御習禮用之

〔于今内藏所〕言國〔花押〕

二五六

天皇御南殿

内侍取下名臨東檻

内辨賜下名著宜陽殿兀子召二省賜下名

〔内辨大臣時胡床越入納言不覺也〕

左右近仗陣階下

〔余下同〕此間王卿著外辨胡床前取進杆北引自禦我左右床同下時出進前於立也將監内辨是出時事也〕

天皇著御々倚子

〔近仗稱警蹕〕

内侍臨檻

〔宋書〕御座定間移也次立杆即居胡床〕

開門

國司著

次兵部省昇立御弓矢楨

次内辨奏敍位宣命

次召二省輔代令直位記筥

内辨召舍人〔大舍人稱唯〕

少納言就版

外辨王卿參列

〔近仗趁〕

内辨宣刀福召

謝座酒了著座

〔近仗居〕

次二省率敍人參入

〔近仗趁〕

内辨召宣命使

〔有上階者中納言〕

内辨以下降殿

〔北上西面〕

宣命使就版

〔宣制了復座〕

群臣再拜了復座

〔敍人不拜〕

二省輔代召敍人賜位記

次敍人拜舞退出

〔近仗居〕

次親族拜舞

〔近仗不趁〕

次左右大將進白馬奏

撤標版等

次牽白馬

〔左右府生取標〕

次内膳供御膳

〔白馬渡此間近仗起〕

〔宋書〕先時以左近陣簡次爲右代馬式頭助頭渡之〕

次供腋御膳

〔近仗不趁〕

次供三節

文明十四年二月七日

二五七

○八日、晴、爲昨日之禮、伯民部卿來、又勸一盞、

〔西園寺家記録〕六十六公記 二月七日、同、今日禁裏白馬節會御習禮被行、從兼日參仕輩粗經營歟、傳聞、公卿、大炊、前、外辨所之、海住山大納言、中御門中納言侍從中納言、四辻宰相中將、宣親朝臣、外記代按察卿、其外各被用代云々、此儀可然事歟、如何々々、

〔塵芥記十輪院〕○内閣記 正月廿日、樂林入來、伏見宮七日節會可有御見物、續目次第可沙汰進云々、仍馳筆書進之、種々褒美、

廿四日、○中、四辻宰相中將有狀、節會習禮事也、

廿七日、四辻宰相中將來、節會之儀習禮、余雖斟酌授心中了、

二月四日、自殿下有使袍差貫冠可借用之由也、領狀申了、

七日、白馬節會御習禮也、内辨前内大臣、可別記、○別記所見ナシ、

〔資益王記〕 二月七日、遙拜、今日於禁裏白馬節會習禮、内辨大炊御門内大臣、外辨中御門中納言、侍從中納言、四辻宰相中將、中山宰相中將、辨次將左資氏朝臣、右言國、重治等朝臣、

〔大乘院日記目錄〕 三 二月七日、白馬節會、内辨大炊御門云々、

中院通秀
續目次第

近衛政家
裝束ヲ通
秀ニ借ル

翌年ノ習
禮、十餘年
事ナク公
儀ヲ知ラ
ズ

後鳥羽院
御記

壬生晴富
ヲ觀覽ニ備

飛鳥井雅
親下依ナ
ルニ依リ
勝仁親王
御所ニテ
行ハル

〔大乘院寺社雜事記〕 八十 二月十一日

一松殿中將下向、京都事色々物語、○中 同七日白馬節會内辨大炊御門子細（明年御習禮也云々、及十餘年公事無之、則、公家中無案内也、爲覺悟云々）

同前

〔京都御所東山御文庫記録〕 明治三十三年調 第七番合箱（外題）

節會習禮御記後鳥羽院御記 建曆二年三月廿四日條（外題）「後西天皇宸筆」

本奥書 右後鳥羽院御記、宸筆、文明十四年二月節會御習禮之次、申官庫累代之祕本之由、晴富宿禰備叡覽之間、竊被寫留者也、

○元日節會御習禮ノコト、正月十四日ノ條ニ見ユ、

八日、連歌御會、

〔京都御所東山御文庫記録〕 甲二十三日記 二月八日、亥ゆともめして、御

連歌御さゝあり、

○コノ後、屢連歌御會ヲ行ハル、コト、便宜左ニ合致ス、

〔京都御所東山御文庫記録〕 甲二十三日記 二月十九日、○中 あまう并れ

大納言入道めして、御連歌御さゝあり、下まうなるよよりて、御うさみ

文明十四年二月八日

二六二

〔親長卿記〕 十三

二月十九日晴參内飛鳥井大納言入道祇候有御連歌有
委之輩仍於親中院一位飛鳥井大納言入道榮也源大納言予侍從中納言
王御方有此事

〔賦物連歌〕

書察所藏

文明十四年十月十六日

賦何木連歌

賦何木連歌
三條西實
牛井明茂
邦高親王
勝仁親王
宵柏
中院通秀
御製
庭田雅行
白川忠富

霜さけてはらゝ花を枯野のち

實隆

冬乃葉なうら松あ茂きりぎ

二位入道

月出る夕やまほらし聲はえて

式部卿宮

あまごふ鴈ふ雲よ夢え行

親王御方

堂う秋ふさ夜の時雨乃うつるらむ

宵柏

みし希るはとを露れる虫夢

中院一位

むまひたるあとを玄くれぬ草枕

昨日の道そとふははる巻た

源大納言

年あえてあゝ後や春よりゆるらむ

民部卿

宗巧

霞あむらふ山乃朝あけ

宗巧十〇以下九

御製 十七句

親王御方 八

式部卿宮 六

侍從中納言 十

二位入道 六

宵柏 十二

中院一位 十

源大納言 二

民部卿 六

宗巧 十

按察 十一

宗綱 二

○轉法輪三條實量第等ノ連歌會ノコト便宜左ニ合敘ス、

〔西園寺家記録〕

實遠公記

正月十四日晴杉原伊賀入道來謁之明後日連

必可來之由使者令觸之間

十六日同今日連歌會張行發句予協宗伊伊賀守第三半井二位明茂人數十人也晡時々

分既滿紙殊發句已下予句宗伊褒美之間所自愛也晚景伊賀守許へ杉原

廿八日霧三條左府禪門亭有連歌會予行向之肴兩種雉鯛柳二荷隨身之前大炊

内府海住山藤宰相高倉水繼姉小路已下在之發句禪閣脇予晡時之終時分滿紙

廿九日同早旦從禪閣許以青侍被送書狀昨日所行向喜悅之由委細被示

三月五日晴三條禪閣亭月次式日也行向予發句事昨夕内々被申間堅辭退

及再三御命之間應之了

文明十四年二月八日

二六三

轉法輪三條實量第連歌會

杉原賢盛張行

文明十四年二月八日

〔賦物連歌〕

○宮内省圖書寮所藏

〔端書〕文明十四年正月十六日

賦何人連歌

賦何人連歌

雪乃山ろを宛て花の木する哉

英

またさくみ糸そと夜き梅り香

宗伊

春は夜のあらしの色よ月とれて

半井

の空ろふあくる川上乃そら

元用

舟うろふ水のこわりやちるらん

臨招

ゆけのあしま乃さとりある道

顯乘

霜さむくとりは糸くらを問ひひて

宗般

うねなる野邊の日は夜やうなり

世縁

をちうさよはと乃一むら暮りさり

宗順

風まゝし夜のまこ秋やちぬらん

英

おくれきもと露そこなるゝ

弘俊 八〇以下八十

英 十五句

宗伊 十四

半井 十

大乘院連歌

千句連歌

元用 十一

臨招 九

顯乘 七

宗般 八

世縁 十二

宗順 六

秀璠 七

弘俊 一

〔大乘院寺社雜事記〕

八十 正月六日、

一連歌始在之、

二月廿五日、雨下、

一月次連歌在之、泰弘頭也、

三月廿五日、

一月次連歌在之、頭圓秀、

〔大乘院寺社雜事記〕

八十 四月廿五日、

一千句連歌在之、

〔大乘院寺社雜事記〕

八十 閏七月廿五日、夜後大雨風以

一月次連歌在之、

〔大乘院寺社雜事記〕

八十 十月廿五日、

一月次連歌、頭寺務僧正、

文明十四年二月八日

文明十四年二月九日

十一月九日

一月次頭舜恩

〔後法興院政家記〕

七

十一月十八日、丑晴、於實相院有連歌子刻歸宅、

廿日、乙晴陰、自未剋雪降、積地七八寸、入夜雷鳴兩度、恠異事也、於實門有連歌、
(實通)少將發句也、

九日、戊春日祭ヲ停メ、尋テ之ヲ追行ス、

〔京都御所東山御文庫記錄〕

御湯殿上日記

三月三日、略中々ふかむる

つりよて、御しやうしむよていかし、御神事ヲ御入さし、

〔長興宿禰記〕

下

三月三日、壬晴、春日祭也、式引、上卿勸修寺中納言經茂卿、

少外記中原康純息少外記年、右大史高橋俊職息左少史長職為等參伺之、

〔大乘院寺社雜事記〕

八十

三月三日、

一今夜春日祭可有云々、經茂卿門前ニ被來、

〔春日祭歷名部類〕

(文明)

同十四年三月十五日、甲申、

祭、式引、

上卿權中納言經茂

〔續史愚抄〕

四十

後土御門院中之上

二月八日、丁未、春日祭延引、秘抄、

三月十五日、甲申、此日被行春日祭、上卿勸修寺中納言經茂參行、秘抄、

月次和漢聯句御會、

〔京都御所東山御文庫記錄〕

御湯殿上日記

二月九日、御りうんあり、いつ

との御しゆら并寄んなり、

〔塵芥記〕

十内閣院
府記
錄課所藏

二月九日、御月次御連句也、參仕、入夜八十句、

○每月次聯句御會ノコト、便宜左ニ合敘ス、

〔京都御所東山御文庫記錄〕

御湯殿上日記

四月七日、略中いつもの御を

んく御さあり、(水巻)せんき、(金巻)せんさうも御あり、

〔塵芥記〕

十内閣院
府記
錄課所藏

四月七日、天晴、御漢和也、參候、

〔京都御所東山御文庫記錄〕

御湯殿上日記

六月四日、月あとの御連々あ

り、せんきも御あり、ひる程も御てうしいさるゝ、

〔塵芥記〕

十内閣院
府記
錄課所藏

六月三日、晴、袍潤色、明日御聯句御會也、然而寫經

未終之由、内々可得其意之由、自西三被申送、芳情也、

〔京都御所東山御文庫記錄〕

御湯殿上日記

七月廿八日、迄の御さう月

文明十四年二月九日

二六七

四月

六月

七月

二六六

まいる、いつもの御連くあり、れんき御りいり、

〔塵芥記十輪院〕○内閣記 七月廿八日、晴陰不定、及申刻雨滂沱即晴、○中午

初刻參内、依御聯句也、余申上句、

梧得西聲動、蕪從東逝香、海住山、不圖蘭破參上五十韻祇候也、百句入夜事終、

十二日、亥、涅槃會ノ捧物ヲ般舟ニ味院ニ賜フ、

〔京都御所東山御文庫記録〕御湯殿上三日記 二月十二日、未、せんけ御やう

物、せんしゆ院とのへるいらるゝ、御所くゝ糸うとうふちをまごゝゝをるいらるゝ、

○安禪寺宮觀心尼ニ捧物ヲ賜フコト、便宜左ニ合致ス、

〔京都御所東山御文庫記録〕御湯殿上三日記 二月十四日、○中 あんさん寺

とのへ、御やう物よをひ三まぢ、枝よつあてゐいる、

十七日、丙、手猿樂アリ、

〔京都御所東山御文庫記録〕御湯殿上三日記 二月十七日、てさるかくさせ

らるゝ、かいとう七らうま、せふちあ、あま、まる、十六せん、ふしと殿、あんさ

内藤七郎
勤仕

孔雀問ニ
行ハセラ

ん寺殿、御ぬゝ所、大慈光院、仁和寺道水法親王、勸修寺常信、新をんしゆ、めうやう院、け宮御方、ま

やうこ院、ふけれうち殿、せんさう、せんきも御りいり、一こんをい大まもし

け御申、御ゆつあそのやうをり、御かむらけの物、御さるゐいる、御ひしゝ

とめてさし、かくやへと御所くゝ御よりあひみていささるゝ、

〔親長卿記〕十三 二月十七日、晴、早旦請取番祇候、仰云、今日可有手猿樂、可

祇候云々、令退出、令朝食歸參了、

手猿樂立合也、於孔雀、御手水間爲主上御座、鬼間伏見殿已下宮々有御座、朝

餉間親王女院、臺盤所女中等被候也、

〔後法興院政家記〕七 二月十七日、丙、晴陰、於禁裏有猿樂云々、

〔大乘院日記目錄〕三 二月十七日、於禁裏手猿樂在之、兩座云々、

〔大乘院寺社雜事記〕八十 二月廿三日、

一去十七日於禁裏手猿樂在之、京中若者也、兩座立合云々、難波新左衛門此

衆也云々、
山城神護寺僧法印權大僧都高祐ヲ權僧正ニ任ズ、

〔親長卿記〕

三十三 傳奏奉書案同文明十四

法印權大僧都高祐宜任權僧正可被宣下給候由被仰下候也謹言

二月十七日

親長

藏人左少辨殿

口宣案付進可注給候也

勸修寺宮執御申高雄法師云々法乘院とやらん

義政夫人日野氏義政ヲ長谷ニ訪フ

〔長興宿禰記〕

下

二月十七日

丙

晴今日室町殿御臺殿

一位

渡御長谷准后御

座所舊冬御出以來今日初有渡御入夜曉天還御云々

〔大乘院寺社雜事記〕

八十

二月廿八日

小雨

一去十七日御臺御方長谷准后御所へ御參御共細川淡州云々不及御對面

還御比興事也云々

〔大乘院日記目錄〕

三

同日御臺御方

長谷准后ニ御參不及御對面還御

十八日丁義尙ノ弟三寶院門跡得度シ義覺卜名ク義政夫人日野氏之

義政面セ

大僧都ニ任ズ

戒師報恩深

三寶院義賢得度ノ例ニ據ル

勸路解由小次路在通日進

ニ臨ム尋テ延曆寺戒壇院ニ大乘戒ヲ受ク

〔長興宿禰記〕

下

二月十八日

丁

晴今日三寶院門主

童形

將軍

御有御得度

御名字以後被任大僧都云々

〔三寶院義覺御得度記〕

原題御文明十四年二月十八日

御得度略記

文明十四年二月十八日戌越於京都法身院御坊有其儀就見聞大概注之矣

御戒師 報恩院僧正今度賢深

受者若公御歲十准后大樹御息

一今度御得度事應永十八年六月廿一日辛亥後義覺遍智院准后御得度被追彼佳

例云々

一日次事 兼從三位在通撰申之云々

一戒場事

小御所南向九間也指筵敷滿之但不用縁只所々閉付計也應永度此定也細々法事指日延無益者歟

文明十四年二月十八日

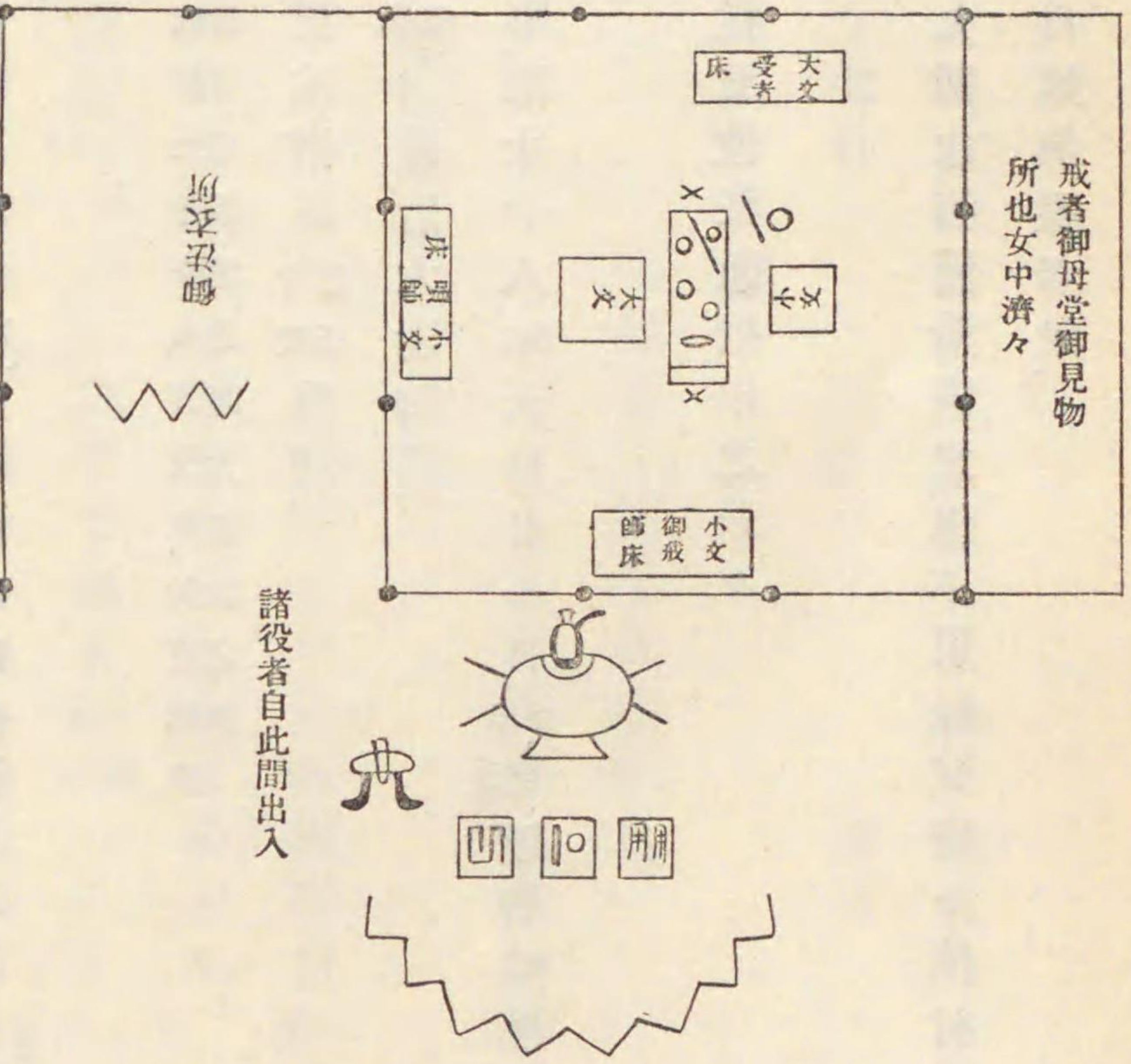
二七一

文明十四年二月十八日

二七二

得度ノ次第

師 剃髮 剃髮 剃髮
師 剃髮 剃髮 剃髮
師 剃髮 剃髮 剃髮
師 剃髮 剃髮 剃髮
師 剃髮 剃髮 剃髮



一 唄師著座、次御戒師著座、先威儀僧兩人持法具、御戒師疊左右置之、後著座、
 次受者御著座、蓮藏院公深法眼、辰巳角間御障子奉入、
 次御戒師起座、令始事、如常表白等了、大德一心念□慈愍故□三說了、暫被
 閑戒躰於机上、

教導賢超

剃手弘朝

次受者御氏神等御拜如常、

教導予、參御座傍奉教導、今度不設教導座、自元用否隨時、今度予俄參上、應永度不用之云々、

御拜次第、先向南御氏神、八幡、三拜、次向戌亥國王御三拜、次向丑寅御三拜

准后當時依長谷御座也、次向西籬中、御三拜、合十二度也、

次傍官二人直物具、豪俊上座、宗親寺主、

先御脇息置之、次御水瓶タライ等次第置之、此間予御座傍候、中事周備後、

受者御起座、御移住半疊、

次諸役者悉群參、脂燭役有職三人、世出、各役之、御剃刀手弘朝法師奉剃之、依

堪能歟、右方奉剃之間、唄一遍如常、左方又同前、合而唄二遍也、奉剃之間、唄

可引合云々、左右奉剃了、打懸御帷、自件間奉出之、出御法衣間、脫俗服、奉令

著法衣、但御袈裟召姑予持之、奉入戒場、直於壇前御蹲居、予右御脇、仁候、先

御戒師執剃刀、即奉當御頂、次申入御法名義覺云々、次予進御袈裟疊、受者

以右御手、自花瓶之北、被遣御戒師、御戒師賜之、自花瓶南被授申之、受者以

左右御手御頂戴、如此三ヶ度之後、御袈裟於予賜、御受戒之間、奉持之、猶傍

御座傍御受戒之儀、奉教之、御受戒了、御座御還著後、予件御袈裟奉令懸之、

文明十四年二月十八日

二七三

文明十四年二月十八日

二七四

予退出、神分祈願時分、公深法眼參、開御障子、奉出六種廻向等、了御戒師唄師出堂、

受者召御裝束、御臺御前御參、

受者御裝束、御鈍色、ス、シノ御裳、御表袴、縮線御念珠、七裝束御檜扇、御鞆、小ケサ歟、

御戒師法服平袈裟、唄師鈍色、甲袈裟、予鈍色、小袈裟、諸役者悉鈍色、小袈裟、脂燭ハ四人歟、不審也、

諸役者

一諸役者

御戒師僧正賢深、唄師權僧正賢譽、于時權僧正教導予、賢怡理髮、大僧都脂燭、弘宣律師御介錯重賀法印、道場奉行經譽法印、坊官二人、宗觀寺主、

一今度御臺渡御、仍御得度已前一獻有之、報恩院僧正、觀心院、予三人被召出、御臺其後金剛王院、蓮藏院兩人被召出云々、理性院依遲參、御前不被參之、

一任例大僧都宣下、一同座主宣下、

已上三月歟、二月歟、

一今度坊官二人裝束、前駟裝束ノ由、後日沙汰アリ、兩様無相違歟、應永度從

義政名字
折紙ノ義
覺ニ加點
ス

僧裝束之分明也、寶徳元年二十五度ハ前駟裝束云々、何モ無相違歟、

一戒師法具ハ、直ニ前机ノ前、半帖ノ左右ニ置之存也、

一戒師御布施貳千疋、

右記六無沙汰之處ニ、妙法院僧正、賢超製作之申之間、所望即寫之、左點ヨリ已上ハ彼自筆也、其内少々加筆、左點ノ奥ハ、予隨思出加書之、不及他見ニ云々、

文明十六辰甲八廿一書續

藤在判

一御名字依仰三注、予東山殿ニ持參、以春日局致披露之處ニ、覺ニ御點ヲ被出了、仍被稱義覺者也、

〔三寶院文書〕四十山城

〔增取書〕御所様御得度記自用ニ注之、金剛佛子賢怡

文明十四寅壬年二月十八日

三寶院殿御得度於京御門跡在之、道場御九間、指圖紙在之、疊ヲ上テ取指筵敷之、御座并戒師座唄師座敷之、
一机立半疊敷之、同授者御半疊、大文敷之、

文明十四年二月十八日

二七五

一 授者御裝束、御半尻、御前張、十五歳、

一 戒師、報恩院僧正、賢深、法眼、平袈裟、

威儀師兩人在之、居箱役大藏卿律師、隆祐、鈍色、白裳、少袈裟、香呂箱役大夫

律師、隆助、裝束同、戒師著座時、机前半疊左右置之、

一 唄師、觀心院權僧正、賢譽、鈍色、香裳、平袈裟、

一 教導、妙法院權僧正、賢超、裝束唄師同、但少袈裟、

一 扈從、蓮藏院法眼、公深、鈍色、白裳、少袈裟、

一 剃手、大藏卿法印、弘朝、鈍色、白裳、少袈裟、

一 理髮、辨大僧都、賢怡、兵部卿僧都、仙海、裝束、剃手同、

一 脂觸役、三位律師、文春、大輔律師、弘宣、中將律師、深雅、仙豪大法師、已上裝束同、

同、

一 從僧、民部卿上座豪俊、民部卿寺主、宗親、鈍色指貫水瓶已下物色々運之、

一 御次間用意シテ置之色之、
六間

一 折臺、一合御刀、一合燭、一合紙、左右一合ヒタシ、紙左右一合脂燭、油一合御櫛、等物、

戒場奉行

已上

一 脇息ニ御湯帷懸テ置之、從僧持參

一 御輿水瓶入テ置之、上同、其外折臺物色々從僧役シテ持參也、

一 水瓶役理髮役兼之沙汰也、

一 戒場奉行左衛門督法印、經譽、右兵衛法印、重賀、辨大僧都、賢怡、兵部卿僧都

仙海、也、別テ予奉行之、

一 上様戌刻已前御成、三獻、如形參

一 御得度戌半刻計在之、已後又三獻參之上様還御後、祇候面々御湯ツケ在

之、同召出在之、御差ニテ被下之、

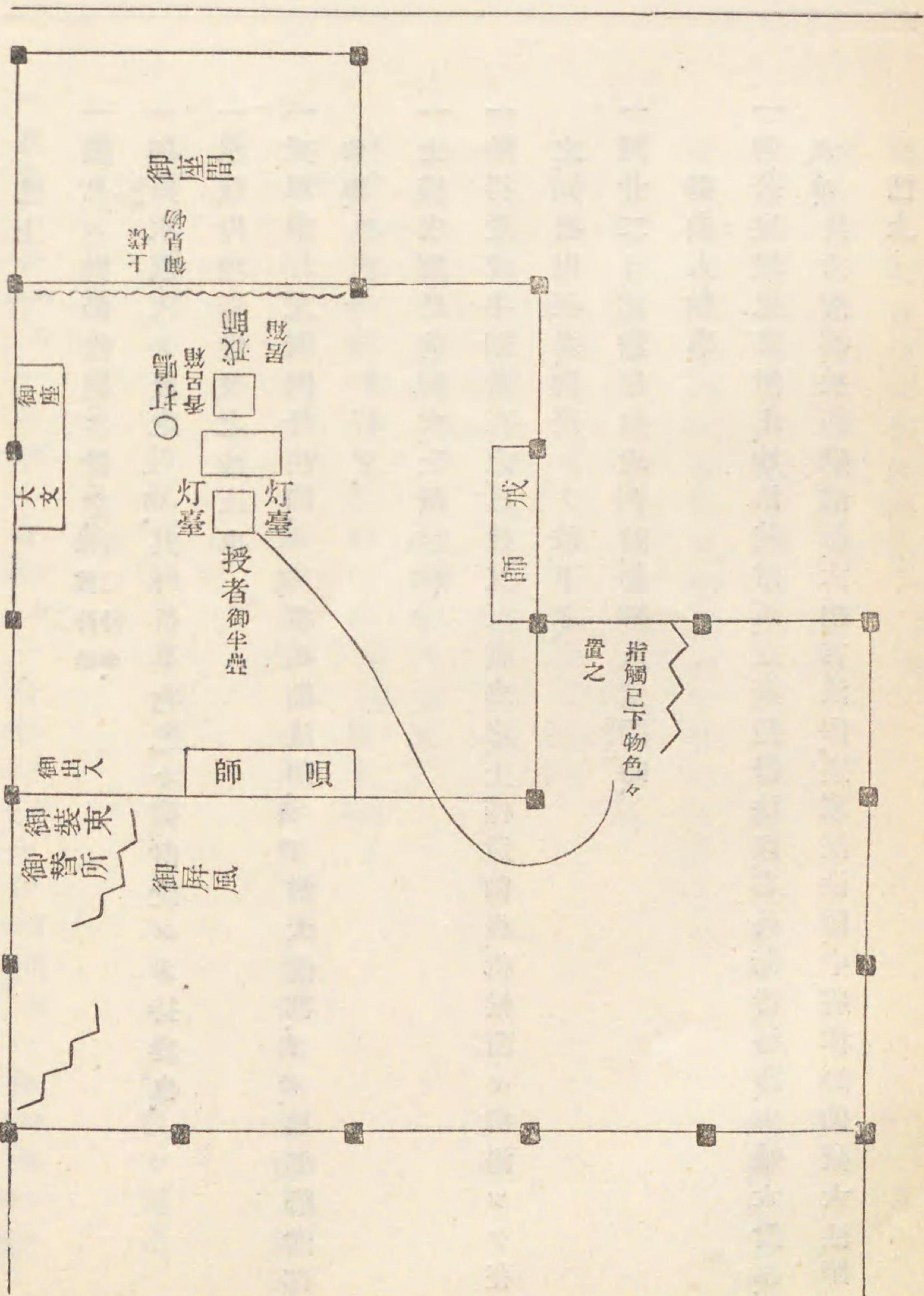
一同廿二日、御勲始如說例時、如御入堂始カ時、

御勲人數事

一 御著座報恩院僧正、妙法院僧正、左衛門督法印、右兵衛督法印、少輔大僧都、

超瑜、辨大僧都、兵部卿僧都、大納言法眼、蓮藏院法眼、中將律師、仙豪大法師

已上



童形寺務

寫本云、自用ニ注之、仕堅之不可有外見候、文明十四年二月日 賢怡

〔五八代記〕

○三山城 權僧正義覺 征夷大將軍左大臣義政公御息、東山院、號

一文明元年、于三歲門主職、爲門下候人申定之、御童形寺務初例歟、

一文明十四年、寅年二月十八日於法身院道場九間御得度、

一受者、十五歲御裝束御半尻、御前張、

一戒師報恩院僧正、賢深、法服、平袈裟、威儀僧二人、居箱大夫藏卿律師隆助各、鈍香

色、白袈、少袈、裝、

一唄師觀心院權僧正、賢譽、鈍色裳、平袈裟、

一教導妙法院權僧正、賢超、同、

一扈從蓮藏院法眼、公深、同、但白、

一剃手大藏卿法印、弘朝、同、

一理髮辨大僧都、賢怡、兵部卿、仙海、

一脂燭役三位律師、文春、大輔律師、弘憲、中將律師、深雅、仙豪大法師、□□

一從僧民部卿寺主、宗親、鈍色指貫、水瓶以下物色々運□

一同廿二日御勤仕人數之事、

文明十四年二月十八日

文明十四年二月十八日

二八〇

御著座報恩院僧正、妙法院僧正、左衛門督法印、右兵衛督法印、少輔大僧都、超瑜、辨大僧都、兵部卿僧都、大納言法眼、蓮藏院法眼、少將律師、仙豪大律師、

〔醍醐寺新要錄〕

世〇義十〇六日下見座十五次第主職部本〇山城 第七十六權僧正義覺慈照院義政公御息御早

〔醍醐寺新要錄〕

報恩院下諸院部〇山城 一隨役事

文明十四年寅二月十八日後法身院權僧正義

一御得度、扈從蓮藏院法眼、公深

同廿二日御勤始、如先例時、人數事、御著座、報恩院僧正、蓮藏院法眼、

〔三寶院文書〕

〇三十四山城

義覺二字反音岳、高山名同嶽、

〔京都御所東山御文庫記錄〕

御湯殿上日記 二月十六日、略 〇中三やう院御

とくと御れいよ御ありきちやう所よて御さう月三こんある。

〇以下、受戒ノコトニカ、ル、

〔三寶院文書〕

〇十八山城

比叡山延曆寺戒壇院

奉請靈山淨土

義覺得度
御禮ノ爲
參内

義覺戒牒

釋迦牟尼如來爲 和尚

奉請金色世界

文殊師利菩薩爲 羯磨阿闍梨

請觀史多天

彌勒菩薩爲 教授阿闍梨

奉請十方一切世界

一切諸佛爲 尊證

奉請十方一切世界

式切菩薩爲 同學等侶

奉請當寺

大德律師爲 傳授戒師

沙彌 義覺 稽首和南

大德 定下カ □ □

竊以、無明長夜、戒光爲燈、滅後軌範、木叉爲師、所以賊縛比丘、脫草繫於王遊、乞食沙門、顯鵝珠於死後、故能三觀佛乘、結三身於究竟、三種淨戒、開三因於初發、但 義覺、宿因多幸、得遇勝緣、棄妄尋真、精祈戒品、庶使無上佛種、藉此敷榮、塵勞

文明十四年二月十八日

二八一

文明十四年二月十八日

二八二

稠林因茲彌滅、今契文明十四年四月八日於比叡山延曆寺大乘戒壇院、受菩薩別解脱戒、伏(願悲)□□拔濟、謹和南疏、

戒牒

文明十四年四月八日

沙彌 義覺 謹疏

比丘 義覺、今蒙悲濟、秉授淨戒、納法在心、福河流(注)□伏乞現前(也)□戒和上、幸垂(示)□

□永爲戒驗、

□戒和尙座主阿闍梨准三宮 都維那法橋上人位

□眼和尙位

□和尙位

□

戒行(花押)

戒用代(花押)

師主

沙彌 義覺 戒牒 文明十二年三月八日、

尊應御筆也

〔五代記〕

○山城

權僧正義覺

征夷大將軍左大臣義政公御息、東山院、後法身院、依无受法、雖門跡相續、除之、

○中略上

收

一文明十四年四月八日受戒、

十九日、關白近衛政家ノ子(通尙)元服ス、尋テ、正五位下ニ敍シ、左近衛權少

將ニ任ゼラレ、禁色、昇殿ヲ聽サル、

〔後法興院政家記〕七

二月一日

晴、小雪散、

前藤亞相父子、勸修寺亞相、海

住山亞相、勸修寺黃門、江邊三位、忠顯朝臣、富就朝臣等來、小童元服事、雖爲代

々武家加冠、當時作法難事行間、於此亭如形可遂其節、歟由、去月内々伺准后

邊之時宜處、許諾云々、仍名字事可申請御字之由、今日以傳奏令申、(付書狀於)

裝束等去月廿日爲吉日間、少少仰付了、有宣卿勘文事同相尋之處、當月十日

十三日、十九日云々、

四日、卯、夜來雪不及埋地、時々雨下、(中)小童自石藏歸、就小童元服、名字事自

准后昨日有御返事、大樹名字事可被出之云々、自准后被執申分也、仍今日申

遣傳奏許、

五日、辰、夜來小雪不及埋地、終日雪散風吹、本滿寺住持來、持參一荷兩種、勸盃

酌、自傳奏申送云、昨日御名字事、申入大樹處、不可有相違之由、有返答云々、祝

著也、就元服之儀、自實相院板六間分給之、

文明十四年二月十九日

二八三

代々武家ノ加冠
自第ニ於テ行フ
偏字ヲ義政ニ請フ
土御門有宣日時ヲ勘フ
義政義尙ナシテ偏字ヲ與ヘシム

名字ハ東
坊城和長
勘進

文明十四年二月十九日

二八四

□□申、晴、小童名字事、菅原和長令勘進字事、内々注遣了、余名字益長卿勘進也、任彼例内々仰了、

十二日、亥、晴、風吹、午刻參大樹、就小童元服、名字事申請御字、一昨日被出御點爲其禮、今日參申了、南御所江、渡御云々、申置歸、名字和長勘進、注折紙進大樹、付傳有合點、

尙家

尙實

尙通

義尙尙通
二加點ス
元服習禮

十三日、壬、陰、自酉刻雨雪下、元服之習禮也、海住山亞相、藤黃門等來、

十六日、卯、晴、元服習禮也、前藤亞相以下來、自民部卿局、鷹一、雉五給之、

十九日、午、晴、陰、是日小童加元服、名字尙通、刻限余出座、戊刻内々有宣、卿次公

卿著座、海住山亞相、納言、勅修、理髮頭、右大辨政顯朝臣、所役殿上人、光朝、朝臣、實治、

諸大夫、久任、布衣侍、以高、御裝束司、冷泉侍、從、永宣、扶持、公卿、藤中納言、今日昇

殿、禁色、正五位下等被宣下、上卿海住山亞相、職事政顯朝臣參陣也、今夜之儀

不記巨細、次第在別紙故也、次行三獻云々、自余酌有召出、裝束衆許給之、スワ

元服次第
理髮勸修
寺政顯
裝束司冷
泉永宣
宣住山卿
海住山高
清
職事政顯

ウキノ侍海住山亞相酌召出之、盃酌以後各進太刀、兩御次著烏帽子并水干
葛袴等、今日裝束白浮織物直衣、文小濃紫指貫、文龜單、左幕下、下具等一向略
之、狩衣令新調之、色松重裏、紫文松枝、昨日申出大樹御狩衣大口、自方々樽美物等進之、

自禁裏給御冠、則放巾子、御直衣事當時御服闕□問、不□沙汰、

廿日、己、晴、陰、今日又有御祝事、海住山亞相、藤中納言、右衛門督、園少將、基富、菅

原和長、夏弘、經弘等來、自鷹司并一條有使者、給太刀、被賀元服事、自柿御園下

鄉種一荷、鱸二、二百疋、又自山上鄉二百疋、公文二百疋進之、御元服禮也、

廿一日、申、陰、風吹、自午刻雨下、大祥院令來給、樽二荷、折二合被隨身、禁裏御

樽三荷、鷹一、海老一折、鯛三合進上、依元服事也、雖無先規、依伯民部卿意見令

進上之、御悅喜之、由有御返事、松田豐前許へ三荷兩種遣之、今日前藤亞相以

下祇候者、女中令申沙汰、銚子事、及大飲、次頭辨政顯朝臣兩種一荷令持參、

勸修寺亞相、伯民部卿、中御門中納言、橋本中將、公夏朝臣、在通卿、左少辨俊名、

伊勢備後守、結城七郎、松田豐前守、宇治大路等來、九條前關白、淨土寺等以使

者被賀元服、建仁寺長老來、大内記菅原在量持來位記、

九條政基
元服ヲ賀

鷹司政平
一服ヲ賀

鷹司政平
一服ヲ賀

文明十四年二月十九日

二八五

二條持通
西園寺實
遠長山院
政道聖元
院賀賀元
實相賀賀
運信賀賀
門信賀賀
服信賀賀
義政賀賀
刀賀賀
元賀賀

義尚二恩
ヲ謝ス

左近衛權
少將宣下

廿二日、酉、晴、二條大閤、西園寺右府、花山院大納言、聖護院准后等、就元服之儀、以使者被賀之、富就朝臣、冷泉大納言、下部兼致、
廿三日、戌、晴、陰、風、吹、自實相院准后、以成傳法橋、被賀元服事、清水谷亞相、有宣卿、清三位、理覺院、姉小路宰相、飛鳥井少將、雅俊等來、內府以使者賀元服事、
□□、夜來雨下、已刻止、早旦相伴少將、參北野、平野御靈社等、次參長谷准后、武家、進太刀、余分金覆輪、少將分太刀、助綱、千疋也、有對面、次參聖護院准后、有對面、次參實相院准后、被參禪閣御方云々、次參禪閣御方、余分折二合、御樽一荷、耳、少將分太刀、金、馬一疋、代二、有盃酌事、次參大樹、余分太刀、金、少將分太刀、長光、香合、堆紅、盆、堆紅、御馬一疋、代三、有對面、次歸宅、少將事今日宣下也、
廿七日、寅、晴、○中大館治部少輔為元服禮來、
卅日、巳、晴、陰、五靈殿令來給、山科中將言國朝臣為元服禮來、
三月一日、午、陰、按察卿侍從中納言等、為元服禮來、持參太刀、
五月十二日、辰、晴、入夜三條大納言來、元服禮也、持來太刀、
十八日、戌、晴、陰、朝間小雨灑、仁木中務少輔為元服禮進太刀、金、茶百袋、自去年如此、

政家青侍
進藤長泰
在宿所ニ
加冠政家
家禮小槻
長興

〔長興宿禰記〕

下

二月十九日、午、晴、今日、近衛關白殿下御息若公御元服也、

御名字

當時御所御侍進藤宿禰邊也、御座於彼御所有其儀、御父關白殿下為御加冠、理髮頭左中辨政顯朝臣、著座公卿三人、海住山大納言、高濑卿、勸修寺中納言、經茂卿、武者小路中納言、綠光卿等也、脂燭殿上人、所役諸大夫、布衣侍等、各兩三人云々、予為家禮之間、可參候之處、自去月始比所勞無出頭之間、不參仕者也、

入夜有宣下之儀、上卿海住山大納言、頭左中辨政顯朝臣、實首以後、昨日奏慶云々、少外記

清原賢親等參陣之、若公令敍正五位下給、次禁色等事有宣下云々、

〔西園寺家記錄〕

實遠公記

二月廿二日、晴、○中關白息去十九日、有元服事、以持明院少將賀送之、

廿五日、及晚雨下、從關白有使、少將、先日就元服、所遣使被謝之、對面了、

〔大乘院日記目錄〕

三

二月十七日、陽明若君御元服、

〔大乘院寺社雜事記〕

八十

二月廿八日、小雨、

一同夜陽明若君御元服、

〔京都御所東山御文庫記錄〕

御湯殿上日記

二月廿一日、おんゑ殿より三

色三ありいる、

〔歴名土代〕正五位下藤尚通 同十四二十九直彼十才 同廿四日右少將、

二十日未義政夫人日野氏、禁裏番衆ニ酒肴ヲ贈ル、

〔京都御所東山御文庫記録〕御湯殿上三日記 二月廿日、御さいより、ごんし

ゆ所へをり御さるいさされて、しやうくをんとをなり、

二十三日戌、壬北野社法樂千句連歌御會、

安禪寺宮
觀心尼連
歌ノ御料
茶子等
ルニ
チニ
ルニ

發句ヲ定
メラル

〔京都御所東山御文庫記録〕御湯殿上三日記 二月廿二日、あんせん寺殿よ

り御せん歌ハ御ようよとて、御ちやれこ二をり、御ちやれやつきん（ん）一つり

争ある、梅枝をある、御所中御さうちせらるゝ、御ゆまる御さあり、

大を新大もし御あり、おとこさち□うよて、御やつくさささめらる

ゝ、御さう月ある、

義政魚ヲ
獻ズ

廿三日、あう月やう樂千くハ御せん歌としまは、

廿四日、御せんうおれし、あんせん寺殿より御ちやをけ色ノゝある、すけ

殿よりをり二うう、御てうしある、

廿五日、略中むろまち殿より御まれ三色ある、千くの御やうらくくれゝ

平野社法
樂百韻連
歌

千句連歌
參仕ノ人
々酒饌ヲ
獻ズ

勝仁親王
千句目ノ
御發句ヲ
詠セラル

半井明茂
顛倒ス

よとて、又ひら野の百いんおちしく御さあり、とて、御さう月あり
る、をるノゝとめてさし、るしやう院よりをり二うう、御さる一うある、め
うやうぬんの宮の御うゝ、女さうさちの、々ふれやうらくよ、さんしやく
しもつゝ、とりうさまゐいらるゝ、
卅日、御まうんあり、千くハ人を御てうしとをあるいらせらるゝ、大しや、寺
殿、かんろしよりを枝ある、

〔塵芥記十輪院内府記〕録内閣記 二月廿二日、及晚參内、自明日御千句發句脇第三

等被評定、初百韻御製、脇親王御方等也、仍三百韻發句申之、親王御方千句目
御發句也、

廿三日、今日四百韻、入夜事終、

廿四日、晚頭事終、三百韻也、逆鱗事有之、

廿五日、三百韻結願無爲、平野法樂之五十韻計比半井二位入道顛倒、依此事

時宜不快、殘五十韻遅々及曉鐘了、

廿九日、明日申沙汰事、兼以伺申入、是御千句無爲祝著之間、面々申沙汰之心

發句御製

文明十四年二月十九日

二九〇

卅日、早旦、取集所々之十六分付長橋局了、此次三ヶ勸、一ヶ冷、直付進云々、惣料二百疋也、御發句、露（つゆ）より花（はな）さいいて、枝（えだ）のちし、脇題、春玉座遊、廿申之、於男末有御湯漬、御會以後於御所三獻、其後御聯句殘御沙汰、窮屈之餘、申入一兩句逐電、

〔親長卿記〕

十三 二月十七日、晴、早旦請取番祇候、（中）千句御連歌、第八發

句事兼有其仰、今日入見參了、

下水（みづ）かゝみ（み）あちる（や）花（はな）くもり（此句有御合點）

廿二日、晴、參内番也、自明日可有千句御連歌、仍腋第三被定、（於發句兼日被治定了）

第八發句
甘露寺親
長露寺親
長露寺親
發句作者

發句衆

第一並平野（第十）、第二御製親王御方、伏見殿、中院一位權帥、勸修寺大納言、海住山大納言、予侍從中納言、右衛門督、

於腋第三當座被治定、今日各付之、予於御前書之、賦物同被治定了、

廿三日、晴、自拂曉參御前、（下局各自夜前祇始行、初百執筆侍從中納言、第二

執筆中御門、第三百右衛門督、第四時顯朝臣、入夜事終、朝晚兩食於御所沙汰

之、

初百韻
筆三條西
實隆御
執筆中御
執門胤御
執筆冷泉
執筆三時

爲廣
第四百韻
院時顯

廿四日、陰、自早旦參候、如昨日、今日有三百韻、入夜退出、

廿五日、晴、及晚風雨甚、拂曉參御前始行、三百韻、及晚頭事畢、有平野法樂百韻、（執筆海住山）

半夜鐘之程事終、休息局、

卅日、晴、參内、有和漢御會、（于細之時、去年人々一日有申沙汰、仍當年申其

中院一品權帥、勸修寺大納言、海住山大納言、予、勸修寺中納言、中院中納言、侍從中納言、右衛門督、宣親朝臣等也、

〔長興宿禰記〕

下 二月廿五日、（甲）雨下、（中）是日禁裏御千句連歌終也、一昨

日、（廿三）被始之、御人數、兩親王、中院一品、通秀卿以下十七人也、御發句第一御

製也、南よ花（はな）を（け）なる北野哉、

〔賦物連歌〕

（書）○宮内省圖

〔(原書) 文明十四年二月廿三日〕

第二

賦何木連歌

さ（は）つ（き）て（う）は（な）る（は）乃（千）枝（哉）

む（め）ち（は）あ（や）を（よ）ふ（下）風

式部卿宮

文明十四年二月十九日

二九一

賦何木連
歌
邦高親王
御製

文明十四年二月十九日

二九二

葉室教忠
海住山高
清
勸修寺教
秀
勝仁親王
中院通秀
甘露寺親
長
中御門宣
胤
田向重治
半井明茂

月のこるいり江の水れ霞きて
 なたゑる浪よ舟ううふきゆ
 朝ことにつりする人や出ぬらん
 道あまたほほむらけ一うよ
 煙ふつ里よる竹を打おひき
 あらしそくうと山の寒けし
 なる雪よぬをといいまの時雨よて
 糸くからもとむる鳥さのくかり
 人のなごこれ夕くれをといさらん
 御製 十四句 親王御方 六 式部卿宮 五
 中院一位 八 權帥 九 勸修寺大納言 十一
 海住山大納言 十一 按察 八 勸修寺中納言 二
 中御門中納言 四 侍從中納言 三 二位入道 三
 右衛門督 三 宣親朝臣 三 重治朝臣 五
 源富仲 四 時顯 一

權帥
海住山大納言
勸修寺大納言
親王御方
中院一位
按察
中御門中納言

重治朝臣
二位入道○以下八十一句略ス

○二十四日、二十五日ノ連歌略ス、

二十五日、子鳥居大路諸平ヲ賀茂社社務ニ補ス、諸平辭スルヲ以テ、松下夏久ヲ之ニ補ス、

〔親長卿記〕

三十一 傳奏奉書案 同 明 十三

從四下賀茂諸平縣主、宜爲賀茂別雷社神主、可被宣下給候由、被仰下候也、謹言、

奉書

二月廿五日

親長

藏人辨殿

當社々務職事辭退之間、被仰正禰宜諸平縣主候之處、是又俄事難叶之由、堅歎申候、此上一社一同加評議、可被致無爲之沙汰候歟、不然者被略神事歟、各可被存知之由、被仰出候旨、可申之由候也、恐々謹言、

二月廿九日

親繼判

賀茂一社御中

文明十四年二月二十五日

二九三

正四位下賀茂夏久縣主、如舊宜爲賀茂別雷社神主、可令宣下給候由、被仰下候也謹言、

八月廿八日

親長

藏人辨殿

〔親長卿記〕

十三

五月一日、晴、詣賀茂見物足調、人々同道、社務、棟久縣主、彌

久縣主、諸平縣主等送一盞、

○社務森貞久ヲ罷メテ、市繼平ヲ之ニ補スルコト、文明十年三月二十

七日ノ條ニ、夏久ヲ罷メ、諸平ヲ代リ補スルコト、同十五年二月二十一

日ノ條ニ、繼平ヲ再ビ社務ニ補スルコト、同年十月二十七日ノ條ニ見

ユ、

義政、山城西賀茂正傳寺ニ方違シ、尋デ、東山山莊ノ工事ヲ觀ル、

〔長興宿禰記〕

下

二月廿五日、甲雨下、今夕室町殿、准后、自長谷御在所渡御

西賀茂、聖傳節分以後爲四十五日御方違、彼寺有御一宿、於東山淨土寺被新

造御所、可有御移住謂也云々、近日淨土寺内被點敷地、御造作御用意等在之、

翌朝自賀茂還御、直渡御淨土寺、敷地譜請等被御覽之後、還御長谷云々、

惠應ノ重
長十七回
忌香語

菩提ノ爲
ニ林泉寺
ヲ建ツ

〔西園寺家記録〕

六十六公記

二月廿六日、終夜雨降、今朝晴、武家准后昨夕自

長谷、賀茂、聖傳天寺ニ方違、今日東山へ渡給、普請地形等被歷覽云々、

○義政、山莊ヲ淨土寺ニ扨建スルコト、本月四日ノ條ニ見ユ、

越後上杉房定ノ執事信濃守長尾重景卒シ、子能景嗣グ、

〔曇英禪師語錄〕

林泉寺殿實溪正真禪定門十七之香語

舉香云、此香、霜皮四十圍之盤根、挺出祖苑、風枝三千歲、奕葉、覆蔭皇家、怨敵仰

望、逆心頓息、詩人吟咏、幽思辟邪、瞻部洲日東扶桑國、越之後州府君幕下執事

平朝臣信州太守長尾能景公、明應七年戊午二月廿五日、伏值先考實溪真公

禪定門一十七年忌之辰、爲報劬勞深恩、兼日淨除古寺之基、建立林泉禪寺、布

精金八十頃、右輝妙高峰斜照、現梵刹於一莖草、左翻米山頂之彩霞、夕誦晨禪、

勸修喜神鬼、朝參暮請、法戰鬪龍蛇、實真族植福之地、而一時之奇觀也、誰敢不

拜嘉、今月今日、就于本寺、虔備香華燈燭、茶菓珍膳等之香味、號神儀於林泉寺、

供佛齋僧、前七日際、或讀誦八軸之蓮經、或修禮一座之妙懺、誦諸呪陀羅尼、種

々勤行、不遑縷陳也、卽今當散筵、謹命現前一會之禪侶、誦大佛頂、一呪之

次、住持小比丘惠應、感信心之誠、熱向適來、拈出一瓣兜接婆於寶爐、以奉供養

文明十四年二月二十五日

二九六

本師釋迦如來、佛名不書、上來一一勝事、專奉為林泉寺殿實溪真公禪定門、資嚴報地者也。夫以神儀鸞鷲離丹穴、騏驎出渥洼、顯職傳家、每莅政用廉潔、精忠報國、不好賞厭粉奢、一門玉季金昆、連屋接座、或細聲談烹鸞膠之密旨、若雄辯誇施豹略之周遮、於戲盛哉、文經武緯、織成國家光彩、線路不差、雖然與麼、何翅平日用底家常之世事而已云乎、不拘迷悟凡聖、一靈真性、實溪聲山色、事々無碍、受用快活、而當人不辨底之一著、有甚广了知之可加、喝一喝、挿香瓣於爐云、一十七年遊聖涯、檀烟駕輿白中車、德香露出熏孫子、是處吹芳二月花、

〔普光寺文書〕後○越

林泉寺殿實溪正真大居士

前信濃守重景公、云能景公父也、

文明十四壬寅二月二十五日逝去、

〔長尾系圖〕

賴景

重景

信濃守、上杉房定、房能執事職、出張關東軍功數回、文明十四年二月廿五

家系

日卒、五十八歲、法名實溪正真大居士、謚林泉寺殿、林泉寺、領千五百石、家繼公以後、年頭惣御禮、

能景

景房

〔長尾那波系圖〕越後長尾系圖

賴景信濃守

重景信濃守

能景信濃守

○能景、林泉寺ヲ創建シテ、重景ノ冥福ニ資スルコト、明應六年七月二十一日ノ條ニ見ユ、

二十八日、飛鳥井雅親ヲシテ、御物古今和歌集ヲ校合セシメラル、

〔親長卿記〕十三

二月廿六日、晴、大納言入道申、古今與書事奏之、

廿八日、陰、入夜雨下、○中飛鳥井大納言入道榮雅來、禁裏古今御本御不審所々、並筆者事有御尋、日有仰、先為重卿筆跡也、御不審所々直之、加與書進上之、次月次事於愚老者大略在國、雅康入道一向不存是非之間、先當年中事者、為勅

文明十四年二月二十八日

二九七

雅親在國、依月、次和歌題

ハ勅題ヲ
京ノ節ハ
歌題ヲ進
ズベシト
連延

歸足

題者可然、我も又一兩度者可出京之間、其時可書進上於此段或被仰他家、或被略御月次者、可爲迷惑云々、其次條々申之事多々之間略之、

次閑談、予尋云、蹴鞠連延事、故贈亞相被仰しハ、一人シテ、二度も三度もツ、ケテノフルヲ、連延ト云々、或記二人三人相並テノフルヲ、連延ト云ト申如何、我家説如予申、一人二度三度モツ、ケテノフルヲ申也云々、又歸足事、誰々ニモ令祕テ不申事アリ、イカナルヨキ歸足モ、カ、リトヘムキナヲリツレハ、惡足也、タトヒヲトシタリトモ、カ、リヘムキナヲリタラハ、ヨキアシナルヘシ、故入道モ、此儀ヲハ、誰々ニモ不申云々、

塵芥記

十輪院
内府記
録
内閣記
課所藏

七月十一日、旬儀如恒朝飯以後參番、古今校合、

義尚、生母日野氏ト共ニ參内シテ、宴ニ侍ス、

〔京都御所東山御文庫記錄〕

御湯殿上日記

二月廿七日、中略あまの御さ

ん成カとあるへ、支みて、御所中御さうちさるる、大納言殿御ひとりの御しこう、御てうとうな成カ御さの御りさる御ありあるへ、後よし御申みて、りの奉んなふ御申あり、御宮参とてひふの五色、折五うらや、ちた十うまいる、御える成カの御ようよとさ、さいううの御ちもまいらる、ちううめし

酒饌ヲ獻

日野氏勝
仁親王御
所祇候
折紙ヲ獻
黃金製
船金製
入レテ
尊教親
花袋親
王

義尚
高親王
樂門院
賜フ
嘉

よし、よろこひおやしめすよし御申あり、

廿八日、げぬの御さん成カの御さ、御しやうそくをの御ちよくらみて、し、いつをのやう成カ、さ成カはより御ま成カいり、御さのやより御ま成カいり、つふれおとく三こん御てんまむ二みて、三こんめお御さん成カある、御さ御ありより、へちして、御さう月よて、御うまらけの物ひと物など、みて、まつう成カ七おん成カありて、御さ成カいまゆの御あり、御さ御のこりありて、御さう月ある、そのうち宮に御うさへ御ありみて、どりあへす御さう月ある、をりうみ成カいらせらる、まつひる御ありり、此時、こうまね、奉ねまうちん入さるを、いらせらる、二宮に御方へ、これふくる十枝、みつきてある、

御御しやく大納言との三こんめ、御さ五こん、

七こんよく御さそうへ御をしあり、御をこれ人々よをさふ、廿九日、昨日に御さるとて、奉しみ殿へ、いらせらる、ひむらしれとうある殿へ、ある、

〔西園寺家記録〕

六十六公記

二月廿八日、武家大納言殿參内云々、當年始也、

母儀同被參、

〔親長卿記〕

十三

二月廿八日陰、入夜雨下、今日大樹

大納言、參内、去年一向、御不參、適

今年有參賀、准后之御臺殿一位、珍重々々、同有御參内、及數獻、有參會之衆召出、

參會人々、勸修寺大納言、御出、沙汰、申、源大納言、予、兵部卿、新中納言、侍從中納言、

民部卿、四辻宰相中將等也、

言國朝臣、資氏朝臣等、爲御供、各束帶也、

〔資益王記〕

二月廿八日、遙拜、大納言殿、今日御參内、御臺同御參、御供言國朝

臣、資氏朝臣、於勾當内侍局、令御裝束著給、西棟門ヲ御出、自四足御參云々、珍

敷御路也、御沓資氏、御劔言國云々、亂次第傳奏、改被申不承引、若御沓下役と

存歟、言國所存比興之至極也、七獻有之、御退出以後、則退出、御臺及深更御退

出云々、兩人共以束帶也、

〔長興宿禰記〕

下

二月廿八日、丁卯、晴、今日將軍

權大納言、義尙卿、御參内也、當年初御

參也、御臺殿、一位、同有御參、御車、亞相自閑門御參、於直廬女房對屋著御裝束、御

參御前云々、有一獻數巡入夜、深更御退出云々、

三十日、己巳、勝仁親王、義政夫人日野氏二益、香筥等ヲ賜フ、

參仕ノ人々

〔京都御所東山御文庫記錄〕

甲二十三、御湯殿上日記

二月卅日、

中、御さ并へ、宮れ

御うさより、御てうやうさ、御やんさ御かうとこ十帖、あいらせらるゝ、昨日

を御とく日なるふより、けふるいる、をりうみれ物をおさめらるゝ、よろけ

めてさし、

一日、庚午御祝、

〔京都御所東山御文庫記録〕御湯殿上日記 三月一日、あさ御さかつき、夕うさをおおし、きう上らふ御あり、

鴨社社務正四位下梨木祐宣ヲ從二位ニ敍ス、

〔親長卿記〕三十傳奏奉書案同文明十四

正四位下鴨祐宣縣主、宜敍從三位、可被宣下給候由被仰候、

三月一日

親長

藏人左少辨殿

〔鴨縣主家傳〕

二 梨木祐宣祐香卿男、同文明十三年三月一日上階連年、六歲、

〔鴨氏世譜〕

鴨縣主祐宣祐香卿子、文明十三三月一日敍從三位、

○勸修寺政顯、甘露寺元長ノ敍位ノコト、便宜左ニ合敍ス、

〔親長卿記〕

三十傳奏奉書案同文明十四

從四位下藤原政顯、元長等朝臣、宜敍從四位上、可被宣下給之由、被仰下候也、

謹言、

三月七日

藏人左少辨殿

親長

〔歷名土代〕

從四位上藤政顯 文明十四、、

藤元長 同十四、、

三日、壬申御祝、鬪鶏アリ、

〔京都御所東山御文庫記録〕

御湯殿上日記 三月三日、あさ御さく月いつ

ものぶとし、どりあひせあり、くら人くむんらくともとて、しおうさす、くきやうふちをくりまはうよて、御うしり并、どりあひせてあひまへきよしをちちさらるゝ、どりもどくのやうふのふれられ、夕の御い并ふ、ふしみ殿、めう宮も御あり、御さんへいゐいらま、ちやうゐいらま、く御を御きぬふてゐる、

五日、甲戌徳大寺實淳、紫宸殿ノ櫻樹ヲ植工換フ、

〔京都御所東山御文庫記録〕

御湯殿上日記 三月五日、略 中徳大寺實淳大將殿より、南

てんれ櫻うへうえさるゝ、

文明十四年三月三日 五日

三〇三

伏見宮
高親王御
参内

六日、公卿ヲシテ、踏歌節會ノ習禮ヲ行ハシメラレ、南殿ニ御シテ、之ヲ御覽アラセラル、

〔京都御所東山御文庫記録〕御湯殿上日記 三月五日、中あすのさちる

此事とも、二條殿へつねらゐらせられて、去つ御の御たなとさめらるゝ、ふ行去らうよて、御さうちうをせらるゝ、

六日、たうりれさちるの御しゆら并、御ひきををしよて去つ御ある、内侍も二人いてさせたまふ、ひの御さの御さん（行カ）四の御とこのやう（カ）い、さのこをさせらるゝ、かやうのきとを、大ううへたつねらゐらせられて、さめらるゝ、ふ行頭（世壽寺親長）右中辨内辨花山（政長）院、このやう（カ）人さんしやう（カ）あり、く（カ）ん（カ）くも御しこう、く（カ）ん（カ）し（カ）ゆ（カ）五位（カ）れ（カ）去（カ）き（カ）し（カ）と（カ）と（カ）れ（カ）き（カ）く（カ）とあり、さち樂々ふちちけのものともありておもしろし、御さ并の御うた御きぬりつたよて御らんせらるゝ、うのやう（カ）くろた御か（カ）く（カ）を御つれてあり、いれゐいらせられて、大さん所よてく（カ）ん（カ）あり宮の御か（カ）ふ（カ）し（カ）み殿、あんさん寺殿、大しやう寺殿さとも御ありて、ひし（カ）く（カ）とありいらせらるゝ、ふ（カ）き（カ）もあり、さう（カ）う（カ）大（カ）さ（カ）もしよりい（カ）さ（カ）るゝ、とて、御さう月あり

二條持通
ハセ給フ

奉行甘露
寺親長山
内辨花山
近衛政家
祇候
立樂
義政夫人
衣野氏被
ルニテ觀
見宮モ御

參仕ノ公
卿ヲ引見
アラセラ

豊原慶秋
ニ立樂命
ズコトナ

甘露寺親
長紫宸殿
ノ装束并
沙汰ス

甘露寺元
長和泉
ニ在リ

參仕ノ人

いる、なふのさんしの人まに御たいめんあり、おまれまよて御てうしさと
たふ、さうちやくとを申さるゝ、

〔親長卿記〕十三 正月廿二日、晴、參内、番也、中踏歌節會御習禮、予可申沙汰之由申入了、

廿三日、晴、立樂事、可仰樂人歎之由申入、可仰之由有仰、

廿四日、陰、中招縁秋朝臣、他行、慶秋來、仰踏歌立樂事、注給散狀了、

廿七日、晴、參内、第二番也、宿仕之時、踏歌樂人事等奏聞、雖爲無人數、不可苦云云、但曲之間無人、又不可然、散狀被下御爪點、舞妓事御沙汰未定、

二月廿七日、晴、參内、中踏歌節會御習禮御點被下之、

三月五日、晴、中今日申刻許參内、紫震殿御裝束並掃除等沙汰之、明日依踏歌御習禮也、

六日、晴、中今日踏歌節會御習禮也、兼日奉行職事代事、予蒙仰、雖然元長朝臣爲傍頭、爲幸事間、致拜賀者可申沙汰之由申入了、雖然此間在國（在泉）之間、

予催具了、當日事元長申沙汰也、

公卿

文明十四年三月六日

三〇六

花山院大納言、政長、兵部卿、宗綱、日野中納言、廣光、侍從中納言、實隆、姉小路宰相、基綱、季熙朝臣、

辨

元長朝臣

少納言

長直朝臣

次將

左

公夏朝臣 忠顯朝臣 基富朝臣

右

實澄 坊無人之間、渡基富朝臣於右了、

抑兼日仰云、於出御者、雖無先例、十六日節會未無出御之儀、內侍又無案內之間、可被持劍璽、然者出御之儀、可有御沙汰云々、予申云、御束帶如何、可為御引直衣歟、劍璽事、被用他御物者、可然之由、言上、猶可為御束帶之由、有仰、劍璽事、可被用代事、可然之由、有仰、爰今日仰云、出御事、御束帶如何之由、被尋仰大閣

御著衣ノ
コトヲ二
條持通ニ

諸ハ七給
次第

之處、為御習禮之上者、御引直衣可然之由、意見之間、可為御引直衣云々、然者、關白公、有祇候者、可然之由、可申云々、即領狀、先申始陣儀之由、人々著陣座、元長朝臣出陣、仰內辨於花山院大納言、々々移著端座、召官人、代管原令敷、軾軾代敷、圓座於陣、疊之、召大外記、代勸修寺中納言、問諸司、召外任奏、次召職事、藏人頭、參進軾、被奏外任奏、頭右中辨、取外任奏、堂上不返下、先催出御之儀、關白已下、職事等參候、此間下外任奏、歸昇申、可有出御之由、內侍二人、漸進出、盤所、出御、手水間、出主上出御、御路自臺盤所、自清涼殿、御帳南障子出、頭辨、鬼間進、出清涼殿、庇主上出御、御數筵道、下御、御部、御意、狀、云々、頭辨、朝東、夏候御簾、兼仰、頭右中辨、元長朝臣、冬裝、獻御草鞋、仰出、納尋、取之、藏、侍座、被御、御、扶持事、仰光忠、東、裝、被候御前、右方、璽、內侍、被用、相、扶持事、仰藏人、大內記、菅原在數、被候御後、左方、予昨日各申女中了、威儀女房例、節會之時、有兩人、依無御衣、先令著休息、御倚子給、元長朝臣、廻南面、近衛陣、可引之由、仰之、次出御帳中、劍璽置御左方机上、取次、璽置之、內侍、次內辨、著宜陽殿、御兀子、召內侍、元長朝臣、進出、內辨、起御兀子一揖、次內侍退入、內辨、謝座、昇殿、開門、闈司、召舍人、少納言、長直朝臣、著版、內辨、宣、大夫達、召才、公卿參列、謝座、酒造、正在數、參進如例、公卿堂上、晴御膳、內辨、催之、內膳代、以量朝臣參進、陪膳、采女代、勸修

文明十四年三月六日

三〇七

寺大納言、刀自代新中納言、公兼、宣親朝臣等也。爰平御盤不撤之、予見之令撤也。次腋御膳奉行事、頭辨無案內、予悉皆見計下知之。一獻國栖、二獻御酒勅使、相動之、及乘燭三獻立樂、於立樂者如例有三番舞事、仰試之處、御立樂畢、入御、奏坊家圖、取基富朝臣陣官持之、渡次將也。內辨於弓場奏聞、元長朝臣奏之、次女樂拜、兵部卿并季熙朝臣立樣有不審事、次舞妓、無人跡之由、女中兼日被歡申、雖然本儀之由、予申入之間、二人、光忠、菅原在數進出廻庭上、櫻木南頭樂前大夫、堅被仰付、兩人有沙汰、二人扶持之、兼仰了進出廻庭上、三匝歟、頭樂前大夫、諸大夫一人扶持之、歸入、次宣命見參、於弓場奏聞之、元長朝臣奏之、祿法姉小路宰相給之、直著祿所、元長朝臣同著座、勸修寺中納言、史代同著之、參議下祿法於辨、々下史、次宣命拜、各公卿下殿、宣命使季熙朝臣下殿、依入夜景其儀如常、宣命事大次宣命使歸昇、內辨同前、其外俳佃軒廊、次內辨下殿取祿、予疊紙也、令持之進次第々々取之退出、人々有御對面、今日之儀無為御祝著之由有仰、亥刻許退出、

〔後法興院政家記〕

七

三月三日、壬陰、略

自按察許申送之、付書狀於來六

日可有踏歌節會御習禮、御次第可作進之云々、舊本大略紛失之間、何樣可拾

政家ヲシテ
次第ヲ
作進セシ

松木宗綱
外辨練身
ニツキ近
衛家ノ説

政家宗綱
ニ練歩ヲ
教フ

近衛道嗣
ヨリノ傳
授

進之由、令返答、自兵部卿許申送之、來六日可有節會御習禮、外辨事可令存知、仍練身可請家門說云々、乍斟酌令領狀了、

□西降、雨、兵部卿今日衰日云々、仍明日可來之由申命之、明日余又衰日也、

□五晴、陰、微雨灑、兵部卿來、今日雖為余衰日、節會明日也、今日可令習禮間、可

授、訖由頻懇望間、授之、ヲソテ半足チカヘ也、靴ノハナヲソラヌ也、踏定時、

又片足ヲス、ム、其時靴ニテ地ヲスル也、右足ヨリ練始テ、左足ニテ練ト、

ム、練間三息也、笏持樣如例、笏ノ上カトヲミル、聊ソル也、是禪閣御諷諫分當

家流也、後深心院殿御說被授申鹿苑院、々々々被返說於後普賢寺殿、其後禪

閣御傳授也、

六日、乙晴、陰、風吹、早旦自按察卿許、以書狀申送之、今日節會御習禮、內侍等為

無案內間、為已後可有御沙汰、出御之躰、內々可為御引直衣、然者直衣ニテ、內

々可參申云々、必可構參由令申畢、申剋參內、無程被始陣儀、外任奏不被返下

以前有出御、出御躰如例、清涼殿東向南第二間ヨリ出御、々簾役頭右大辨政

顯朝臣、御草鞋頭右中辨役之、劍璽內侍自鬼間障子邊進出、余候御後、為御引

文明十四年三月六日

三一〇

直衣間不及御裾之沙汰、但御安産之時、奉引直衣之御後、次候御帳良方之圓座、立樂終後有入御、今日祇候被悅思、召由以源大納言被仰出、畏申了、次於民部卿休所有一盞事、前藤亞相、伯二位、資氏朝臣等來、舞姬進出之由申間、於紫宸殿之東方令見物、竹園二宮等令渡給、令會釋、舞姬練歸後、余退出、于時亥刻許也、歸宅後聞十種香、

〔長興宿禰記〕

三月六日、亥、晴、今日於內裏、踏躑節會御習禮儀在之、以前

如元日白馬御習禮、內辨花山院大納言政長卿被勤之、白晝被始之、自舞妓時分入夜、有立明云々、男女群參見物殊外事也云々、室町殿御臺一品、密々衣力ツギニ相交於南殿有御見物之由有沙汰、清三品見物、參役人々等注給之、見左、

文明十四三六、

踏躑節會御習禮

公卿

公卿

各束帶、或付魚袋、

內辨政長卿

花山院大納言

外辨上首權中宗綱卿有練

兵部卿

廣光卿

日野中納言

不著陣外辨實隆卿

侍從中納言

義政室日
野氏密室
見物ス

參役注文

少納言

辨

近衛

外記

奉行

采女

基綱卿夏袍祿所雜事

御酒勅使

御酒勅使

御酒勅使

御酒勅使

御酒勅使

御酒勅使

御酒勅使

御酒勅使

御酒勅使

御酒勅使

御酒勅使

御酒勅使

御酒勅使

御酒勅使

御酒勅使

御酒勅使

御酒勅使

御酒勅使

御酒勅使

御酒勅使

御酒勅使

御酒勅使

御酒勅使

御酒勅使

御酒勅使

御酒勅使

御酒勅使

御酒勅使

御酒勅使

御酒勅使

御酒勅使

御酒勅使

御酒勅使

御酒勅使

御酒勅使

御酒勅使

御酒勅使

御酒勅使

御酒勅使

御酒勅使

御酒勅使

御酒勅使

御酒勅使

御酒勅使

參木右中將雜事

季熙朝臣

宣命使

宣命使

宣命使

宣命使

宣命使

宣命使

宣命使

宣命使

宣命使

宣命使

宣命使

宣命使

宣命使

宣命使

宣命使

宣命使

宣命使

宣命使

宣命使

宣命使

宣命使

宣命使

宣命使

宣命使

宣命使

宣命使

宣命使

宣命使

宣命使

宣命使

宣命使

宣命使

宣命使

宣命使

宣命使

宣命使

宣命使

宣命使

宣命使

宣命使

宣命使

宣命使

宣命使

基富朝臣

實澄

公國朝臣

忠顯朝臣

左

右

大外記少外記代

經茂卿 衣冠持笏

勸修寺中納言

奉行職事

東帶頭右中辨

元長朝臣

今日申貫首拜賀、

陪膳采女代

役送采女代

文明十四年三月六日

三一

文明十四年三月六日

公兼卿 衣冠

參木左中將衣冠
宣親朝臣

新 權中納言
奉膳代

御膳奉行

腋御膳奉行

左門佐 衣冠 兼 造酒正代

藏人將監 束帶

内豎代

陣官人代

菅原長胤

造酒正代

大内記極 藏人 兼 内侍扶持
菅原任數

勤内記役

御後此外當官前官卿相雲客衣冠候之出御之儀如例節會

〔西園寺家記録〕

六十六 實遠公記

三月六日、霽傳聞踏歌節會今日於禁裏御習禮云々、内辨花山院大納言、其外如何可尋記、

七日、同、傳聞昨日節會有出御々直衣、關白同直衣祇候云々、

邦高親王
等ノ御申
沙汰

〔資益王記〕

三月六日、遙拜、十六日節會御習禮、爲見物參内下姿也、中將同參殿下於民部卿局有一獻、

〔大乘院寺社雜事記〕

八十 二月十一日、

一松殿中將下向、京都事色々物語、○中來十六日ニ可有十六日節會云々、内辨花山云々、

〔大乘院日記目錄〕

三

二月十六日ニ、十六日節會可有之、内辨花山、

○元日節會ノ習禮ヲ行ハル、コト、正月十四日ノ條ニ、白馬節會ノ習禮ヲ行ハル、コト、二月七日ノ條ニ見ユ、

七日、丙子手猿樂アリ、

〔京都御所東山御文庫記録〕

甲二十三 御湯殿上日記

三月七日、てさるかくふしみの、御所ノ御申さふ、とんさうけんより、御かゝらけの物五色、二うゑ

いる、大しやう寺殿より三色、一うゑいる、めうれん寺より大折二かう、二うゑいる、よとくにさしあひとてゐいられぬせは、花山より二色、一かういる、

(前書) 宮の御方より、三色御さるゑいる、御ゆつけをもおせつけらるゝ、

文明十四年三月七日

藤子ヲ内
賜フ七郎ニ

八日、昨日の御ひたうつし御さひしきとて、なふを御所くいれりらせ
らるゝ、御さか月ありて、御ひしくなり、中内新内御あちやくいよ殿
御くむ、一色又御てうしともありせらるゝ、松木まこうまで、御くむ
へよとて一つある、夜又入て、七らう御を舟よりある、よきをりふして、
うたさるゝ、しやうそくよとてしゆまふ、昨日より、ちうくおもし
ろく御あそひあり、わぶくしともゝるひるいらる。

〔親長卿記〕^{十三} 三月七日、晴、^略次參内番也、今日有手猿樂、

○復、手猿樂ヲ行ハル、コト、本月二十一日ノ條ニ見ユ、

八日、^丁畠山政長、^{政元}細川政元等、^{義就}畠山義就及^{河内}比其與黨ヲ、^{攝津}河内、攝津ニ擊タ
トシ、是日、兵ヲ率キテ京都ヲ發ス、

〔長興宿禰記〕^下 三月八日、^雨雨下、今日管領、^{畠山}畠山^左左衛門督、^{細川}細川九郎^{政元}政元、^右右京大等

發向河内國、^{畠山}畠山右衛門佐爲御敵、近年押取彼國、令在國之間、爲退治左金吾
申請有進發、^{攝津}攝津カケノ郡同押妨知行之間、^{細川}細川依爲分國、令合力畠山、兩人
有出陣、近年丹波攝津國寺社本所領、^{被管人}被管人等押領、可去渡之由、自公方堅被
仰出、^{細川}細川九郎雖令成敗、^{被管}被管輩任雅意、不應下知之間、以便宜爲追退、先被下

義就攝津
關郡ヲ攝津
幕府ヲ攝津
被管ノ丹元
波攝津ノ丹
寺社諸家ノ
領ヲ押領

スルヲ停
ム官政元
被命ヲ奉
セ命ヲ奉
山崎ニ陣
攝津ノ敵
沒落ヲ本
所領ヲ本
細川成之
同勝久同
成春等下
向セズ

向攝州、仍先可有下著山崎宿也云々、畠山相互合力、同被相伴攝州、兩人今晚
立京、一宿嵯峨、^{細川}細川、^{西京}西京、^{畠山}畠山、翌日著陣山崎云々、兩家群勢數百騎在之、後聞、
攝州敵對輩沒落、^{押妨}押妨在所被渡付本主^{寺社}本所云々、一家少々被相伴、^{細川}細川讚岐
守、^{同兵部}同兵部大輔^{守護}守護、^{淡路}淡路守護等無下向、^{京兆}京兆被管人安富一類等令在京、爲
上意京都無人不可然之由依仰也云々、

〔後法興院政家記〕^七 二月廿七日、^寅寅、今明間、^{細川}細川九郎可下國由、有世間、

就此儀、種々有浮說、

三月七日、^丙丙、晴、五靈殿大祥院令歸給、勸修寺中納言、藤中納言等來、明日細川
京兆、^{畠山}畠山左衛門督等出陣云々、^{攝州}攝州國人敵同意輩、并可令誅伐、^{畠山}畠山右衛門
佐云々、^{京都}京都雜說繁多、每日蒙々滿耳、

□□^丁朝晴、自未刻雨下、^{實門}實門令來給、晚景細川京兆、^{畠山}畠山左衛門督出陣云々、
先是兩大名許へ、^{使者}使者賀出陣事、遣太刀、

〔西園寺家記錄〕^{六十六} 二月廿八日、^略畠山右衛門督就河州出陣、人
夫事所申請也、入夜雨下、

近衛政家
政元長宅
賀津三宅
攝津三宅
城長園
寺實遠園
陣夫求

文明十四年三月八日

三一六

出陣延引

細川政國
出陣

清水谷實
久政長實
幡政銘
書ス

廿九日、朝之間、雨猶降、以高俊、人夫事高成ニ所申付也、基景、遊佐河内守許
ニ遣、人夫之返事且記之、

卅日、晴、畠山、細河明日之出陣延引云々、

三月七日、同、明日畠山左衛門督河州出陣、人夫事以遊佐河内守借用之間、廿
餘人遣之、河内守先日遣使者爲禮來謁之、

八日、朝之間陰、從晝時分微雨灑、細川九郎攝州出陣、見物貴賤不可勝計云々、
九十二三騎在之、由所風聞也、

九日、自昨日雨不止、猶終日降、今曉畠山出陣云々、與細川相共山崎ニ取陣、讚
州、越州等勢相待之云々、

十一日、雨下、傳聞、細川右馬頭出陣云々、

〔塵芥記〕

十輪院
内府記

○内閣記
錄所載

三月八日、畠山下向、爲進發河内也、細川合力云々、

廿五日、○中今日一條大納言、實久、畠山左衛門督幡銘書之、いち、爲使者遣
馬、太刀云々、此事先日余口入之儀有之、

〔大乘院日記目錄〕

三

三月九日、細川九郎攝州出陣、官領同道云々、

〔大乘院寺社雜事記〕

六十

文明十三年正月廿八日、

幕府河内
討上手杉
テ上杉氏
ヲ招致ス

箸尾某殺
サル

筒井順尊
大和勢ヲ
率キ上洛
ス

一傳聞定寬自京都罷下於中川寺說、當國并河内國打手大將可爲上杉云々、
閣關東之儀、早々可罷上之由、被仰付之間、卒數万勢可上洛云々、年始祝言
詞歟、則歸京云々、

〔大乘院寺社雜事記〕

八十

二月廿八日、小雨

一自京都申下、京都物忝云々、細川九郎出陣、在國沙汰有之云々、色々雜說共
也、不一定云々、物忝之段必定々々、

卅日、

一箸尾東於岩井川被致害了、京都物忝之間、當國牢人共、下狛邊打寄隨一、自
般若寺邊被召籠云々、不便々々、

三月一日、

一孫九郎自京都下向、細川出陣事色々及其沙汰、筒井大和衆相催、早四五百
ニテ上洛、於路次見物長池邊云々、自二條殿御文到來、細川、畠山可出陣云
々、然者一色、武田モ可在國云々、京中大名不可有之、仍河内畠山子息罷上、
可有京都由、及其沙汰云々、攝州緩怠者共、細川、河内畠山令同心、可發向之
由、内談歟云々、

文明十四年三月八日

三一七

政元出陣
延引ノ噂

義就政元
ト和セシ
トノ評

三日、

一今夜春日祭可有云々、經茂卿門前ニ被來、京都物忿也、天一神有未申間、細川出陣事、十二日ニ延引、不然者、來八日ニ延引云々、然者不可有殊事歟、筒井以下罷上無益、且不便次第歟、殊更下地ハ河内與細川和與必定之段勿論也、

五日、

一專重自堺歸參温方榼昨日付之、畏入云々、河内無殊事、細川下國事、令延引來秋了、河内堀共大儀也、見物也云々、

九日、雨下、

一自京都音信、彼下國事、來秋延引必定、不可有殊事間、珍重々々、

一昨日細川九郎出陣山崎之由、必定之旨、越智高山、椿井注進狀、古市ニ到來

之由、昌懷方より申云々、官領ハ八幡ニ取陣云々、越智出陣、伺河内時宜之

由云々、條々事實歟、雜說共多之、

十一日、雨下、

一乘盛來、條々申、細川八日夜山崎寶寺ニ著、官領并成身院一所ニ在之、惣大

大和勢ハ
淀ニ陣ス

越智家榮
義就ノ動
靜ニ依リ
出陣セシ
トス

出陣ノ勢
稍引退ク

奈良中僧
坊出陣ノ
費ヲ課セ
ラシム、ニ
苦シム

義就政長
ト合戦ス
トド政元
トハ戦ハ
ズトハ
堺ニテノ
風評

一乘院其
他諸院家
政元政長
ルニ榼ヲ贈

一和衆ハ淀ニ出陣云々、

十六日、雨下、

一出陣之衆少々引退云々、兵糧等大儀迷惑也云々、今度筒井分ニ千四百貫及借下云々、此外十市以下分々ニ申所用、奈良中僧坊以下於于今者迷惑不及是非云々、

十七日、

一扇一本古市之西方遣之、越智方卷數遣之、出陣云々、

十八日、

一秦九郎自堺參申、兩畠山可有合戰、細川トハ不可有合戰之由必定、堺北庄

ニハ、香西方者共露顯有之、細川之下地無爲ハ必定、但京之畠山堺ニ令出陣者、堺事可拂燒之由、河内之畠山申云々、堺說此分也、

〔大乘院寺社雜事記〕

一八十四年三月三日、

一春行房 定寛、書狀到來、去月十九日日付也、條々申給、佛地院間事、并山田庄事、攝州諸庄之事等也、其次申、今度兩屋形出陣ニ、寺門并一乘院殿諸院家無殘所其榼以下被付之、兩屋形大慶、且今度々々此儀無之云々、然而自當

文明十四年三月八日

三二〇

門跡一切不及音信、以外之由及其沙汰云々、依計會不成立、無力次第也、

五日、大霜下、寺家得、卯日也、

一筒井順永權律師第七年忌日也、勲行、重恩者也、不便、陣中之間、定而不可有拜佛事、去月八日、細川九郎、畠山左衛門督、兩大名出陣、山崎寶寺了、筒井、十市、箸尾以下、和州落人罷出、畠山手ニ相加了、爲畠山右衛門佐治罰也云々、大儀きこ不可成事云々、且率爾之出陣、若氣之至歟之由、及其沙汰、長陣之間、和州勢共殊更相語衆共、次第ノ引退了、越中勢、紀州勢并四國以下、諸國之群勢共可召上之、相待上洛云々、又右衛門佐方合力、伊勢國司、三乃國、江州、越前國、大内以下、如先手ニ備衆等申合云々、所詮爲事實者、大變々々、きこ不可事行歟、寺社本所之迷惑、尙々滅亡基也、無力了、或又攝州國人等、近來任雅意、細川守護得分一向不上之、迷惑之子細共在之間、令號寺社本所領再興之儀、爲攝州沙汰出陣、此次河内事爲申合、畠山俄ニ同道歟之由、所詮實否未決事也、

十一日、

一自京都書狀到來、兩大名陣替事、可爲來秋云々、夏中ハ此分在陣之由云々、

長陣ニ就
相大和衆
還相大和衆
ル大和衆

攝津國分
守納得メ
ナメ得メ
ル爲ニメ
元出陣ス

京都ニ管
領侍所ナ
行ク強盜
ス

政元ノ出
陣ハ秋庭
ノ沙汰人

秋庭等諸
國ノ兵ヲ
招ク兵ヲ
安富等諸
國ノ兵ヲ
止上洛ス

山崎ノ人
家燒ク

廿三日、

京都ハ官領侍所共以無之間、夜々強黨盜人以外也、上下用心迷惑云々、
一細川九郎出陣事、秋場、香川兩人爲帳本令申沙汰出陣、是併官領左衛門督引汲之故也、卒爾之申沙汰、珍事之由、一天沙汰也云々、讚州、右馬頭、安富、長鹽、藥師寺等ハ、右衛門佐引汲方也、無勿躰之由申合、不同心云々、秋場、香川申沙汰、諸國軍勢可罷上之由申下之、自跡又安富以下不可有卒爾上洛、眞實儀ハ重而可申下之由、申付之了、然之間、根本四國以下軍勢不罷上者、何勢共可有之哉、丹波國ハ兩陣合戰、軍中取合也、如形攝州勢計也、きこ不可事行事也、所詮大和牢人迷惑不便事也、是深重ニ蒙大明神之御罰者哉、成身筒井以下心中、違神慮事有之歟如何、無心元事也、

廿八日、

一東林院行向三乃公坊、宮壽以下同道、秦九郎自堺來、彼方無殊儀云々、

五月朔日、

一廿八日、山崎陣所、在郷在家數百間燒失了、仰天云々、彼出陣儀無心元云々、細川内之者共、各々所存有之歟、不一味云々、所詮天下御大事可到來云々、

文明十四年三月八日

三二一

△十市遠相
楯ヲ集

興福寺家
榮ヲ訴フ
義就同訴
狀寫ヲ得

文明十四年三月八日

七日、地振、金翅、
鳥動、不吉、

一二日、山崎邊不思儀出來、但無殊事、所敵自他切腹歟、陣中物忿云々、十市楯
百帖自山内令用意召上之、箸尾五十帖召上、興善院沙汰云々、山崎ハ楯共
各致用意云々、可有合戰也、

廿三日、

一自寺門以事書、越智以下惡行以外次第也、早以一勢可有治罰之由、山崎ニ
訴申云々、彼事書ウ、詫シ河内屋形ニ到來、自河内遣越智方、自越智遣古市
方、隱密也云々、於寺門學侶六方衆少々申合、致其沙汰由必定云々、無益所
行也、此大變ハ自寺門不可依申沙汰事也、尙々寺門儀不可有正躰基、珍事
々々、

廿六日、雨下、

一山崎陣延々ト在之、當國衆ハ面々申合、可入國支度也、雖然十市所存、當國
入國ハ無益也、河内儀無一定者、無詮之由申破之間、不一味云々、十市所存
ハ第一古市事難義之旨存歟、

六月七日、

洪水ニ依
リ大和勢
西岡ニ退

政國芥川
大藏寺ニ
陣ス

一今度大水ニ、山城水垂里大略流了、大和衆令迷惑引退西岡邊、武具共悉以
失之了、不運之至也、

〔翰林葫蘆集〕

六

壬寅三月、有事于攝州、(細川政國)源公、軍芥河、遂寓大藏寺、青油

白雲野意可想、而號令嚴甚、麾下士卒不妄動、是以緇徒安然、焚誦如故、余
得々訪源公、留者數日、所恨無飛錫解軍之策、時方寺中櫻花盛開、吁洛陽
亂後名園榛棘、不見花之如此者、不能無感、仍賦唐律一篇、東輝、節心、兩玉
人、花下傾蓋、余口誦之、二老見和、不獲止書以贈云、

古寺荒涼芥水涓、源公此地擁旌旗、風腥丈室燒楮處、塵暗長廊繫馬時、晨梵香
殘雲漠々、夜禪燈淡月遲々、山中禮樂依然在、吟斷櫻桃花下詩、

〔興福寺年代記〕

文明十四年三月八日、(論明)細川宗命、畠山尾張守同津國下向、

〔東寺百合文書〕

〇三城十六之四十

陣夫之注文之事

合 文明十四年正月吉日始、

正月 日數廿三日、御所夫之分、日數十九日、田分、又十四日、京分、十三日、山分、

八屋三大夫

文明十四年三月八日

三二三

富田山崎
京都ニ詰

東寺陣夫
ノ注文

以上七十七日、

同月ニツムル分、日數十五日とん田ニツムル分、

兵衛次郎

以上日數三十九日、

五月、日數十四日、山サキニツムル、又十四日と

芋谷十大夫

以上卅七日、

六月、日數十八日、山サキニツムル、

おとち大夫

以上日數卅六日、

又日數九日、山サキニツムル、

同 大夫

以上廿日

四月、日數十一日、山サキニツムル、又十日とん田へツムル、

大家 大夫分

已上三十三日、

小豆谷

五月、日數十六日、山サキニツムル、又十四日とん田へ、

衛門分

以上日數卅日、

五月、日數十三日、山

八屋谷左衛門

七月、日數十七日、山

東大夫分

同月、日數十六日、山サキ

淨徳分

とん田ニツムル、

八屋光大夫

とん田ニツムル、

田中 二郎三郎

日數十三日、山

與二郎

日數十七日、山サ

王神大夫

惣已上三百七十一日、代十八貫五百五十文、

○政長、政元等、陣ヲ攝津ニ移スコト、六月十九日ノ條ニ、政元、畠山義就

ト和シ、京都ニ歸ルコト、七月十六日ノ條ニ見ユ、

十日、大内政弘、豊前津隈莊ノ地ヲ、毛利弘元ニ知行セシム、

〔毛利文書〕十

豊前國京都郡津隈庄分貳拾町地、池永彦次郎事、有子細所預置也者、早守先

例、可被知行之狀如件、

文明十四年三月十一日 十二日

文明十四年三月十日

(大内政私)
(花押)

三二六

毛利少輔太郎殿

十一日、庚辰勝仁親王御所ニ手猿樂アリ、

〔京都御所東山御文庫記録〕御湯殿上日記 三月十一日、略中夜よ入て七

らうりうめし、御りよてうふふしみ殿も御りいり、

〔塵芥記十輪院内府記〕録内閣記 三月十一日、略中依召參宮御方、手猿樂等沙汰也、

此内一人逢辻切云々、事雖苦々敷、又有興者也、

十二日、辛巳上巳御祓、

〔京都御所東山御文庫記録〕御湯殿上日記 三月十一日、略中あまのみれ

日の御たらゑともある、おとふき御らむせられて、御りあそびす、とん

しもちのやう新中納言もめす、

十二日、御たらゑいさるゝ、御やうのうゑ所へとくり御かて物、御ひとへ

らひくいつる、きよくら人まこう、

〔塵芥記十輪院内府記〕録内閣記 三月十一日、番二番所役語公夏朝臣、上巳祓人形

陰陽頭土御門有宗
形上巳祓人
形ナ祓ズ

辻切

内藤七郎
ヲ召ス

橘寺ハ大
乗院知行
所

越前騒亂
ニ依リ通
行無シ

柳片ワタ可進云々、仍可然様可致了見之由即申了、戸部可談合長橋云々、

十四日、癸未大乘院門跡前大僧正尋尊、大和橘寺ニ禁制ヲ掲グ、

〔大乘院寺社雜事記〕八十 三月十四日、

一橘寺より制札事申入之、書出了、大ニ書様也、比興々々、

禁制

橘寺

右寺者、一天無雙之靈場也、別當大乘院家御知行也、不可有軍勢甲乙人
等亂入狼藉之狀如件、

文明十四年三月日

奉行法眼和尚位判

○畠山政長、細川政元等、畠山義就及ビ其與黨ヲ河内、攝津ニ撃タント
シ、兵ヲ率井テ京都ヲ發スルコト、本月八日ノ條ニ見ユ、

田中貞信、南御所義倫ノ所領近江林寺關代官職ニ就キテ、請文ヲ捧グ、

〔寶鏡寺文書〕一山城

南御所さま御れう所はやし寺御せきの事、おちせんの國ふつそうよより、

文明十四年三月十四日

三二七

六百疋進
大路開カ
バ公川チ
増スベシ

文明十四年三月十六日

三二八

北國のたう迄去りくどち候あいふ六百ひきのふん御くようとりさ
た改いたすへく候、かん時たりと申候とも、はうろあき候て、人と改り候ハ
ハ、御くようのかそをいたし進上申へく候、もし御くようふさたの儀よ
おいては、かん時たりとゆふとも、めしはあされへく候、このむね去るへ
きやうよ、御ひろうよあつるへく候、

文明十四年三月十四日

佐々木田中
貞信(花押)

御ふきやう所

○貞信、林寺關代官職ノコトニツキテ、請文ヲ南御所ニ捧グルコト、文
明二年二月十七日及ビ長享二年六月十八日ノ條ニ見ユ、

十六日、^乙勝仁親王御所御蹴鞠始、

〔京都御所東山御文庫記録〕^{甲二十三}御湯殿上日記

三月十六日、宮の御うさけ御

仁和寺入
道静親
王妙法院
覺胤殊
院良殿聯
輝軒永崇
御見物

まりとしめ、御かゝりてあり、御むろ、めう御所、さけのうち殿、れんき御志
んふつよゐり、

〔親長卿記〕^{十三}

三月十日、晴陰雨下、參内、^略○中仰云、親王御方御鞠可申沙

汰云々、御人數伺之、相觸來十五日云々、

延引

松殿忠顯
蹴鞠參仕
ヲ請フ

參仕ノ人
々々

十五日、雨下、今日御鞠延引、

十六日、陰、御鞠今日之由有仰、相觸了、各領狀、忠顯朝臣御鞠參仕所望、仍奏之、

可參之由有仰、今日參仕之輩、

源大納言、^(龜田)雅行、夏菊亭大納言、^(公興)予、葛橋水干、^(去年)サイミ、藤宰相、^(永繼)葛
同、宣親朝臣、^(中山宰相)頭右大辨、^(頭右中辨)元長朝臣、^(忠顯)朝臣、^(基)富朝臣、^(源)富仲等也、

賀茂輩

貞久縣主

親王御方葛袴也、及晩細雨下、即被止了、但早々被始行之間、二時許有御鞠、予
窮屈、

幕府、建仁寺大昌院住持龍澤^天、ヲ同寺住持ト爲ス、是日、龍澤入寺ス、

〔翠竹眞如集〕^二

東山建仁入寺

山門

先東山曰、白雲不會說禪、三門開向兩邊、別有新東山一句、大雲降澤一雨大千、

喝、喝、

佛殿

文明十四年三月十六日

三二九

佛殿

山門

文明十四年三月十六日

三三〇

現在佛不拜過去佛，具、坐只要展三尺炊巾，坐斷汝廣長舌。

土地堂

斯大日本國名之神國，流通王法非汝無功，流通佛法還吾始得。

祖堂

諸祖傳法偈，古今欠翻譯，試聽山僧下注脚，咄達磨不會九年面壁。

室間

盡乾坤，一柱杖，有麼々々，來量吾頂相。

帖

一大藏教有這々消息麼，是什麼消息，鞭狸奴白牯立地成佛，驅四海九州齊躋

壽域。

山門疏

作麼生是山中佛法，山花似錦澗水如藍，若言漏逗不少，且聽格外玄談。

諸山疏

南北東西寺，紅花映白花，置疏又手諸和尚來也，春色隣家。

道舊疏

道舊

咸淳尊宿，元祐老成，白髮惟公道，春風不情。

江湖疏

江湖

元龍湖海士，豪氣激波瀾，新長老澗，何異鮎魚上竹竿。

同門疏

同門

這一封莫是鰲山悟道書麼，別々弟兄欣盡歲寒心，見楊花飛人驚雪。

衣

衣

昔有人，其一人曰痴，(痴)其一人曰頑，(頑)以斯破被付補陀一山，(一)以之傳佛海，(良勝)々々

三傳致東山老顛頂，掛肩看々一把柳絲收不得，和風搭在玉欄干。

登座

登座

劈破蟪蛄眼，放出五須彌，灯王々々，作與吾床龜。

祝香

祝香

明超兩曜，功準四時，東山万歲之聲，昔年聞之於嵩岳，北洲千年之壽，今日見之

於闔浮。

祖香

祖香

周公旦輔西周而下，白屋士，(梁度)率土歸仁，裴丞相歸東都，以營綠野堂，太平有象，伏

文明十四年三月十六日

三三一

文明十四年三月十六日

三三二

願金湯佛法，黼黻皇猷

嗣香

嗣香

古曰：嗣香有三也。上士嗣怨，中士嗣恩，下士嗣勢也。嗣怨者如火裡真金，嗣恩者如歲寒松柏，嗣勢者如春風楊柳。這片木頭，歷劫無名，何分上中下，拋向爐中，穿却只豈其名不見其面。天柱座元鼻孔。

垂語

垂語

有句無句，雪捲星飛，且道古佛與露柱，相交第幾機。

提綱

提綱

孤峯頂上結草菴，双眸掛松，罵雨呵風，則孤負先佛遺訓，九重城裡負樛栳，全身入草，揚塵簸土，則埋沒自己靈光。是故山翁不出山，溪翁長在溪，不如野翁來溪山間，上友麋鹿，下鳧鷖，坐斷兩頭，不墮一轍，恁麼也得，不恁麼也得。紫燕黃鸝，說示真如妙理，春蛙夏蝩，跳出解脫深坑，說甚麼保壽開堂，推出一僧，談甚麼羅山陞座，顧視大象，這個是外邊光繞，那個是祝贊一句。拂拂云：金勒馬嘶茅草地，玉樓人醉杏花天。

自敘

自敘

某學識昏蒙，如臥輪無伎備，威儀勃率，類布袋掣風顛，不勝汗顏，各乞賜恕。

白槌

白槌

開堂之次，共惟南禪堂頭大和尚，才充于中，學顯諸外，三代之時，無佛初見佛德，光明五岳之外，有尊忽現，尊特身土，茲蒙尊鳴槌光賁，法席靡勝，悚戰之至，伏望道昭。

諸山謝

諸山謝

又共惟天龍堂頭大和尚，々々，等持堂頭和尚，譬如他土并，縮四万由旬，光明殊妙之身，而來瓦礫荆棘之土，證明丈六卑小劣應身之說法，必詣各寺，以戴千輻輪之相，各乞慈照。

鹿苑謝

鹿苑謝

又恭惟鹿苑堂上老師大和尚，潭々德宇，靄々仁風，朝大明宮而賦熊峯之詩，端的承万象師表，罷華嚴會而開鹿苑之席，最初轉四諦法輪。蘆花深處不問薔薇古洞之春，往以拜蘆花深處之月，伏望慈悲。道昭

兩序

兩序

又恭惟山門東西諸位西堂和尚，單寮蒙堂前資辦事，江湖名勝，暫到高人，一會

文明十四年三月十六日

三三三

拈提

海衆諸位單_(師下同)雨雖逐一贊揚盛德今日開堂專祝聖壽不交他語同賜昭亮

記得法雲善單雨開堂之日僧問和尚今日開筵如何施設師云雲綻家々月春來處々花僧云恁麼則四衆咸依人々有賴也師云昨日春風起今日陽鳥啼在大法雲誤作時節會若有人問新東山今日開堂如何施設即對他道折主丈七尺八尺滿面春風

小參

小參

鈞語

鈞語

暮雲欲雨山月未昇拈丈暗中信手摸索只有山形鳥藤新長老口掛壁上汝代我演說宗乘參

提綱

提綱

目前無法心在目前心外無法滿目青山凡爲住持者皆夙昔願力現也豈偶然哉昔宏智單雨住圓通之日一夕夢中得一聯佳句曰松徑蕭森窈窕門在至時微月正黃昏經數年不省其夢來由其後避建炎之亂過浙東抵天童天童景德寺適主者退席松徑蕭森殘月朦朧初省夢中一聯也師飯且過不說名字其中有識宏智者報

自敘

之便府々々喜曰夢神人報云天童主人乃隰州古佛也即出帖請之被且過兄弟硬鼻乃入方丈一住三十年也繇是見之則爲住持者皆前定也山竺避應仁之亂東ノ西或時深山裡誅茆以遮風雨或時古渡頭舞棹以送晨昏然后帝城之北古營之側僦屋以容膝常厭市聲喧擾也去歲之夏歸于本山拾瓦礫荊棘構一室而佚老庶幾暮年之勞得暫償乎自去斯山屈指側十五年于茲舉目有山河之異豈得無感乎人來說住山之事則引素公所謂吾福薄不爲人師之語以揶揄之吾佛海隻履西皈之後已閱百十餘年未有一个半介出續斷絃者屹々自興秦無人之嘆吾高曾祖痴絕道中老師見蜀本宗派錄至密菴成德不出一人掩卷下淚於是乎慨然弘密庵之道然則古亦有此嘆乎今迫鶴書赴隴幡然自起者其意在茲乎今夜月色朦朧松徑蕭森一似天童夢中之境不免醒后又作夢中之看未審夙昔有何願力如斯哉可怪焉東山小參別無家訓可述借鳥有先生之口說濕州古佛之夢以開家宴侍者々々點一椀茶來爲吾原夢看喝一

自敘

某碩鼠々々只欲飲食以眠蒼蠅々々胡不爲人之喜請恕之

諸謝

諸謝

文明十四年三月十六日

小參之次共惟雲叢東堂大和尚前身慈濟菩薩大象已雖老猶可截恒河之流德臘海雲比丘臥龍縱不吟時又下娑竭之雨不愧為宋地万人傑本朝一國師的裔曾居慈濟今居海雲年八十八也

常在堂頭大和尚常在鷲嶺拈華而付身相金色之頭陀親到龍潭点灯而接口如血盆之學者吾門微此老則吾其左衽乎龍潭派

五葉東堂大和尚思甘棠於萊公之栢經秋彌蒼畫五葉於花光之梅添雪又別老者安之少者懷之衆所賴也秋栢號也

定惠東堂大和尚說文字禪而端居一室僉曰文哉從周成住持佛而荐董茲山允矣登而小魯輿論所皈名實相稱后人模範也諱都再住東山故曰文哉從周

給孤東堂大和尚闔浮洲立八万四千基寶塔見育王之役鬼神給孤園布一百二十院黃金推空生而為長老先宗之德被兒孫者大哉迨其挾風雅轡誰不虛左乎給孤祖師月窓自造八万四千小塔

護國東堂大和尚臨濟正宗派謂之文章正宗亦何妨瑞岩主人公喚作風月主人寔有故也瞻之忽焉在前吾其瞠若于後

東旭西堂和尚數年不相逢洞口雲深無月東旭梅雪村之裔其察今夜初得見號洞雲近日自但州來

前村雪裡有花所喜諸徒團爨令人坐春風和氣之中

喜定尾西堂和尚煉千七百衆於文武爐盡出佛鏗鉗鎚下跋八十一人於僧寶傳

皆游鏡堂翰墨林可謂名下無虛士鏡堂作僧寶傳跋嗣佛鏗

勉仲西堂和上行除浮花如讀古尊宿之錄脚踏實地頗有閑道人之風承佛光子元顯光

佛國之后裔興寶福寶德之故家

合浦西堂和上白雲丹岳坐對匡廬畫圖明月夜光爭似合浦異產永源之門屹

然頽瀾砥柱也惟忌之惟忠有白雲丹岳齋軸

斯立西堂和上趨庭而學詩學禮憶共侍先師移居而買宅買隣生季况同甲子

誰道鸚鵡咤晚一飛則冲天刮目以待清樾心田之子同年同隣

又惟山門兩序東班都寺單而監寺單而古德叢林惟設監院後來添都寺以梳庶務其才美則雖連年不易其職故有三都寺有三次監寺所欲者潔已憐他歲

計有餘若又庶務秋閑則出作梅花庄主載得十万斛德香糶與春風亦得也悅衆單而洞裡嫩菘之色挽回却外春風架上爆桶之聲喚起晴天霹靂龍生龍子

者也

副寺單而々々々々煉醍醐作乳煉乳作醍醐要逢作家手段陶米粒去沙陶沙

八年
前真
如寺
住

去米粒宜著日用工夫、

直歲單市二十五聲点長掉棒打月一百八撞鐘罷擊桐院天、

西班牙堂中座元禪師接黃檗於首座板能助南泉化儀(密溪西堂)入丹霞於禪會

閣曾留西岩偈頌茲語八年之前山埜董真如之席龍澤真如寺住持下ナレ

見ノ條二和上分半座以嚴叢規不踰月勿和上相次視真如之篆今丁山埜入寺

之初又屈和上居板首相次爲吾山住持者其例可攀有始有序夫聖人乎祝々

後板座元單市漢祖初出豐遂爲太公作新豐與家宜致輪奐之美夏后不居越

後封少子號於越歸鄉屢有錦旋之榮遠分荷玉之流者非此人乎后板出新豐

記室單市西來無意菴前古栢參天北斗藏身天上白榆向曉書記東沼之子栢

身有北斗藏已透兩重公案莫効賈嶋凍牀翫流俗文字者庭之孫東沼遺傷

知藏單市々々々々打動瑞光鼓彈壓地上菩薩聲比丘聲翻轉勝定經洗定窟

內窟外上座部大衆部二子如双白鷺之不染塵泥、

知賓單市花下啜茶搜攪佛祖腸胃紫門敲月送迎賓客往來莫失雪豆禪月之

舊職、

侍香單市吐詞驚群曾在東山書記說法者再助我在側恰似南陽侍者應諾者

三、至其機智玲瓏吾亦有分結舌前捏(筆力)不可測者也侍者德凌首座在

上堂問禪夢昇天宮待龍華而坐知足親見地藏賦牡丹而慕清涼人皆矜式實

群玉連城也、

小參問單(釋)孜孜勵學不讀非聖之書默々谷神勿藥無妄之病爲江南古佛的孫

要聽梅花百首遺韻、

捨謝

讀日子了雲堂清淨大海衆現前一會諸位單市古曰幽蘭所生其草皆香美玉
所積其山有光吾山之謂也不亦盛乎、

拈提

記得吾祖妙慈(一應)弘濟單市初住四明鰲峯之日據室曰任公之釣一掣六鰲若是

跛鱉盲龜咄縮頭去此老雖截盡釣竿不解重栽竹山埜喝一喝續款乃之曲云、

白雲爲餌雨爲絲釣得六鰲歌竹枝可派朝宗滄海瀾何妨跛鱉與盲龜久立珍

重、

翌日開山塔拈香

大日本國山城州東山建仁單寺新任住持小比丘某進寺翌早率大衆入蓮華藏

文明十四年三月十六日

捨謝

拈提

開山塔拈香